
彼方無双～どきっ現代技術ばかりの三国志～

C I A 捜査官

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼方無双～どきつ現代技術ばかりの三国志～

【Zコード】

N8193M

【作者名】

CIA捜査官

【あらすじ】

ひぐらしのなく頃にこの世界から帰ってきた彼方しかしそくまた違う世界に飛ばされる。

前作の彼方のなく頃にタイムスリップ編は読まなくてOKです。

又歪みねえという贊美の心
だらしねえという戒めの心
しうがないという許容の心を持つてる方と駄文でもいいぜという方のみ是非読んでいてください。

感想、意見ばんばんください！－お願いします！

主人公紹介?とひぐらしのなく頃にであつた」と。（前書き）

兄「作者だらしないね。読者の皆さん許してやつてね」

主人公紹介?とひぐらしのなく頃にであつた」と。

「どうも作者です」

「どうも前原圭一です」

「この度は特になにもあつませんが、紹介していきます」

「まずは何があるんだ?」

「山狗のことです。あつちの世界でクビになつてしまつたので、チームに吸収しました。なので現時点では、山狗は昭和ではなく平成にこる」とになります

「そんなのありかよ」

「作者は『都合主義なんだ』

「そのへん根性叩き直してやるよ」

「おひ彼方先生」

「先生はこりないけど」

「まだだ、まだだスネーク

どん

「間違えて撃つちまつたよ

「はあはあ、次は一回目の主人公紹介です。ぐふ」

「大丈夫か、大丈夫か。くそつ、作者の死無駄にはしない」

一
心配するような価値はその男には無いよ

一
ひ
で
え
W
W
W

渡辺寛もとし佐々木彼方

卷之二十一

髪に黒て短髪

基本軍服

（うまい）（ちゃんと買ひ。）（がいい）喧嘩をやめられた。

戦闘能力化け物ガンダムが干いても余裕で倒せる

自然回復能力

重傷（骨折、アキレスかいぐなど）だと治りが0.0000000001秒くらい。

これらは全て、戦場で怪我を繰り返した結果らしい。技は多すぎて、紹介できない。殺さない拳法や剣法を使える。逆に返り血を浴びないように殺したりする技もある。

逃走能力は戦闘能力の遙か上をいく。彼方の脳内には、スーパー・コンピューターがあり、必ず逃走できる方法をたたき出す。（自分の

都合の悪いときにかつてに発動する。ある意味予知（

元の世界では社長、年収、10京円という超金持ちだが家は一戸建て。各のお偉いさんは仲のいい友人というよりもはや親友。

工藤澪

髪は黒で長く結っている。

服は基本黒のゴスロリ服である。

18歳だが、見た目からして大人の女性に見える良い意味で。彼方をからかうことが好きらしい。彼方本人は困っている。表情には出さないが。

戦闘能力は彼方の十分の一くらい。

彼方自体戦闘能力はてななので比べようもないが。料理はめっちゃうまい、正直言つて、三ツ星じやすでに評価できないレベル。変な薬を作つたりするらしい農薬なども開発しているようだが。

スネーク

ご存知のとおり、メタルギアを破壊して、世界を救つている英雄。澪の食事が大好き。

新型のレーションを作つたりしている。

兵士達から尊敬されている。

仕事が忙しいが、最近は彼方がメタルギアを叩き潰したりするので暇でよく彼方の家にいる。

ここだけの話、ギャラばねえらしい。

鳳1こと小此木隊長

チームの中隊長だが兵士からの人気と信頼が高い。

軍隊の階級は中佐。

彼方に能力を認められたので、階級は高い。しかし彼方自体階級は

あまり気にしないので チーム内では階級は余り関係ない（自分より階級が上でもタメ口OKのため）

チーム

本作品すでに登場した チーム。

構成人数4000000人の世界最強の軍隊、デルタフォースだろうが足元にも及ばない。デルタフォースが100だとしたら、チームは1000000くらいである。

身体能力、戦闘能力は異常であり一騎当千なんて楽にできる。

はいろいろ分けられており、小隊100人構成。中隊1000人構成。大隊10000人構成。

連隊は100000人になる。

その中に装甲師団や輸送隊、諜報部隊がはいる。（山狗は チームの中でも中隊で諜報部隊に入っている。）

募集資格。生きる覚悟があるもの。三食（お代わりし放題。）保険つき。

なぜか身体能力や性別のこととは書いていない。

主人公紹介?とひぐらしのなく頃にであつた!」
（後書き）

感想じんどんお願いします。

第一の世界恋姫無双～第一話～何処の世界でもドン パチする彼方。（前書き）

「ああん作者だらしねえなーーー！」

「うよ、何をするつもーアッ-----」

作者は性 裁されました。

第一の世界恋姫無双～第一話～何処の世界でもドン パチする彼方。

やあ俺は佐々木彼方軍隊を辞めて今は自宅警備員をやってるんだ。
ああ？誰が二ートだつて？

まあいい、実は違う世界に行つてたんだけど戻ってきたので家でジ
ュースを飲んでいた。

そんなとき、携帯がやかましく騒ぎ始めた。

この状況でかかつてくるとか空氣読めよこのくそ携帯が。

「はい、佐々木ですけど」

だるいまじでだるい。

「大将今どこにいるんですか？」

澪からの電話でした。

また面倒ごとなんですねわかります。

「JAPAN」

ちょっとふざけてみる。

「今度言つたら拷問フルコースですよ。それはいいんですが今大統
領からお話がありまして、とにかく速くアメリカに来て下さい」

ま・た・か。

しかも今しつつとすゞい発言しちゃつたよね～澪怖いでしょ～う・・・
?

「俺、引退したんだけど」

「へへ、正論を言つてやつたぜ！」

「大統領がどうじても」

「ジリーの頼みなら仕方がない。わかつたよ30分で行く
食事とトイレスはゆづくりしたいしね。

（梨花 side）

「本当に行つてしまつたのね」

まるであることが昨日のようだわ。

彼・・・いいえ彼方は立派だったわ。

最初から諦めるなんて選択肢がないんですけども。
あの事件はもう数週間も前のことだったわね。

懐かしいわ。

古手梨花、いや彼女の仲間もまた悲しんでいたのだ。

「梨花・・落ち込まないでください。またきっと会えるのです」

「羽生に言われなくてもわかつてるわ・・・ありがとう彼方」

今度は私たちの奇跡の力で彼方を呼んでやるんだから…！

「梨花そろそろ学校に行きますわよ」

「わかったのです

きっとまた会えるんじゃなくて会つわ。

絶対絶対必ず！！

彼女の意志はつい一ヶ月前とはまつたく違っていた。
彼女も又熱い心を持ったのだ。

そして彼女達はこう考えた“ずっと下を向いて泣いてたら彼方も喜ばないだろ”と、全くこれほど意志はそつあるまい。

～彼方 side～

俺達は武装勢力を倒して、テントで明日の作戦会議をしていた。

「じゃあこれでいいか？」

思つたより時間がかかるてるな。
武装勢力のやつらもバカじやないってことか。

「はい、流石ですね。でも、なんで引退するんですか？」

「疲れたから・・・かな? とりあえず今週中に殲滅するぞ」

「そう・・・ですか

澪は察したよつておひがひトントンを出て行つた。

俺は殺すということに疲れた。

今まで人を殺してきてよく発狂しなかつたと思つ。

「じゃあ俺も寝ますか

漆にぬやすみといつて自分のテントに戻る。

内乱、紛争、昔も平和では無いけど少なくとも國の中でもンパンチはそこまで多くなかつただろうなんてことを考えながらゆきくじ田を閉じた。

・・・・・

「は？」

見渡す限り荒野だった。

このパターンもしや！
また異世界フラグですか。

『あんなところに人が』

第一村人？発見だ。

俺はそいつらに近づいて話しかける。

「あのーすいません！」は何処でしょつか？」

そのいかにも昔の賊ですよ的な痛い奴に話しかける。

「おおひよ「わざ」ことひにおり、あんた金田の物全部おこしていきな

はあ？何いってんのこの人？

「いつへん死んだ方がいいと思つぞ」

言つてやつたぜ。

その賊つぽい3人組をどう顔で見る。

「なら死ね」

3人組の中の一一番小さいのが刀・・・いや剣を抜く。

「服は傷つけるなよ」

あらら命より服の心配ですか。
少しだけお仕置きが必要かな。

「わかつたんだなふん」

太った奴が剣を振りかぶる。
それをひょいと避ける。

「おつと、もうこれで正当防衛だな

でかいのと小窓のに一発ずつ喰らわせる。

「ぐふつー」「

「覚えてやがれ!」

「こまどりそんな台詞詠うんでも言わないよ」

あ、あこつらはチンピラか。

でも逃すのもあれなんで落ちてる剣を拾つて兄貴っぽい男に投げつけてやつた。

「ぐわああ、足が！！」

「因果応報、や」

まあその連中は放つておくことにした。

少しばかりの金と剣を2本（投げてない方）拝借させてもらつたが。あれ？やつてることわざの連中と変わりなくない？いや氣にしたら負けだな。

そして1時間変わらない風景の場所をさ迷いながらやつと小さい村についた。

さつきの連中に道を聞けばよかつた。
村に入ると村長っぽい人に話かけられる。

「これは旅のお方。今、村は黄巾の連中に襲われています早く村を去つたほうがいいですよ」

「では、そ�します」

面倒は御免だからな。

さつき拾つた剣があれば襲われても大丈夫だろつ。いざつてときはバレないように銃を使つだけだし。

黄巾つて三國志のかな？

んなことを考えていると遠くで砂ボコリがたつてているのが見えた

「ん？なんだあれは、黄巾と操の旗か、よしスナイパーライフルで」

勿論サプレッサーつきだ。

銃弾を放つ。その瞬間黄巾党の頭の頭が吹っ飛ぶ。

「恨まないでくれよ」

「なんだ!? 頭が頭がやられた皆逃げろ!...」

「華琳様賊どもが混乱しています」

「なぜかしら?」

「報告します! 敵総大将死亡!」

「なにがあったの」

「斥候によりますと何かで射殺されたとの報告です」

「なにか、ね」

「やはりあの占いは本当だったのでしょうか?」

「もうすぐわかるはきっとね」

華琳はそう言って笑みを浮かべた。
心ではその者を自分の物にしたいと考えて。

「！？なんだろ寒気が・・・」

疲れてるのかなあ？

「街へ

やつと街についたか。

あの場所からまたまた数時間歩いてやつとたどりつけた。

この街は結構大きい。

しかし街に入つてから妙に視線を感じるなあ。

「変な格好ね」

「警邏に連絡したほうがいいんじゃないかな？」

「ワオ！町民に相当警戒されてるなまあしょうがないね。この服だしなあ。

「ややあ～」

「くッくッくッそんなに怖がんよ。別に痛い」とするわけじゃあねえんだ

この世界の賊出現率歪みねえな。

「おー、兄ちゃん勘弁してやれや」つとこつて肩を握つている手に力を入れる。

「ぐわああ

やっぱ折つちまつた。

「すまんのう力加減まちうつてもうたわ

満面の笑みをうかべていつ。

この時の俺の顔は大層悪い奴だったんだろうな。

「おつおぼえてやがれ」

それしか捨て台詞のレパートリーないのな。

「助けてくれてありがとうございます。あの、お名前は？」

「名乗るほどのものではない

思つたんだけど格好つける必要なかつたよな？」

「黄巾党が攻めてきたぞ！」

「またが、仕方ないに行くか」

「黄巾どんだけだよ本当に。」

（城壁の上）

「いいでいいか

スナイパーライフルを構える

「あれが、よし」

一発の銃弾が頭にあたる。

「ぐはっ……」

無駄な殺しはしないと思つてたのにな。
所詮人殺しは人殺しか。

「頭！頭！。頭がやられた逃げる」

「夏侯淵様敵が引いていきます」

「伝令！敵総大將死亡」！――

「詳しく教えてくれ」

「はっ。敵総大將は何者かによつて射殺をました」

「こんなにも西軍が入り乱れているのに狙撃とはできるものなのかな？」

「おおやまこなさうひとすらかりますか」

その場を立ち去つたとあるが呼び止められる。

「おこ兄ちゃん金田のもとおこつけや」

「こつらのせいで。

「断る……。」

剣で賊の体を真つ一いつにする。

「はあ全くへりつ奴らばかりなのか

ん？あれはどうの軍だ？

「何処かの軍みたいたが旗印は・・・公と十だな十はビリの軍だ。
ちかずいて探つてみるか」

「君が公孫贊かい」

「お前が天の遣いつて奴か」

「俺の顔に何かついてる？」

「すまんすまん。人の顔をじつと見ちまつて」

「そちらの女性は？」

「こつらは趙雲だ。密将としてうひこて貢つてゐる

「今後よろしくお願ひします」

「へりつやみへりつ」

「きたよつですな」

「伝令、黄巾党が動いています」

「朱里今すぐ戦闘準備に入つてくれ」

「わかりました皆さん戦闘準備に入つてください」

今から戦か、でもあの服ってポリエステルだよな。
てことはあいつもタイムスリップしてきたつてことか。
しかし話しかけれないしな、発信機と盗聴器でも仕掛けよつかな。

ピュンぴー

「なんか今、音しなかつた?」

「気のせいではないですか?」

「つして戦いのひ蓋は切つて落とされた。

「さて手伝つてやるかな」

「皆合図があるまで頑張つてくれ!」

スナイパー・ライフルで援護してやる。確実に一人ずつ仕留めていく。

急に敵が倒れたためか本郷軍に動搖が走る。

「なんだ敵が急に倒れたぞ」

「まさか最近噂になつてゐる、地獄の暗殺者ー。」

最近つて今日来たばかりなんだが。

「手を貸してくれるとこいつとか」

「いやまさか、気分によつて変わるからこそだ」

「今日は氣分が良いくことか?」

「たぶん、だから大丈夫だと思つ」

「酷い言われようだ。泣いてもいいのかな?」

ジャーンジャーン

銅鑼の音が響き渡る撤退の合図だ。

「皆の者撤退するわー。」

「応ーー。」

敵は調子に乗りまんまと策に引っ掛かる。

「数だけは多いな。仕方ない機関銃でも使うか

射程距離まで近づきフルオートにも関わらず、頭を吹っ飛ばしていく。

今思つた弾足りなくなるんじゃね?と。

まあいいか。

「ひい助けてくれ。ぐわ！」

「敵が混乱しています。今です、全軍反撃に移してください」

「ひい本郷軍が戻つて来た逃げろ！撤退だ、地獄の暗殺者も現れたぞ逃げる」

お~お~俺の評価じつじつになってるんだ。

「俺もそろそろ逃げるか」

「伝令、黄巾党に増援が到着その数20000

弾がないからロケットランチャーで我慢してくれ。手早く準備して総大将のところにぶつ放す。

「20000そんな」。どうする孔明殿

「困りましたね」

「伝令、敵総大將死亡」！――

「え、どうこいつ」とっ

「たぶん最近噂になつてゐる、地獄の暗殺者でしう

「地獄の暗殺者？それってなに」

「はい、最近、巷で噂になつてゐるのはありえない距離から黄巾兵の頭を撃ち抜くということで地獄から来た暗殺者と呼ばれているみたいですね」

「ウーン、もしかしてあれかな？」

「心あたりがあるのですか？『ご主人様』

「俺の世界、つまり天の世界に銃つていう、武器があつてね。矢よりも速く遠くまで届く武器なんだ。までよてことは俺と同じ世界から來た人がいるつてことだ」

なるほど一刀とやらも俺と似た境遇なのか。

「つまりその人に話を聞いたら何か情報を掴めるかもしれないというんですね」

「ああ、そうこう」と

「しかし、今、『ご主人様』が言つた、地獄の暗殺者はいろんな国が血眼になつて捜してますよ」

俺も有名人（指名手配犯的な意味で）になつたもんだな。

「じゃあどうやつたらここに連れて来れるんだ？」

「『いちいち』、捜すしかないでしょうね」

しかし三国志の登場人物が女性というのは変だな。

本郷一刀のせいか。いや、もしかしたら俺のせいかもしれない。た

だ」これが正史ではなくパラレルワールド、とこいつは解った。

「Iの話は城に帰つてからこいつか

「はい、それにその者を見つければ、名声とかなりの戦力が期待で
きますから、何処の国も捜しているところです」

さりげなく俺を利用しようとして発言が聞えたがきのせいでよな。
うんきつとそこ違いない。

「よし俺たちの居場所に戻るつか

「はい」

「疲れたのだー」

「鈴々、油断するな、いつ敵が襲つて来るか分からんのだぞ

「愛紗に言われなくとも分かつてるのだ

「いい仕事したな、そろそろ離れるかな見つかるよーーし

それにしててもこいつをじてると目の目が殺し屋としての目が
騒ぐ。

（夜）

「今日は野宿か

なんかこいつのも悪くなこと思つてしまつ。

がさつ

草が動く。

「誰だ！」

「まさか彼方か？」

まさかの知り合いか。
心臓に悪いぜ。

「やあスネーク、元気だったか」

「あんまり元気とは言えないな」

そりゃそうだろ？

「スネークもタイムスリップだよな

しかも2回目。

「ああそうだ」

「ああ、そういえばこの前のメタルギアはどうなった。一応日米連合軍は動かしたんだが」

あの変な機械を作つてる連中は頭がいかれてんのか？」「ひつ考えるのは失礼かな？

「助かった。かなり精練されたいい兵士だった。装備も最新式だつたしな」

ジニーのが大統領やつてる国だもの弱いわけが無い。

「スネークは武器持つてるか？」

「MK2ピストルとオペレーターなら持つてるが」

軽装備だな。

「なら、ジャベリンとVSS狙撃銃を貸そう。あ、そうやつスネークはこれからどこに行くつもりだ？」

「とりあえずこの国の首都に行こうと思つてゐる」

首都は落陽であつてるよな？

「じゃあ田舎地は同じだな。ここからだと三日はかかるな

実は適当に書つてゐるんだが。

「お前、いつの世界でもやらかしてゐみたいだな。地獄の暗殺者つてかなり噂になつてるぞ」

「有名になつちゃつたみたいでね」

「とにかくこれを見てみろ」

「いい銃だ」

（相変わらず良い腕だ）

「マカジン容量を増やした。7発から15発に増えた。そして『ザートイーグルの欠点の衝撃は二分の一に抑えることができた』

意外と苦労したが。

「凄いな、かなり扱いやすくなってるだろ?」

「勿論軍でも使いやすいとわかつたら使うつもりだ。後、カスタマイズできるようにレールをつけてをいた。レーザポイントを装備でさる。試し撃ちをしてくれ」

パスパス

「消音か。かなり使い易い、リコイルが少ないおかげで肘も痛くならないし、スコープも付いててスナイパーライフルと変わりないくらい強いな」

やつぱり消音機能はないとな

「そいつは試作品だからスネークにやるよ

「ありがたい」

「スネーク、聞いてくれ、もしかしたらこのさき賊に襲われるかもしない。だが、極力銃の使用は避けてくれ」

俺が言えた立場じゃないんだけどわ。

「使えばすぐに噂になり、いろんな国の軍が捜しに来るからだろ？」「

「流石はスネーク、察してくれて助かるよ」

それでも察してくれるスネークは流石。

「だから刀をやる。使えるよな」

実は剣だがツツ「ミミ」が帰つてこなかつたのでスルーすることにする。

「大丈夫だと思うが。以外と軽いな」

「そつちの方が使いやすいだろ」

といつか力の問題じゃあ・・・俺なんにもいじつてないし。

「お心づかい感謝する」

「今日はもう寝よ。明日は早く起きて一刻も速く洛陽につきたい」

今日は色々ありすぎて疲れたというか徒歩移動が地味に一番効いたかも。

しかし二人は知らなかつた。洛陽は既に白装束しかいことを。

第一の世界恋姫無双～第一話～何処の世界でもドン パチする彼方。（後書き）

文才がほしいなあ。

～第一話～洛陽への平和な道のり。（前書き）

直しました。

～第一話～洛陽への平和な道のり。

「スネーク、朝だ起きる」

中々起きないスネークをこれでもかと揺する。

「ん、ああ、今起きる」

スネークがこうなのは今に始まつたことじゃない。
へたをすると殴つても起きないときがある。

「朝食はカロリーメイトしかないからこれで我慢してくれ」

実は1週間前の奴だが言わないでおこう。

「ロシアのレーシヨンじやなきやなんでもいいわ」

喉が詰まるんじゃないかつてくらいがつがつ食べる。
カロリーメイトは食べて見るとわかるけどかなりパサパサしてるん
だよね。

少なくとも水を持つて無いときには食べたくない。
このあたりがスネークの良」ところ?多分。
てか、良いところにしてあげよ。

「随分大袈裟だね」

「軍のレーシヨンは最凶だからな」

最凶ビームの話では無いんだけどね。

まあ不味いってこと。

「家の軍はレーシヨンかなり不評だから、いつもカロリーメイトだぞ」

確かにレーシヨンは不評だけど戦場食としては間違いなく人気だぞ。スネークは味と量があればいいらしいが。

「そうだつのか知らなかつたぞ。そういうえば食糧はどのへりにあるんだ?」

「もうないよ」

「ああそつか。つてどりこり」とだ!」

「そのまんまの意味だけど」

そのまんまだねう。

「じゃこの後の食事はどうするんだ!」

「街で摺ればいいだろ?」

その後も30分くらいスネークが騒いでいたがらちがあかないのでさつさと行くことにした。

どんだけ食にこだわるつもりなんだろ?。まともな人がいないよほんと(・・・)

（道中）

「ヒーローで洛陽にはこいつくれんだ?」

「昨日三田はかかるていつたんだけど」

「すまん、聞いてなかつた」

「実は言つてなかつたwww

「まさか、ボケたんじやないよね」

「まだボケてない。それよつこの大陸は戦争が多いのか?」

あ、「じまかした。

「今よりは多いんじゃないかな。国は実質機能してないし」

違つたら「めん中国大陆の人たち。

「だつたら国民はじうなる」

「今は戦争より内紛やクーデターの方が多いのさ」

話を反らすための話題なのに結構真面目になつてない?

「何処の時代も変わらずか」

「やつこひ」と

「なり治安も悪いのか?」

「国」と云違つぬ

今みたいに中国つて一つの國じやないからね。

「それはどういふ意味だ?」

「要は戦国時代つて」と

これならスネークも納得するだろ?。
・・・納得しなかつたらどうしよう。

「だから国が多いし、支配者も違うのか」

あ、納得した。

「ナニ? ことになるね。スネークはここが外史つて知つてたか?」

「まあだいたいは。一回田だからな」

慣れつて恐いよな。

あが外史かは知らないけど。

「そういうことだ。で、さっきの話の続きだがクーデターや内紛があるといつたる。だからこいつら辺は賊が出やすいということを」

「物騒だな」

いや元の世界みたいに銃でドンパチしてん奴よつまシだから。

「仕方ないさ、地方は国の政治が届きにくいんだよ。国が腐ってる

んだ。そういう輩も増えて来る」「

これは今から何百年続く問題だからな。

悪いのって山賊になるしかない人たちなのか、墮落した国なのかどうちなんだろうね。

「つまりその政府が崩壊すれば、また戦争といつとか

「やうやう」と

多分な。

中国の政治体制なんてしらんし、唯一分かつてるのは共産主義ってことくらいか?

しかもそれって現在の話だし。

そんなとき草むらから噂の山賊が出てくる。

「兄ちゃん達金田の物置いてけや」

山賊の台詞はそれしかないのか?

「噂をすればなんとやら、だな」

スネークが刀（剣）を抜き三人の首を飛ばす。

「ひゅう　流石!」

「命を粗末にするな。死にたいやつから前に出る」

まあ確かに普段刀を使ってないスネークといつても、まず素人は勝

てないだろ？

「死ねやあ！」

スネークが刀を素早く三回振る。

流石といふか何といふか。

雷電の刀捌きをみて覚えたとか？ありそ？だな。というか峰打ちする気はさらさら無いのな。

「ひい、逃げる。殺されちまつ」

わつきスネークが殺すつて堂々と宣言してたぞ。

「流石スネーク強いねえ」

「コンバットナイフしか使つたことがないがこれは使いやすい」

「賊はやつぱり多いだろ？」

スネークに聞く。

「まさか本当に出来うとは思つてなかつた」

スネークってあれだよな、絶対詐欺とかに引っかかるタイプだよな。

「弱いから会つたら刀の練習と思えばいい」

我ながら酷いこと言つてるよな。

もしこれが俺達の過去の世界なら好き勝手しないがここは俺達の過去の世界じゃない。

だから“少し”派手にドンパチするのさ。

「確かにこの先なにがあるかわからんだからな」

心配だよスネークが食い逃げで捕まらないか。

「スネーク、街が見えてきたぞ。何にしても服を買わないとまずいな」

スネークのスニーキングースーツは変に目立つから兵士に見つかった瞬間アラートだよ。

「解った。にしてもあの街の活気がすごいな」

そりゃ街に活気がないと困るしな。
いや、この時代ならは結構多いのか？

「何でも天の御つかいが治めてる街らしい」

「天の御つかい?なんだそれは」

スネークにしては珍しいな。

てっきり情報を手に入れてると思つてたよ。

「要は俺達と同じ異世界人つてことだ」

「なるほど」

「その件についてだけど、盗聴器と発信機を天の御つかいに仕掛け
ておいた

「随分手際がいいじゃないか。ところどその天の御つかいの名前は？当然知ってるんだろ？」

まあ、職業がらむつこつのは調べつけまつしな。
もう引退したけど……。

「勿論、本郷一刀だ」

胸を張つて言ひ。

「本郷一刀、か。お、やつと街の入口についたか」

「やつと着いたか。じゃあわざと行ひ」

やつぱり街の人々に紛れるとわかるけどスニーキングースーツは最高に
目立つてる。

「昼食がやつと食べれるぞ」

飯しか頭にないんかい。

とりあえず服屋に行つてさつさと着替えをして食事をとることにした。

「似合つてないのか？」

「似合つてないのか？」

逆にスニーキングースーツの方がよかつたかもしけない。

変に目立つてゐる。というか違和感が・・・ね。
30分歩いてやつとついた。

「店についたぞ。金はあるけどあんまり食べないでくれよ」

店に入り椅子にかける。

「いらっしゃいませ」

「肉まんと小籠包3個ずつ」

「かしこまりました」

数十分で料理が来た。

「お待ちどうさま」

ガツガツ

スネークがつつきすぎ。

見てるこつちが恥ずかしい。

「美味しい。この前のよりも美味しい」

「確かに、かなり美味いけどスネークはもう少ししゃっくり食べてよ」

その後もがつつきながらスネークは食べてたわけだが店の人曰
がかなり痛かつた。

人前でもうスネークと食事するのやめよつ・・・。

「そろそろ、宿を取りに行かないと」

「やうだな」

「おばけやん美味かつたよ」

「まつたくだ」

なんでそんな誇らしげなの?
本当に伝説の英雄か怪しいよな。
伝説の英雄なんだけどさ。

「嬉しいこといってくれるじゃないの。またきておくれよ」

おばけやんの声がやたらと男らしかったがそこは触れないでおく。
とゆうか触れたくない。

その後宿をとりにいったのはいいんだが文字が書けなくて戸惑つた、
がスネークが何とかしてくれたので助かった。
潜入以外でも役に立つこともあるんだなあと切実に思つたよ。

「まだ夜まで時間があるしこら辺を探索でもするか」

「わかつた」

俺たちは別々に外に出た。

スネーク side

「アメリカとは違つた町並みだな」

メイリンが住んでるのがこここの場所なのか。
まさに中国4000年の歴史だな。

どん

普段ならぶつから避けるが、少しボーとしていたみたいだ。
いかにもな連中にぶつかるとは・・・俺もまだまだだな。

「ああ 肩が折れた」

「兄貴に何してくれとんじやあ」

日本にいそうなやつらだ。
ここは中国だが。

「今ので骨が折れたら、カルシウム不足も良いといふだ。何なら俺
が本当に折ってやるうか?」

兄貴と呼ばれてたやつの肩を掴んで力を入れる。
いかにも骨が折れた音がする。

「アアアアア」

「兄貴、兄貴大丈夫ですか?」

「お前らむしろなつたくなかったらわざと失せら」

殺氣をこめて叫ぶ。

「ひい、化け物だ」

心外だな彼方じやあるまいし。

「凄いなあんた、本当に肩を折つちまつなんて」

近くにいた奴に話しかけられる。

「なに、たいしたことない」

さて、これからどうするか。あまり騒ぐとまずいんだよな。さつさ
といこから去るか。

人混みに紛れる。

「さつきの人は？」

「さあ？」

「さつさこで喧嘩があつたというのは本当か！」

「チンピラが旅人に突つ掛かつたのですよそれで旅人が肩を折つて
退散させたのです」

「それでその者は何処に？」

「さきほどまでいましたが、何処かに行つてしまつたようです」

「どうしましようか、ご主人様」

「別にほつといても問題ないと思うけど。悪いのはチンピラだし、街の人達に怪我があつたわけじゃないしね」

でもなんか気になるな。
別に逃げる必要はないと思うんだけど。

「『主』様がそつおつしゃるのでしたら」

「一刀様、 そういえばその旅人変でした」

町人が言つ。

「変？」

「はい瞳の色が青でした」

「外国人かな？ でもこの時代に？」

うーんと考え込む一刀であつた。

↓ side out ↓

俺は街をぶらぶらしてたんだが、スネークが急に走ってきた。

「どうしたの？」

首を傾げて質問する。

どうせまたやらかしたんだろう。
だいたい想像できるし。

「まさこになつた

「チンピリ絡まれたとか？」

それで相手に怪我させて騒ぎになつたとかだろ？

「その時相手の肩を折ってしまった。それで軍の警備隊が探してゐる

随分派手にやつたな。

怪我させた相手がまさか國の高官とかじゃないだろ？

「それはまずいな。なら速く宿に戻りつ」

（宿）

窓を開けて外を見る。

「そこまで、警戒はしてないよつだ。いたくなつたら、やるしかな
いけどな」

まあ一人の捜索だしなあ。

【スネーク隠れろ】

【わかつた】

小声で会話する。

「はー、何でじょつか？」

いたつて普通の口調で応答する。
こつしないと怪しまれるからな。

「ソレから辺で青い瞳をした人を見ませんでしたか？」

「何かあつたんですか？」

「詳しく述べわからぬのですが、本郷様から探せとの命令が出ていました」

「心あたりはないですね」

「ソレ協力ありがとうございました」

兵士が次の部屋に行く。
にしても青い瞳とはね。

「スネーク出てきていいでぞ」

にしてもなんでスネークを捜し回るんだ？何か特別な理由でもあるのか？

「…」

俺はそこではつときずいた。

青い瞳そりやあこの時代で青い瞳なら誰でも捜すな。

「行つたか？」

「ああ、大丈夫だ」

「なんでこなに捜すんだ」

「だぶん、違う世界からきたことを知ってるんだろ。だから、見つければ情報を集めると思つて探してるんじゃないか」

「捜されて見つかれば間違になく利用されるやんなのはほんだ」

本郷一刀の噂からそんなことはないことと思うナビ一応な。他の軍の連中は利用しようとするんだろナビ。

「とにかく今は逃げることが先決だ」

「「」の地域一帯の中では俺がマークされてる」ことにな

大丈夫中国大陸で捜索されてるから。

「ああ、まだ勢力が小さいから捜索範囲は広くは無いだろ。勘づかれる前にこいつからずらかつた方がいいな。まあでも明日まではまだ大丈夫だろ。ただ、明日は速く出よう」

「ああ、俺もやうしたい」

「じやあ今日は明日に備えて速く寝よう

また早寝早起きか。

たまにはゆっくり寝てゆっくり起きたいよ。

「ああ、わかった」

「よし、わかつて行こう」

あの街から数時間は歩いただろうつな。多分。

「本郷一刀の領地は抜けたか？」

ああ、明日には洛陽に着くだろう

多分、な。

「やつらが、追うのはいいが、追われるのには良いものじやないな

それは誰でもやしないか？

「俺は全国指名手配されてるけどな。この世界で」

「大変だな」

たしか彼方元の世界でもって、3回全国指名手配になつてるよな。

今絶対失礼な」と考えたな。

「自分でやつたことだからな、別に後悔してないさ」

「急に話が変わるんだが、この前のメタルギアの話だ。核弾頭が搭載されてなかつたが、なにかしたのか？」

色々とねテロリストどもはあまり強くなかつたね。

「今その核弾頭は日本海溝の10000kmの所にあるもちろんメタルギアを所持していた組織は壊滅、構成員はCIAによって全員逮捕。死人なし、良い結果で終わった。国連からもスネーク宛に感謝状が来ていたぞ」

少しでしゃばり過ぎかな?

「聞いてないぞ」

「まあ、メタルギアについては一切語られないからな。まあ、家の机の上に新聞と一緒に報告書のつかかるけどな」

あの書類この前濛が捨てたつけ?やば。
まあいつか。

「情報が漏れるとまずいんじゃないか」

「大丈夫だよ、まさかそんな所にあるとは思ってないだろ?」

そら國家機密の書類がゴミ捨て場にあるとは思わないわな。
多分もう炭になってしまっているだろうが。

「灯台下暗しだことか」

そんなレベルじゃねえけどな。

「せうこいつ」と。そういう最近、治安が悪いのは知ってるだろ」

「ああ、世界各地で紛争、内紛があると聞いている。俺も現地に行

つてきた

よし話題返りし成功。

「俺も現役復帰だよ。紛争がおおくてな。テロリストどもの装備が新しくなって来てな。EJからも支援要請が来ている。スネークにも手伝つてもらつてるぞ」

あれはEJじゃないわ。国連だった。

「まさか」

「ああ、表向きは国連からの依頼になつてゐる。アメリカからの支援を受けてこることを知れば世界から叩かれることになるからな」

多分叩かれないと思つナビジニー支持率99・9%だし。

「そうだったのか。そろそろ、口が暮れてきたな」

『氣づけばもう夕方だ。』

「ああ、そうだな今夜はここで野宿だ。今日は何も無いが我慢してくれ

「構わない」

よかつた。

また文句言われるかと思つたよ。

「せつあわじの川の水を汲んできただが。飲むか?」

「遠慮しておくれよ」

生の魚はOKで生水はダメってどうこういとなの・・・?

「俺は先に寝るわ」

スネークはそここうと毛布をかぶつたあと眠ってしまった。

靴の音がする。

「ま・た・か」

「くつくつくつ金田のもん置いてきな」

「あらり」とな夜更けに「古勞わまだな。

「この世界の賊は金田のもん置いてきなってしか言えないのか」

「んだと、聞いて驚くなよ俺達はあの黄巾賊だ」

知ってるよ。

頭に黄色い布巻ことるだろうが。

「！」苦勞様

そう言つた瞬間、三十人いた兵士は真つ一つになつた。

「こなだけ騒いでも起きないスネークは色々な意味で凄いな」

もつとも素手で人を斬っている、彼方も凄いのだが。

失礼なナレーションが聞こえたきがするぜ・・・。

「ま、いつかもう寝よっと」

毛布を巻かないまま寝てしまった。

(
翌朝)

「スネーク行くぞ！起きろ！」

スネークの横つ腹を蹴飛ばす。
が、防御される。

「起きてたの？」

「たつた今な」

そいつはすまなかつたね。
といつか殺気に反応するのな。

「さっさと行くぞ」

「ああ」

もう少し易しい起こしかたは出来ないのか？

「無理」

「俺なにか言ったか？」

「どうせ、もう少し易しい起こしかたは出来ないのか?」とか思つて
るんだろ。顔に出てるよ」

「…?」

やつぱり人間じゃないな。

人間じゃないとか思つてるな。

それにその顔なら誰でもわかるよ。

そんなこんなで俺達は洛陽に向かつたのであつた。にしても嫌な予
感がするぜ。

そのとき彼方達は既に洛陽が白装束の手に落ちていたことを知らなかつた。

～第一話～洛陽への平和な道のり。（後書き）

これからも頑張ります。

～第二話～歪みある彼方。（前書き）

「作者……最近は……世に隠れどったのか?」

「いえそのよつなことは決して…」

～第二話～歪みある彼方。

とつあえず洛陽に着いたので俺達は洛陽の街を見よつと思つたのだが、人の気配が全くない。

「さて、どうします?」

スネークに聞く。答えには期待してないから大丈夫。

「怪しいが、一通り見て回るか」

「せうだね」

2、3時間でぱつと見る。

「本当に誰もいないな」

「ああ、とりあえずもつ一回みてみよう」

流石落陽広いなあ。

「寛そいつは必要ないみたいだ。あっからきてるが」

白い服を着たどこかの宗教みたいな連中が槍やらなんやらを持ってこつちに歩いてくる。

「あの連中なんだと思つ?」

「昔のテロリスト」

「確かにそう見えないこともないな」

でもその答えは間違ってるよ。

あれだから中東の人とかじやないからね。

「白い服か、正しく不審者だな」

「スネークのスニーキングスーツも十分怪しいと思つがな」

素直な意見だ。

「潜入だけには使える」

「確かに。何にしてもまず目の前にいるやつを倒しますか」

「わかつた」

「抜刀八分桜乱れ斬り」

「どうだい僕の一撃。

2、300人は斬つたが至る所から沸いて来る。
気持ち悪いよ。何か酔つてきた。

「沸いてくるね」

「見ろ人が「ミのようだ！」

某大佐だらしねえな。

「バルス」

「はあ～～田が田が～」

「なんだ今のは」

「氣にすんなよ」

突つ込んだら負けだスネーク。

「つおおおおお」

スネークは素早く何回も刀を振る。

白装束の死体が地面に大量に転がっている。

「どうだ！！」

「まだくるよ」

「これじゃきりがない」

「諦めんなんよ。諦めんなお前！俺だつてこの一度のところの螺旋が採れるって頑張ってるんだよもつと熱くなれよ……」

そんなこの戦闘熱が出てたのかな？

「一閃龍桜」

「どこのから沸いて来るんだ？」

「誰か沸かしてるんだよ。いわいの妖術つてやつだ」

「何でわかるんだ?」

スネークは不思議がつていたが納得したのかまたと白装束を斬り始めた。

「みじかにいるからわ」

あいつも違う世界の奴だつかな。

「成る程。そいつも人間じゃないのはわかつた」

流石スネーク勘が良いな。

そりや魔法使いは間違つても人間には部類はしないだろ。

会話をしているがその間
も敵を斬つている。

「きりがないな。ついでに今まで2456人目だ

「2458じゃないか?」

「一人まだ死んでない

あ、今死んだ。

「よくわかるな」

「うみえて、化け物と呼ばれてるんだぞ」

悲しいがな。

「納得がいくな。寛の場合には鬼神と呼ばれてもおかしくないからな」

「なんでも皆、そういう評価なんだりつ。後、脱出するんだ。掘まれ」

「じつあらそだつ？」

「「」ハヤるのや。神速移動」

久しげりにすると疲れるな。

「「」まひ」

そつ声をあげたときは既にじりかの関所の前に立っていた。

「「」は何処だ？」

やつぱり久しげりにやると色々あれだな。

「じつやうり戦場のよつだ」

「よし黒いロープを着るんだ怪しげが顔が割れなくて便利だ」

「確かにな」

「スネークは隠れててくれ」

援護してほしにしね。

「わかった。でもひとつだけ言わせろ、最初からあの技を使ってくれ

「そいつはすまなかつたね。ちょっとお話してへる。ふつー・

陣の何処かに着地する。

「衝撃が結構あるな。おつ、本命の奴が来たみたいだな。」

物陰に素早く隠れる。

(流石彼方化け物じみてるな)

それを見ていたスネークはつぐづくそう思つたのだった。

「あの会議は、酷かつたね

「まあ仕方ないですよ。壱紹さんですし

まあ一刀が言うのも分かる。

「確かに

「お困りのようだな

「誰?」

敵だったらどうするんだと言つたといひだが今はそんな場合じやない。

「情報を渡しにきた、善良な市民や。」この大将は頭が悪いみたいだからな

「ははは」

苦笑する一刀。

「大変だな。小国だと立場も弱いしな」

「確かにそうですね。それで情報とは」

そんなに気になるのか？

「ああ、忘れてた。この軍隊の集団を見るかぎり反董卓連合軍のはわかる。これは変でもなんでもない。だがそれなら、洛陽に人がいてもおかしくない。でも居なかつた。これはおかしいまあ言いたいのはそれだけだ」

「確かに、私たちと戦うなら、軍を整えるばずです。それに町の人人が一人も居ないのはおかしいです」

「この子は天才だから大丈夫だらうとは思うが。

「つまり誰かが偽の情報を流してることか」

「そつなるな。あくまで、可能性としてだが」

一刀の命を狙つてるのかもな。

「その可能性が一番高いでしょう、戦をさせて得をする人達がいれば間違いありません」

流石名軍歸すぐわかっちゃまつのか。

「わかつたのはこれぐらいだな。じゃあ後は自分で頑張ってくれ

その場からさしつかへて立ち去りまつとする。

「待てー。」

武将だらつ・・・。

その武將に平び止められる。

その反応が普通なんだが。

「・・・はあ

厄介なのに見つかったな。
スネークきずいてるかな?

「何者だー。」

「善良な市民や」

少し間違つてるかもな。

善良じやなく悪徳かな?

「ならば何故、そんな不審な格好をしている。敵の『元候ではないのか』

敵の斥候がこんなに目立つ格好してるわけないだろ？

「愛紗違うんだ。この人は、情報を提供してくれた人なんだ」

「御主人様は黙つていてください」

「なんか勘違いされてるみたいだな。さつさすらかりますか」

「逃がすな。捕らえろ！…」

「つか！スネーク見えるか？」

兵士まで集まつてきやがつた。

「ああ、よくみえる」

「やつてくれ」

スネークはスナイパーライフルを構えて袁紹軍な
兵士に狙いを定める。

「ぐは」

「地獄の暗殺者だ」

「逃げる、魂を取られるわ」

ははは、どんな噂流れてるんだろ。

「ひい、助けてくれ」

「大丈夫か？」

最後の兵士を撃ち殺して喋る。

「ああ、相変わらずいい腕だ」

「なにを！」ちや「ちや 言っている。 いくぞ！」

「ふつ、踏み込みが甘いな」

キンという音をたてて関羽の持っていた武器が盛大に吹っ飛ぶ。スネークにとつてはあの切り込みも相当甘く見えてたみたいだ。

「ひゅう~ナイスショット」

「これくらい当然だ。 さあ、早く脱出しな。 後ろから兵士がきてるぞ」

「了解。 スタングレネードでもくらうてくれ」

閃光と耳をつんざくような音が放たれる。
流石の猛将も目が眩み耳が聞こえなくなる。

「くつ！」

「神速移動」

「流石だ。 速かつたな。 0・01秒だ」

本来ながらの技もつと速くなくちやいけないんだけどね。

「数えてたのか。いやそれこそしても、武器に弾を当して弾を飛ばすなんて、やるな」

「冷静にやれば簡単に当たる。それに、富竹にはまだ及ばんぞ」

『富竹さんは自衛隊の射撃教官つてレベルじゃなーからね。

「確かに、銃を持たせたら、天下一品だらうね」

「経験の差を簡単にうめる実力を持つている。そして、狙撃兵に重要な、冷静で、余裕を持つている」

「あのスキルはすごいよね。普通は無いものだよ」

状況判断にも優れるしね。

そうすると『富竹さんたちの軍に誘いたかったな。

すると大きな声が聞こえる。

進軍を開始したようだ。

「動きはじめたか」

「どうするんだ？」

「うつと行って暴れて来る」

「まじめだとこなす」

そんなに心配なのか。

(彼方に殺されるとは、敵も可哀相だよな。)

「わかつてゐるって。兵士に変装してこれでよし。じやあまた後で。
高速移動。さてこきますか」

「ノイズ！」

心！

「敵を蹴散してやる」

いい声だよ。

「いちら鳳2。応答願う」

「一」ちら鳳6異常無し。後方から、敵の奇襲」

「了解。本部から指示があるまで待機」

「了解」

「こちら鳳一、鳳と雲雀、鳶は後方の敵に当たれ。白鷺はバツクア
ツップだ」

鳳1こと小此木が指揮する山狗部隊。

チームに統合された今は戦闘、諜報ともに優秀になり、チーム内ではかなりの信頼を受けていた。

「なにあいつらがつくで喋つてんんだ」

「気にしてる暇はないぞ。すぐ迎撃だ」

「行きますか。なるべく普通に戦うしかないな」

普通の加減が出来るか怪しいけど。

「聞くえるか」

「ああ聞くえるよ」

「派手に暴れてる奴がいる。多分そいつがその部隊の将だ」

ならそいつを捕まえて武勲でもあげるか。

「了解上手くやるわ。」でも十分あたるからな

「わかった、兵力的にはこっちが勝つてる。相手は突っ込んで来るだけだ陣形も綺麗じゃない。上手く相手すれば簡単に倒せるな」

見えてんのか?ここからあそこまで何があると思つてんだ。
何気に弓を持つていなかつたついね。

「了解だ、大丈夫こっちには三国一の軍師がいるんだからな」

流れ矢が3本飛んでくる。

「あぶねえ。通信を終了する」

銃弾より遅いのが救いかな?

「了解」

「行くぜ、つおおてこや。おつや、こんなもんか?」

並み居る敵をバツサバツサと斬つていぐ。
手加減してるとつもりだがこれはアウトかな?

「すうじいな」

「俺達も続かないとな」

「よし行くぜ」

「つかつか

俺?の戦いつぶつを見て兵士達の士氣も上がったようだつた。
やっぱり手加減できてなかつたのか。

「士氣が高まりましたね。何かあつたのでしょうか?」

「何であろうと今が好機です、一気に殲滅します」

「敵の士氣があがつたか。しづがない撤退だ!敵を突つ切るぞー!」

「華雄覚悟」

「邪魔だ雑魚！」

いかにも猪つてかんじですね。
そしてあなたは雑魚にせらわれるんですよ。

「雑魚ですとも。一閃」

どす、と鈍い音がする。

「安心しり、峰打ちだ。と冗談はさておき、敵將華雄捕らえたり！」

「將軍がやられた逃げろ」

「追撃します」

「仕事は終わった。高速移動」

やつぱり久し振りにやつてるせいか、気分が悪い。

「速かつたな」

「これくらいは普通だよ。10kmも無いんだぜ」

「十分だ。ところで連合軍は真っ正面から敵に突っ込んでいるが、
大将の頭はいかれてるのか？」

的を射た発言をする。

「ああ、純粹にいかれてる。MAXでな」

「折角の精銳が全く活かされていない」

スネークが言うんだから間違いないんだろうけど精銳だったのか・。
といふことは袁紹で相当株落してるんだな袁紹軍。かわいそうに。

「まあ、仕方ないさ。大将があれじゃあな」

「同じ軍人としては恥ずかしいな」

同じではないだろう。
多分な。

「一般人の方がまだいいかもなでも小此木みたいな奴が一番いいけどな」

「へつくしょん。誰か俺の噂してやがるな。大将か?」

「風邪ですか、隊長?」

「大丈夫だ」

「?何か今知り合いの気配が」

小此木か？

「本郷隊が前に出たぞ」

「前線はただでさえ混乱してゐる元氣に混乱するだらつが。ほんつどどうしようもないな」

数で押し切るつもりか。

力押しは被害が増えるからやめた方がいいんだけどね。

「まともな奴はいないのか」

「いても聞く耳もたないだらうな」

あの大将だし。

「こいつそのこと殺つちまつた方がいいんじゃないのか？」

「かもな。さて本郷が困にされる前に何とかしないとな。ジャベリンはあるか？」

「ああ、あるぞ」

「よし貸してくれ。ここつなげここからでも届く

何処にしまつてたのかは来になつたがここで聞くとなんか負けのような気がしたのでやめた。

門に狙いをつけミサイルを発射する。
派手な音をたてて門が崩壊する。

「吹っ飛んだ。田舎だ」

「兵が退いていくぞ」

「三國志的に、ここはシスイ関かな」

「洛陽までは？」

「まだ、関がある。しかも最強のな

「なんだそれは？」

「虎牢関だ」

「ジャベリンで吹っ飛ぶか？」

「門は簡単に吹っ飛ぶさ」

ただ守つてる武将が・・・ね。

「行くのか？」

「ああ、物見遊山でな。」いつを着るんだ

「兵士の服と変装マスクか

「よし、自然に混ざる感じで行くぞ」

でもスネークの目が青だから簡単にばれるんじゃね?と思ったのは

「ここだけの話だ。

あいにくカラー「コントラクト」は持つてなかつたんでね。

「わかつてゐる

「スネーク、掘まれ

「これでいいか？」

「ああ。よし行くぞ、同時高速移動

「だめだ、やつぱり慣れないな

やっぱ吐きわたり。

「仕方ないさ。特に初心者は」

「初心者?まあいい。潜入したが、ここから虎牢関まで歩きか

「健康のためだと思つて我慢してくれ

「わかつたそいつで納得しようじやないか

聞き分けがよくて本当に助かるよ。

それから半日くらい歩いて虎牢関についた。
普通に行けばよかつたよ。

「でかいな

「そりゃあ中国一堅牢な関だからな

あくまでそう思つてゐるだけだが。

「動くみたいだな」

「小国ながら、かなりいい条件を出せたようだ」

「よしショータイムだ」

「喧嘩の時間だな。お兄さんは大好きだよ」

殺し合いと喧嘩はまた違つ。

まあ喧嘩で死人が死ぬこともあるが。

「いくぞ」

「了解」

「駄目です。数が多くすぎて防ぎきれません!」

兵士もあせつてゐるようだ。

「・・・でる」

「呂布將軍お待ちください!」

門が開いて一人の少女が出て来る。

「大将かな?自分から出でくるとはいひ度胸だ」

「・・・

「勝負してくれ」

「いいの? 本当に?」

「はつはつは。愚問だ全力できな」

豪快に笑い飛ばす。さあ、呂布の力見せてくれよ。

「さあ、いくぞ! !」

世界を越えた不運な自宅警備員彼方VS飛将呂布

「いくぞ」

武器のぶつかつた音が響く。

いつきにいくつもりだったが、流石に手を抜きすぎたか。
気絶させることも出来ないな。

呂布がこっちに向かつてきて、持つている武器で攻撃していく。

「甘い甘い。この程度簡単に対応できるぞ」

「一強い」

「そんなに強くはないさ逃げるほうが得意なんですね」

くう流石は呂布いくらか重い攻撃かくる。ちょっと力を抜きすぎた
かな。

だがこれならどうかな。

「いくぞ。無殺剣一閃」

呂布を斬る。

「安心しろ峰打ちだ。スネークこいつはかたずいた」

「さうやどすらかるぞ」

「C4を仕掛ける」

プラバク設置。

よし、これでいい。

「爆発するぞ。門から離れろ！スネークいくぞ」

「ああ」

スネークも機敏に行動する。

C4が爆発して門が吹っ飛ぶ。

「よし洛陽に入るぞ！」

「了解だ」

（洛陽）

「相変わらず誰もいないな」

「連中入つてきたぞ」

「本郷軍だ」

随分入つてくるのが早かつたな。

「白装束の奴らが動いたぞ」

「またあ？ しうがねえ、いつちよやるか

本当の狙いはやはりこいつちだつたか。

「ああ。 ショータイムだ！」

「少しだけ、力をだすぞ・・・。閃刀・抜刀平切り」

息を大きく吸い家屋」と一気に切り伏せる。

音と同時に数千の白装束の首が落ちる。
それと家が倒壊する。

(寛だけは敵に回したくないな。)

「かたずいた。 次」

家の持ち主さんたちすいません。

「あつちだ」

「了解。高速移動

やつと感覚が戻ってきた。

「何者だー。」

「そんなことこいつてる場合じやない

お堅い人と話できるのか？

「次から次へと沸いて来る

「はあー。殺刀・地獄切り」

洛陽全体にいる白装束の連中を四つに切る。

少し残酷だったかな？まあこれくらいはまだいいにまづか。

「ふう、終わり」

「もうかたずいたのか。俺の分も残しておこうとしたな

「悪い悪い、少しイラッときたもんだから派手にやつちましたよ

氣絶ですませておけばよかつたな。

「おぬし達何者だー特にそつちの男」

「愛紗やめてくれ

「ですが・・・」

「いいんだ。とにかくで聞きたいことがあるのですがいいですか?」

相手が丁寧語ならいつも丁寧語で行かないとな。

「構いませんよ」

「天の世界を知っていますか?」

「聞いたことはあります」

「聞いたことがあるといつのは?」

「最近天からこの乱世を終わらせる者が来るといつ噂がありましたので。その中に天の国といつ言葉がはいっているのです」

多分俺のことなんだろうが。

「あなた達はなぜここんことを?」

「暇だからです」

この理由つけは苦しいよな。

「それにつけたしがあります。一人目の天の御遣いはこの國を変えてしまつと言われています

「なるほど」

「天の御遣い？夢のある話だ」

吸血鬼を恐がつてゐるスネークには言われたくないと思つけどね。やば思い出したら笑えてきた。

「仕方ないさ、こんな御時世だ。それに天の御遣いの一人目はいるじゃないか」

「一人目がいない」

スネークがまともな会話をしとる。

あしたは雪か。

「話によると一人目の天の御遣いは不明だそうです。偽装、逃亡、隠れるのが得意らしいです」

どうからそんな話が漏れてるんだ？

「つまりわかつてて自分から名乗りでないってこと」

「多分そうだと思います。理由があるかもしません。戦いたくな
いか、軍につきたくないか」

「つまり元の世界では軍人だったかもしけないってことかな？」

なぜそこまでわかるし。

「天の国の戦とはどのようなものでしょうか？」

「弓矢よりも強い武器を使って、遠距離で戦うんだ」

わかりやすい説明だ。

「話を戻しますね。私は貴方が第一の天の御遣いさんだと思つています」

「僕ですか」

「ほお～いい勘だな。

「ははははそれはないな。元曹操軍だ」こいつは

「やうなんですか？」

「一刀が不思議そりに聞く。

「昔の話です」

「アリヒーことだ。あんたらも、嬢ちゃんを助けにいったほうが多い
い」

「嬢ちゃんとあつ董卓は？」

「ちちゃんと確保しました」

流石天才軍師。

よかつた。あ、ありがとうございます つてあれいない

「あの者らただ者ではあるま」

（南皮付近の街）

「あぶなかつたぜ」

「やうかそこまでじやなかつたがな」

「しかし騒がしいな。あのなにがあつたんですか？」

近くにいた村人に聞く。

「あんた知らないのかい、黄巾の残党が大きな軍勢を作つてこの街に向かつてるんだよ」

黄巾の連中もこりないねえ。

「何万ぐらいですか？」

「1、2千くらいだ。わかつたらあんたもさつさと逃げるんだよ」

他人の心配をするとはいいやつだな。

「スネーク」

「わかつてる。ちょっと暴れて来る、だろ」

もちろん。

まあ、今回はかなり暴れせてもらつが。

「正解」

「行きたきや行ってくれればいい。俺は止めたりしない」

「じつも」

流石スネーク空気が読める男だ。

「氣の毒だな。賊が

今聞き捨てならない台詞を聞いたぞ！」

「高速移動。ほいっと、またぞろめりとじむかなかことじ。わあてさ
くつとやつしまつか」

「なんだてめえは」

「人殺しだよ。惨殺・八つ切り」

2千の軍の体が、ハツにわかれる。

「あんまり、いい殺し方じゃないけど。まあ今までやつてきたこと
の報いだとでも思つといってくれ。さて戻りますか。高速移動」

「早かつたな」

「たつた2千だもの」

「あんたすごいな」

恐がる奴はよくこるが誉める奴はそういうぞ。

「いえいえしたい」とはしておりません」

「いえいえ謙遜なさることはない。実は貴方様にこの町の県令になつてほしいのです」

いかにも村長っぽい人が話しかけてくる。

「まあ構いませんが」

たまには良いことをしても罰はあたらんだろう。
たとえそれが偽善だったとしてもな。

「お心すかい、いたみります」

「もう黄巾党の残党がきても負けないぞ」

「お———！」

（一ヶ月後）

街は前よりも活発になり、悪人も減った。予算を上手く使つので、税金は低く、しかし予算は黒字という状態であった。

しかも彼方の徳を慕つたのか、各地から有能な将兵が集まつて来た。兵力も増え、傘下に入る街も増え、まさに勢力となつていた。

その中でも各国の目を引くものが銃や戦車だった。
しかし情報を漏れないようにしていることもあり知つてゐる国も本当に数国だけだった。

しかもその国々は渡辺軍の傘下の国である。

「公孫賛からの使者? わかつた通してくれ」

なんでしょうね。

まさか宣戦布告とか。

「はい。」

公孫賛の使者と思われる人物が入つてくる。

「本日の要件は我が國と同盟を結んでほしいのです」

「わかつた。条件はなにもない、お互に助け合つてこいつじゃないか」

「いつこのせよつぱつと終わりせる限る。」

本当は調印式みたいなのがあるんだろうがそこはここと云ふが、面倒くさいから。

「ありがとうございます」

場所は変わって、本郷軍

今は軍儀の真っ最中。

「報告する」とは、まず袁紹さんの近隣で新しい国ができるたとのことで、それのおかげで袁紹さんは迂闊に動けないやつです」

「それは黄巾党の残党を一瞬で倒したといわれている者の國か

星が喋る。

「はい。ですが情報が少なくて」

彼方だからこそ情報を漏らさないのだ。

「実は国境の警備が厳しく、国に入るにも厳しい検査があるんです。そこで昨日愛紗さんと星さんと話しあったんですが、私達で現地調査にいくことになりました」

本当はそこまで厳しくは無いた情報統制は相当厳しいだろ？が。

「仕事とか守りとかは大丈夫なの？」

「今の時期はどちらも心配する必要がないので今しかないんですね」

「皆が賛成ならいいんだけどさ」

「御主人様聞きたい」とあるのですがよろしいですか？」

「ああ構わないよ」

「御主人様は警察というものを聞いたことがありますか？」

一刀は疑問に思つたが口には出さず答えた。

「俺達の世界の治安を維持する役人みたいな人かな」

「なるほど、ありがとうございました」

朱里はなんであることを聞いてきたんだろう？
まいいかはやく仕事をしないとまた愛紗にどうやられる。

～第二話～歪みある彼方。（後書き）

誤字脱字あるかもしません。

～第四話～現代！？いいえ二国志です。街が発展しただろ？（前書き）

歪みあります。

文中の『』のかつ』は無線での会話です。聞いている人の。

～第四話～現代！？いいえ三國志です。街が発展しただろ？

あれから一ヶ月街の城壁は高くして掘りは深くした。

155mm迫撃砲も設置したし、99式戦車、M1A1（軽機関銃）も配備、装備した。もちろん SMAW も配備、装備した。グレネード、スタンングレネードも装備させた。

新型の装甲兵員輸送車輌も配備した。

「やる」とないな

仕事は数秒で終わるし。山賊の類はふるふるにしたし。あくまで殺してはいけないよ。

「寛話があるんだが・・・食糧が増えすぎている。地下に貯蔵したほうがいい。」

「じゃあさっそくとりかかってくれ

「了解ー。」

今何て言つてたんだ？眠くて全く聞いてなかつた。

そのじろ本郷一行はどうと。

「検問だねこれは

まるで「元の世界にいるみたいだ。

「凄く大きいのだ

「支城が数十個固い守りですね」

「失礼ですが、身分証明書はお持ちですか？」

現代の装備に身をつんだ兵士が身分証明証の提出を求めてくる。
学生証でもいいのかな？

「これでもいいですか？」

「はいお借りします。そちらの方々はこちairoお名前を」

「わかりました」

カリカリ

みんなに身分証明書が渡される。

「それは国内では常に使いますので所持しておいてください。ここ
から先はバスで移動するので、バス乗り場にいつてください」

「バスもあるんだ」

「よいよ現代ってかんじだな。

「御主人様バスとは？」

「そうだよなみんなにとつては始めて見るもんだしな。」

「天の世界の乗り物だよ」

「そうなんですか」

「文明的にかなり進んでいるんでしょうか?」

うーん。やっぱり俺と同じ天の御使いになるのかなあ?

「多分ね。バスが来たみたいだ」

それから30分移動に時間がかかった。
みんなにとつてこのスピードは速かつたのか朱里は気分を悪そうに
している。

「凄い早さでした」

「景色が凄いはやせで通り過ぎていったのだ」

「なんだか気持ち悪いです~」

「それにしてもつこ最近出来たとは思えませんな

確かにこの開発の効率のよさはなんなんだろうか。

「あれは迫撃砲!なんでこじんなところ

軍隊も現代か。

敵にはまわしたくないけど。

「まさか一人目の天の御遣いでしようか?」

「それもありつるな」

「失礼ですが身分証明書はお持ちですか?」

門の前で兵士に聞かれる

「はい」

「ではどういへん」

俺達は大きい門をくぐって中に入つていぐ。

「すうじい活氣だ」

「洛陽を越しているかもしだせんね。きやーす、すいません」

「エリ見てあることんねん。このガキ」

いかにもな恰好をした連中が言つ。

「す、すみません」

「骨が折れてしまつたわ。治療費ださんかい治療費」

「貴様」

愛紗が構える。

流石に武器を出すのはまずいと思つたのかな。

「君何をしてるんだ」

警察がヤクザに囁く。

「警察だ。止まれー。」

「ひつ」

ヤクザは走って逃げようとするがパトカーに阻まれる。

「——（自由な国の警察組織）だ止まれー。」

「へん」

「恐喝の現行犯で逮捕する」

すると他の警察官が近寄ってきて言った。

「お前我はありますか？」

「あいつがどうぞいました」

「市民を守るのが警察の仕事ですか？」

「すみません。警察についてあるんですか？」

警察までこらなんて。

「せうだなあ。先月へらこか？」

《Aブロック3地区でナイフを持った男が暴れているもよひ近場の

警官は直ぐに現場に向かえ》

無線機から声がする。

「了解直ちに向かいます。ではお気をつけて」

「はい」

「亡じてひきだしたね」

「民を守らうとする心意氣立派です」

向こうは仕事だからね。

俺たちの警邏みたいなものなんだよね。

「お腹すいたのだー」

「確かに腹が減ってきたな。あそこに入らつか

近くにあつた時計を見る。

時計はもう一、二時を指している

「見たことない店ですね」

その店は西洋風の店だった。

「どうあれまずはこつて見よつ

～店内～

「こいつしゃいませ。何名様でしょうか?」

「五人です」

「お煙草は吸われますか?」

「こじが本当にパラレルワールドなのかわからなくなつてきた。」

「いえ」

「煙草? 知つてゐるのか?」

「いぢりの席にどりや」

「歯も座つてくれ」

落ち着いたかんじのいい店だね。

「メニューはいぢらです。注文がお決まりの際にはこじのベルを鳴らしてください。それではいぢりくじどりや」

「何にする?」

「たくさんありますね。じゃあこれに『やかましいんじゃあーぶち殺すぞ!』はわわーーー」

朱里が大声にビックリしてメニューを投げ飛ばす。危なかつたもう少しで顔面に当たるとこだった。愛紗との鍛錬がいききてきてるのかな?

「朱里落ち着け」

「てめえ殺されてもえのかーー。」

「セリヤあいりかのセツヘンヤーのガキがーー。」

短刀を取り出す。

なんでそんな物を持ってるかは考えたくもない。

「またですか」

「警察が来るまで大人しくしていたほうがいいと想つよ。」

「あまり田立ちたくはないですか、」

その連中の後ろから声がかけられる。

「おい兄ちゃん チームの渡辺だ」

「 、渡辺ーー？」

「やべえ逃げるべ」

「殺される」

そのヤクザ風の男たちは一田散に逃げ出した。

「はあー、傷つくなー。殺さなこよ。氣絶はしてもひつが。ふつ」

ヤクザどもの首を吊いて氣絶させる。

「こちら渡辺犯人一人を取り押さえた。現在位置に増援を送れ」

《了解》

「江北の輩は減らないんだよな」

まあのにはならないだろうけどさ。

「はあー。おばちゃん被害はなかつたかい?」

「大守様のおかげで」

「だから大守なんて呼び方しなくていいって。そんなたいそうなもんじやないんだから」

「御主人様みたいな方ですね」

「江北兄弟ですか?」

「お兄ちゃんにそつくりなのだ」

「たしかにそうですな」

皆が言ひ。

「そんなに?」

「似てゐるではないですか」

(謙虚なところとか)

「うーん」

そんなにかな？ そうでもないと思つんだけどなー。

（彼方視点）

「まったく嘆かわしいな。まあ事件発生率は一日15件から1件に減つたけどさ。それでもまだああいうことがあるんだから仕事が無くならないね。給料をもつと増やしてくれないと割に合わないな」

給料を上げるのは彼方の役目なのだが。

「すみません」

貧乏くさい少女が近寄つてくる。

「はいなんでしょうか」

「大守様にこのお人形を受けとつてもらいたくて」

ばればれの変装でくるとは俺も舐められたもんだな。

「それはそれはうれしいですね。ですが」

「えっ！？」

彼方は懐にしまっていた、短刀を投げつける。

「ばれてしまつては仕方ない死ね！」

男は剣を取り襲つてくる。

「剣筋が甘いな」

剣を促し、持つていた剣を吹つ飛ばす。

「くつ次は必ず殺る」

「実力をつけてからきな。相手はしてやる。さて帰るか」

そういうばなんで少女に化けてたんだ。趣味疑うわー。まさか・・・
ロツコーン！

（一刀達視点）

「大きい城だね」

「簡単に入れてくれるのでしょうか？」

みんなで悩んでいるとおばあちゃんが兵士に話しかける

「大守様いますか？」

「はい今なら中庭にいるかと」

「普通に入つていつてますね」

「すごいですね。色々な意味で」

警備つてどうなつてるんだりつ。

そんなときパートカーが物凄いスピードで走つてくる。

「なんでしょうか？」

「事件かな」

「大守様が不審人物に襲われた。これより国境警戒レベルを3に引き上げる」

「了解！！」

兵士が返事をしてどこかに走つていく。

「失礼します」

「何かあつたみたいだけど」

「御主人様、やはり大守の方と会つた方がいいと思います」

「確かに友好を深めるということもあるしな」

「しかし主殿っこの領主どのが信用してくれるでしょうか」

「うーん。確かにそれはあるなあ。

へたに機嫌損ねて戦争なんてのは嫌だしなあ。

「大丈夫だと思います。っこの大守さんは優しいと評判ですし、戦いは避ける方だそうです」

「でもさつも警戒がなんとかつて」

「城南1kmの位置に山賊が出現。市民の皆さんは警官の指示に従い速やかに避難してください。繰り返します。城南1kmの位置に山賊が出現。市民の皆さんは警官の指示に従い速やかに避難してください」

放送が流れる。

「賊だつて」

「IJの地方には山賊の皆があつて数は十万を越えていんとのIJです」

『山賊の数およそ2万繰り返す山賊の数およそ2万』

「本部応答願ひ。IJから 259」

《IJから本部》

「袁紹の軍勢が接近中、その数およそ10万」

《了解交戦の許可及び発砲を許可する。隊長は 465に任せう》

「ア解」

「セイレーンの聲を避難してください」

「今は指示に従おつ」

「「「はー（了解）」」

「いじりです急いでぐたさー」

警官が誘導してくれる。

「本郷は悪なり！！」

「悪は滅ぶべし…」

「滅ぼせーー！」

「なんだこいつらは。本部応答せよ。市民の避難中に武装している兵士に襲われた。直ちに現在位置に増援を送れ！」

《了解。付近の警官隊は市民の避難が終わりしだい全速で増援に迎え。10分持ちこたえる》

「了解。皆さん大丈夫ですか」

「いじつらは洛陽のときの」

「困まれちゃいました。はわわわー」

「くわいじまでか」

諦めかける。

そのときた警官が言った。

「五十か」

「ハハなつたら、力尽きるまで戦ひのむ」

「愛紗、鈴々も手伝うのだ」

「よしこべやー。」

みんなが奮起しているとけたたましい音が響く多分、といつか銃声だ。

「うおおおお！」

その警官は雄叫びをあげながら機関銃を撃つてゐる。愛紗達はこの光景を見てポカーンとしていた。

「す、凄い」

「す、凄いのだ」

（何とこゝ強さだ。恋をも簡単に凌ぐかもしれん。）

流石に星もびっくりした。たった一人で軍勢と戦い、息ひとつ呑していないのだ。そのことに星は思わず息を呑んだ。

（治安を守る兵がこの程度ならば軍はどうなのだ。どれほど強さのだ？）

星には予想もつかなかつた。チームの兵士の強さを侮っていたのである。

もちろん警官がこのレベルなら、軍隊はもつと強いことになる。武器、いわいる銃のレベルも違う。それでも警察程度ならば充分だった。

しかしこの男には軍隊もましてや警察も関係ない。25歳で死神の異名を持つ、この棚橋龍夜たなはしりゅうやには。

「大丈夫か？あんた達」

（まだ不完全燃焼だな）

「はい、ありがとうございます」

「気にしなさんな。これが仕事だ」

「あのすみません。その銃はどうぞ」

「日本とは言えないな、アメリカからかな？本郷一刀君」

（M249はアメリカの発明品さブローニングM2銃機関銃もいいがね）

「…」主人様お下がりください

「勘違いするなよ。俺達の仕事は街の犯罪者を逮捕したり始末することだ。その中に敵の領地に大将自らわざわざきてる連中を消すことは入ってない」

「無事ですか！龍夜中佐」

「ひづり 45、警官市民に被害なし。繰り返す。被害なし」

「よーし撤収だ!」

「はつー!」

田米連合軍兵士はさつさと白装束の“かたづけ”る。

「じゃあな。今のはあんたらを狙つてたぜ」

「凄い方でしたね」

「ああ全くだ」

「かつこよかつたのだ!」

「あの覇気、私と愛紗で戦つても勝てる気がしない」

「機関銃、か」

ベテランなのが多分そんな感じがする。

「では」主人様城に入りましょう

（城内）

「あんたらか、本郷軍の使者とやらば。いつだついて来てくれ

「強者だな」

「ああ」

「スネーク中佐」「苦労様です」

「()苦労」

「凄い人ですね」

「鈴々にかかれば楽勝一なのだー」

「どうだううな」

(兵士があれ程となると先程の龍夜という人物も本気を出してない
な。)

しばらく歩いてくると演習場についた。

「GOGOGO...」

「突入ー！」

「寛ー！」

「どうしたスネーク」

「今日演習の予定なんてあつたか?」

「兵士が体動かしたいんだと」

「それでＳＷＡＴ顔負けの訓練をやつてたのか

演習と言っているが使われている弾丸は本物であり、勿論当たれば死の危険性がほぼ100%だろ？

しかしそのような訓練をこなしてこのチーム、日米連合軍隊員と言えるのである。

「実弾を使つてるんだ。あるのは生か死を」

「こいつが渡辺寛。チームもとて日米連合軍の総司令官だ。この国の君主とも言えるな」

スネークが本郷勢に説明をしている。朱里は眞面目な顔をして何か考えている。

「本郷一刀ですよろしくお願ひします」

思つたよりやさしそうな人でよかつた。

「先程紹介がありましたぐ、この国の君主を勤めさせていただいていふ、渡辺寛です。よろしくお願ひします、本郷一刀さん」

「こちらお願いします」

「立ち話もなんですから、ゆっくり話が出来るところに案内致しましょう」

「俺はこれから警邏の仕事があるんでな、また会おう」

スネークは仕事に戻つて行つた。

「それではあなた様の席に坐り直だせ」

「は、はーありがとうございます」

「客人に失礼があつてはなりませんから」

六つある席に愛紗、朱里、一刀、鈴々、星、俺の順で座つている。

「それで今日は何用でしようか?」

「友好を深めに来たのと、同盟を結ぶためにきました」

「なぜ我が國のような小国と同盟を結ばれましたのですか?」

「貴方は民を大切にし、仁義を持つていると聞く。私とて無駄な戦いは避けたい」

「寛さんの國とじ主様の國が手を組めば、魏や呉、袁紹さんが手を出しへくなるんです」

袁紹が?…どうしてだらつ。

「小国を潰すには充分な力を魏、呉、袁紹それぞれ持ち合わせてると思いますが?」

確かに、国だけで比べれば領地は狭い、しかしそれ程のハンデがつても、手を出しつくい否、出せない理由があったのだ。

「それは、装備、守りの堅さ、優秀な将兵、そして兵士の数、国力、

補給、軍需物資の備蓄量で寛さんの国が勝っています。これだけ有利な状況ならば手を出しにくいんです」

「そして最後は、民衆、民からの支持、そりであらう朱里？」

「はい星さんの意通りなんです」

「寛殿、一つお伺い致してもよいですか？」

「構いませんよ。おっしゃってください」

「これ程の力を持ちながら、なぜ寛殿は野望を果たされないのか？」

「私の願いは平和に暮らすことであり、戦いをする」とではありますせん

「天下を統一した方が世が平和になると思われるが、そこはどうお思いだらうか？」

「田の前の民をいいえ人を助けられないような者はたとえ乱世を統一したとしてもさきの漢のようにまた乱が起ころうじょう。それだけは避けたいのです」

「寛殿は自分をそのような器では無いと思つておられるのか？」

「もちろんですとも私がここにいるのも何かの間違いと思つほどです」

星は凄いな向こうと渡りあつてる。寛さんを見て自分に足りないものがあることに気付いた。行動力だ、行動力が足りないんだ。あり

がどう寛さん貴方のおかげで俺成長できました。

「ではなぜこの國の君主となつておられるのか?」

「民のためです、器が小さいと言つても諦めていい理由にはなりませんからね。私は私なりのやり方で民の期待に応えているだけです」

「謙虚さと、覚悟、充分な器が感じられますな」

「同盟を取付けていただけますか?」

「すみません。私が情けないために。私の國では直接國に関わるようなことは民の声を反映します。こちらからの勝手な申し出ですが、明日まで待つていただけませんでしょうか」

「わかりました」

「ありがとうございます。では今夜のお休みなられるお部屋に案内させていただきます」

移動中は一刀や朱里と話た、國のことを讒のこと。

「一通りになります」

「ありがとうございます」

「こえいえこちらの勝手な都合で迷惑をかけてこるのでこれくらいは当然のことじります。それでは用がありましたら、お呼びくださいませ」

彼方はそう言つて立ち去る。

「あれが本当の志を抱いている者か」

「『主人様の方が大きな志をもつていらっしゃる』」

「『主人様と彼の志は似ても似つかないものだぞ愛紗』」

「民に人気な理由もわかりました。彼には人を引き付ける。仁義があるんですね」

「悔しいが、それは『主人様より何段も上だ』」

こうして本郷軍の武将は寛軍の恐ろしさを垣間見るのであった。

～第四話～現代！？いいえ二国志です。街が発展しただろ？（後書き）

心が折れそう。

～第五話～ 虹との回顧。現代技術に勝てるもんか。（前書き）

更新速度を上げたい。

「おひはつば元氣だ～」

～第五話～ 虹との同盟。現代技術に勝てるもんか。

あの激しい（？）議論があつた翌日

『厳粛な審査の結果、本郷渡辺同盟は受理されました』

なんと国内の市民（お偉いさんも含む）全員が同盟をOKした。これには流石に驚いたぜなにせ国民全員、流石に赤ちゃんは来てないと思うがそれでも全員がきたことが奇跡だね。

とこいつことでやつと起きた（午前10時から今まで寝てた）本郷に会いに行つた。

この情報は女官さんからで決して覗きに行つた訳じゃないぞ。俺にそつちの趣味はないし。

「それでは改めまして、これからよろしくお願ひします」

「うわ、うわよろしくお願ひします」

ひつじて本郷渡辺同盟が締結された。

その日は特に何もなかつたので宴会をして寝た。

澪が未成年にもかかわらずに酒を飲んでいたのは黙つておくことにする。

「ひみつね…ね。

そんなことやで翌日になつた。

「兵糧の問題が、地下の倉庫を広げる必要があるな。誰かー」

いきなり話が飛んでよくわからなーってへ・よつは食料が増えすぎで倉庫が足りないっていう話だよ。

少ないんじゃなくて多ーつのは幸せな悩みだよな。

「なんで『ヤモ』ですか？」

「こつをスネーク中佐のところに頼んだよ」

「畏まりました」

誰かを顎で使うのもいいなあ。なんて馬鹿なことを考えながら資料（建築物に関する資料だったかな？）に田を通す。その資料で田についたのが耐震強度だ。

「ん？ これはひどい耐震強度が…と言つても『日本じゃ ないから大丈…夫？かな？』

でも四川省で地震があつたしなあやつぱり耐震強度の問題は結構きついなあ。

ぶつちやけつい最近できた建物はいいんだが祖父の代から住んでる家とか俺が来る前の建造物は相当やばい。

ま、百聞は一見に如かずだ。この田で見てきますか。

（スネーク視点）

「地下倉庫の拡大か。この調子だとまだまだ広くなりそうだな」

この兵糧問題。国としては嬉しい限りなのだが、多過ぎて一つの街

に10万の兵士を十数年養えるくらいの量になってしまっているのである。

それを解決しようと立ち上がったのが、SNMKD（食糧増加問題解決組織。）である。

簡単に言つと、食糧を商人にいかに高く売り付けて利益を得るか、考える団体である。

組織頭は元関東連合一代理組長の六角丈一である。ヤクザでありながら市民の人気、外国との友好の幅から、現在は日本の外交官。第三次世界大戦を三度も防ぐなど、功績もある。スネークの次に世界を救つた回数が多い人物。

「力口リーメйтの開発が遅れているな。午後からは調練か。今のうちに昼飯を食べるか」

にしても少ないならともかく多いのは幸せだなまるで今の日本やアメリカみたいだ。

こつして当然のように平和な日が続いている。しかし物事に永遠はないいつか途切れてしまうだろう。

しかし、彼なら”平和”を維持できるだらう。

「無駄な争いはする必要はない、か。自分も軍人のくせに何言つてるんだろうな、俺」

そう彼ならば・・・。

↓ side out ↓

結局昨日は耐震強度の調査をただけで今日は本格的に対策を練るうと思っていたのだが、袁紹軍が攻めてくる。と聞き、対策会議を

強引に開かされました。

情けないぜ澪…怖いでしょう。

「報告を」

ぶつけ合の間も耐震強度のことしか頭にない。

「はい、袁紹軍はおよそ20万の兵力で本郷と我が軍を攻撃しようと画策しています」

「袁紹は我が軍が弱小と油断しているのか、こいつた5万の兵だけを差し向けています」

震度5弱にしか耐えられないのはまずこよな。

「距離は？」

「100から南20kmの位置だ」

「防衛準備開始、」れより、防衛を開始する

「サーイヒッサーー！」

袁紹と渡辺軍との戦闘が始まつたのだ。

「（とりでスネーク文官なんて言つてた？）

「（こつもんじつ）」

つかの高性能兵士が勝手に片付けてくれるパターンね了解。

じゃあ俺寝ようかな。

『袁紹軍を発見食事をとっている模様』

『遮蔽物が無いため、高周波が使えます使用しますか？』

『使用許可。司令部から発砲許可が出た。武器、戦車の点検をさせろ』

『了解』

「いつこつた光景もやはや即たり前になつていていた。

「誰か、PSGを見なかつたか」

「PSG? あああちらの箱にあります」

「戦車の整備は済んだか？」

文官がせかせかと走り回つている。

「100輛の内90輛、整備完了! こつでも出れます」

「よし、急がせろ!」

「はつ……(忙しそうだな)」

「(偉くはなつてもああはなりたくないね)」

「(俺たちの10倍は戦場での経験がある人だからな)」

このような光景も武将、文官とともに慣れていたのであった。

「準備はどうな感じ?」

カロリーメイトを食つてげふんげふん食べてるスナーケに聞く。

「順調に進んでる」

明日までは大丈夫か。普通なら今日中に来そつだが、まあ袁紹だしな。

てこつか話すとき食つやめりよ。

「よし、旨麗じてられ。今日はゆづつ休んで明日で備えてくれ」

「おお――――!」

「頼もしい限りだ。野郎共明日の喧嘩勝ちにいくぞ!」

「おお――――!」

彼方も軍隊のお偉いさんである。

軍勢を鼓舞することは造作もない。

彼の兄貴分や魅力などもあるのだが。

彼の好かれることは鼻にかけないことである。

チーム、日米連合軍兵士からも人気が高いのはそのためである。勢いもあるのだが……。

「くしゅん。誰か噂してゐるな

天の声に気づくとはただ者ではないな。

「さて明日戦ですか」

「どうした? まさか、今更戦場が怖くなつたのか」

「そんなもん、もちろん怖くないぞ」

「もう慣れるほど戦場に出て人を殺したからな」

スネークも、かな?

「俺は軍人だが、戦闘狂じやない」

「そうかい」

(言われなくとも普段のお前を見てればわかるぞ。争いを嫌い平和的に解決しようとしている普段のお前を見てればな)

にしても袁紹の兵士も可哀相に。まともな将もいないのに無理矢理攻めさせられるとは。

「…彼方、彼方、彼方!」

「はっ!」

「大丈夫か? 疲れてるんじゃないのか?」

流石にボーッとしきっていたようだ。
いつもなら逆なのにな。

「大丈夫だよ」

「ならいいんだが」

（珍しいな、彼方がほうけているのは。）

「じゃあ見回りにでも出ますか」

確か今日は俺の番だつたはず。

戦の前に警邏の日とは俺もついてないなあ。

「やうか、俺は寝る」

まだ昼だぜといつしき「ミはしないよくある」とだから。
明日は正規軍?との戦争か。どれほどのもか見せてもらひつや

彼から見ればどの軍も雑魚同然なのだが。

（翌日）

「よし第一、第一隊は銃を構えろ」

彼方の合図で一斉に銃が構えられる。

「全班に報告、500まで引き付ける」

「迫撃砲、E F V共に準備完了」

もちろん、この時代にはない代物なのだが。

「五万かこつちは十万、一気にかたをつけるぞ」

流石にこの兵力差と武器の違いには勝てないだらう。後はあつちが馬鹿なことをしんなければOKだな。

ついに袁紹軍との戦いが始まったのである。

「500まで300。迫撃砲射撃開始」

「発射命令が出たぞ。撃て撃て！」

合図で一斉に放たれる。

「600もういいぞ撃て！」

ただただただ

銃弾の雨が降り注ぐ。

「兵力は少ないんじやなかつたのか」

彼方はこの国の現状が他国に知られるのはまずいと思い、偽情報を流したのだ。

「今は退け、殺されるぞ。がつ」

「撃ち方止め！」

その瞬間、ライフルの弾が、頭を貫く。

「撃ち方止め！」

「撃ち方止め！」

こうして戦闘時間僅か数分。防衛戦は渡辺軍の勝ちで集結した。これを外史で渡辺防衛戦と呼ばれている。

「撤収一、撤収一」

「彼方いや覧」

嘘が相変わらず下手といつかなんといつか。

「久しぶり。龍夜」

「久しぶりだつたか？」

「言葉のあやだよ」

「今日は酒でも飲もうぜ」

「どれくらい飲めるか心配だな」

金の心配をした方がいいかもな。

「大丈夫さ。多分な」

「じゃ夜まで寝るか」

しかし袁紹軍が滅んだわけではない。まだ本郷軍のほうに十万の兵士が向かっているのだ。

その対策を考えながら彼方はベットに横たわった。

～第五話～ 蠍との回戦。現代技術に勝てるもんか。（後書き）

作者は最近だらしねえな。

～PV15000突破記念～にじょひじょの色々な説明。（前書き）

PV突破もはや関係ない。

～PV15000突破記念～にじょひじの色々な説明

作者『どうも作者です』

彼方『今度は何なんだ?』

作者『ああ、その、とまあえずPV15000突破記念おめでとう!』

彼方『ごまかすな』

作者『痛い痛い。髪の毛を引っ張らないで』

彼方『どうせ書く事無いとか言つんだろ』

作者『いやだから今回は日米連合軍の紹介とかその他の色々な紹介をしようと思つて』

彼方『更新速度も遅いしな』

兄貴『ああん最近だらしねえな。ああんだらしねえな』

彼方『確かに』

作者『そ、それではどうぞ…』

チームとは別の組織。

日本の自衛隊とアメリカ軍を統合したものである。

この統合はアメリカ軍基地の問題を何とかするために実行された。たまにだが、チームと合同演習するようだ。

チームには劣るが、かなりの精銳ということは間違いない。

兄貴、別名 森の妖精もりの ようせい

だらしねえ作者に気合いを入れてくれる。

筋肉モリモリマッチョマンで強い。

これからも度々出て来るに違いない。

彼のおかげで作者は更新することが出来る。

作者（作者と書いてバカと読む。）

ナレーションをやつてる年齢不詳の不審者（笑）

見えないのをいいことに棒読みしかも台本を見ながらナレーションしている。

よほどのイジメられ体质なのか漆のう部分を見事に引き出してしまつている。

最近は兄貴に気合いを入れられていくようだ。

作者『これで終わりです。といつか俺の紹介酷くね？』

彼方『いいんじゃない。本当のことだろ』

～PV15000突破記念～にじょひじょの色々な説明。（後書き）

気合を入れて頑張ります。

～第六話～本郷軍への救援。澪も人間とは言えないよね。B Y 佐々木彼方。（前

やつてやるー。

（第六話）本郷軍への救援。澪も人間とは言えないよね。B Y 佐々木彼方。

今は昔「」にある一人がいた。酒を飲んでる、彼方と龍夜である。

「結構飲むじゃねえか」

「龍夜こそ」

一人でこんなことを言つてゐるが、勿論量でいえば、既に90、100リットルは越えている。

そうこの一人酔わない上に、アルコール中毒にもならないのでいつも飲み過ぎてしまうのだ。

飲み過ぎとは常識人から見れば飲み過ぎなんてレベルでないのか。

ついつい朝まで飲んでしまうこともある。

ついでに言つと、一日酔いにはならない。

最悪の飲んべいである。

「久しぶりの酒はいいんだけどさ、この酒高い酒じゃないか」

金大丈夫かな。

「ああ、久しぶりだから、旨い酒を飲みたくてな」

「それにしても結構開けたな」

「まだまだ、この程度じゃ終わらねえぜ」

「最近は化け物っぽくないように、自重してたのにな」

「気にする必要はないだろ。少なくともお前は尊敬されてるわ」

「だといいけど」

彼方は一応こんなに飲むことはおかしいとわかつていいやつだ。

「まあしようがないか、ダチの為だし」

「やうやく特にお前はほんとにたまにしか飲まないんだから」

「そんなにがぶがぶ飲むものじゃないでしょ」

駄目だこりゃ酒に呑まれてる。

朝まで付き合わないといけないなこれだと。

「うして夜が更けて言つた。

「次の日」

「本郷軍の状況は？」

「はつ、まあり思わしくない状態です」

そりやあそうだろうな。

なんせ15万も攻めにいったんだから。

「袁紹が7万、本郷軍が3万です」

「救援に送れる数は？」

「約5万かと」

袁紹軍の兵力おかしくない！？
15万向かつたのに7万しかいないぞ！

本郷軍どんだけ頑張ってるんだ。

「増援はそれくらいで充分だ。よしすぐに出陣の準備をさせや

文官は既に予想していた人のいい主のことだ必ず援軍をだすだらう
と。

「スネーク行くぞ」

「ああ。7万か。じゆじの練習にはいいな」

スネーク榴弾砲に撃たれても文句言つなよ。

「今のうちにトイレット！」

緊張感のない彼方であつた。

トイレットNow I do it

「てめえら、今から本郷軍を助けに行く家の軍の強さ各國に見せ付
けてやれ！」

行くぞ、うーーーーと自分の中でもモチベーションを上げる。
じやないと寝不足の俺に辛い。

「おおお——」

「「「「袁紹なんか一揉みだ——」「」「」「」

「『氣合』に入ってきたな。よしにぐぞ進軍だ！」

「「「「おおお——」「」「」「」

相変わらずのハイテンションで本郷軍を助けにいった。
元気すげワロタ。

打って変わって、本郷軍。

「朱里戦況は？」

袁紹が攻めてきて色々と急がしそうである。

「今まだ攻めてくる様子がありませんが」

「なにがあるのか？」

「実は、袁紹軍の増援が3万到着したそうです」

やつぱり袁紹は力押しか。

「いぐら鳥合の衆とはいえ数が多いか

「あたしに任せてくれよ。あんなやつら簡単に蹴散らすてみせる」

「翠の言つとおりなのだ」

と話してると、兵士が部屋に入つてくる。

「もつ、申し上げます袁紹軍の援軍、到着を確認その数およそ、5万です」

「15万か」

「流石に厳しいですね」

「伝令、渡辺軍が5万の兵士をひきつれいらっしゃに向かっていまや」

「増援が」

「後何日が持ちこたえられれば増援が来るのか…。」

「これで勝てる可能性が大きく上がりました」

「流石だな。寛殿」

「もう一暴れするのだー！」

「鈴々の言ひとおりだ」

増援が来ると聞いてすぐに「テンション」が上がりつてきた本郷軍。単純と言つて何と言つたか。まあいいけどな。

彼方軍、もとい渡辺軍はこうと。

「テンション上がってきた

」

「彼方が壊れた」

「よほど嬉しい」とでもあつたんだろうな

進軍中もさうなんですか

「後」「田」「口」「へり」「だら」

しらんけどな。

「だな」

「ところで袁紹軍の後五万の兵士はどうしたんだ？」

「逃げたか、本郷攻めの方に合流したんじゃない？」

実は五万の兵士は荒野をさ迷っていたのだ。

「たぶん今頃困ってるんじゃないかな。ここいら辺は何もないからな

「そうか。まあいいが、敵のことなんぞ」

《前方に袁紹軍発見数およそ五万どうしますか?》

「殲滅だ」

《了解》

こうして袁紹軍五万と闘つたのだが、結果は言わなくてもわかるだ
るわ。

装甲車に槍なんかきかないただそれだけだ。

「圧倒的じやないか我が軍は」

「（今田の観変じやないか？）」

「（わあ、なにかいことでもあつたんじやないか）」「（変ひ言ひ言つながら、スネークには負けてるが。）

「何か言つた？」

「いや～なこちも言つてないよ」

絶対悪口言つてたな。
声が変になつてるし。

「わづか」

「中國大陸がこんなに広いとは思わなかつたな。メイ・リンの住んでゐる国か。いい国だ」

（愛國心か。）

愛國心、スネークにとつては思つところも多いだらう。まあ実際彼方はあまり氣にしてないようだが。といふか、彼方は人生なるようになると思つてゐるのでそんな感じになるのだらう。やるとおはやるのだが・・・。

「誰かが俺の悪口を言つてこむつたな」とがする

「気のせいだ」（本当の「じ」と「ぢ」じゃないのか？）

「別に人生なるようになれって思つたこと一度もないぞ。一応俺なりに、人生設計をたてるんだから」

「明日のか」

む…当たつてゐるナビさ。

「まわか10年後くらいまではな。多分今までと変わらないだらうな」

多分じやないく間違いなくな。

いや変わつてゐかもな。いつまでも同じ…なんてことは無いしな。
いつかこいつらとも別れる事になるのかもな。

彼方に残された道は軍人を続けるか、隠居暮らしづするかしかない
のである。彼方は別に浪費癖があるわけでもないので、一般住民よ
りも安い金額で暮らしている。

なので、死ぬまで楽して生きる』とは簡単なのだ。本人がそうしな
いないだけで。

（なんでこんなのが偉いんだろうな。あの国はおかしいとしか言い
ようがないな。）

「むむむ」

「なにがむむむだ！」

（こうして本郷軍の救援に（急いで。）向かつたのであつた。

その2日後やつとついた。

ぶちやつけ高速移動してさつとくればよかつた監がやたらといつづするもんだから遅れちまつたよ。み

「見えただぞ」

彼方が拡声器で喋る。

なんで拡声器で喋つてんだりひつ俺。

無線機使えばよかつたぜ。

「全軍につけ。砲兵隊は砲撃開始。歩兵、戦車隊は射程距離まで袁紹軍に接近、駆逐せよ」

「…………」

「てめえら、そいつわと準備しき。遅れた奴は置いていくからな（ぶつちやけだること）」

迅速に行動する袁紹達。これが チートもとこ チームなのだ。

「位置についたなよし歩兵、戦車隊は攻撃開始

「…………」

「今回の戦は何十分で終わるかね

（油断は出来ないがな。油断なんてしてる奴はいないだろつな。

チームだしな。）

「化け物ね言われても仕方ない気がするが」

「敵さん数が多いな」

「鳥山の衆か。突つ込めじや、そりやあ兵士も力を発揮できないわけだ」

スネークの評価もさんざんだな。

一応特殊部隊?の出身だったはず。

「突撃はないよな」

いつまほつ袁紹軍はとこつと。

「まだ倒せませんのー。」

袁紹がわやあわやあ騒ぎ立てる。

「麗羽様いつちが負けてるんですよ~」

「なんですかーー早く敵を倒しなさいーー。」

「だから負けてるんですってば」

「JのJの大将はそのーー頭がつまく回りないよつだ。」

「文ちゃん。麗羽様大変です。曹操が冀州に攻めてきました」

「あーーあのぐるぐる小娘がーそいつとなつたら、Jんな貧乏軍に

構つてゐる暇はありませんわ

（本郷軍）

「袁紹軍が引いて行つてますね」

「顔色が悪くなつたからか？」

「追撃しましょ。」（主人様）

「兵士の皆は大丈夫かな？」

一応寛軍の兵士も戦つてくれてるみたいだから相当楽になつた…はず。

「今なら、兵士の疲れも少ないですし、大丈夫です」

「なら俺達の明日のために袁紹軍を追撃だ！」

決断をする迷つてゐる暇なんか俺には無いんだ。

（渡辺軍）

「よし家の軍の勝ちださつと帰るべー。」

「眠いよ。帰つてさつと寝よう。」

とこつか遠征車の中で寝ることじよ。 そうじよ。

「おおおーーーー。（寝よつ）（龍夜死ね）（見てここカルロー）

（死亡フラグ）」

ちよ、龍夜の悪口言つたの誰だ。殺されるぞ。
それと死亡フラグたてた奴誰だよ~~~~。

『あつさつすぎて、言葉が出ないな』

龍夜がその場にいなくてよかつた。

もしいたらその場で開戦だつたぜ……バビロンわあーー！

『まさに呆れて物も言えないと感じだな』

無線機でお話する。

『スネークでも知つてゐる言葉はあるんだな』

『龍夜には言われたくない』

『なんだとーー!』

少なくともお前よりは頭良いよ。

元軍人のU・Kさん(20歳)の意見。

「嫌な予感がするな・・・まあいいか」

（数時間後）

『大将、前方に武装した兵士を発見。小此木中佐です』

小此木？誰？.....ああ 小此木な。
寝ぼけて何を言つていたのかわからんかった。

「小此木？小此木無事だったか。よじEFTVに乗せろ」

一方小此木はと黙つと。

「へへ、神様の救いですかね」

もう少しで倒れるところでしたんね。

チームの兵士が下りてきて、小此木にかけよつてきた。

「小此木中佐[ゾ]苦労様ですお乗りください。他の方も」

「助かつた。運がいいな俺達」

「ああ白鷺5」

「よしあつたな。よし行くぞ」

「乗つたな。よし行くぞ」

帰つたら銃の改造でもしよう。
いや寝ようかな？

またやらかすきひしい。スネークもさかし大変だろ。

「一。」

「中佐どうかしましたか？」

兵士が心配そうな顔で見ている（頭大丈夫か？的な意味で）

「いやなんでもない」（彼方、またやるつもりか？わからんがそんな気がする。）

「今日は邪魔させないぞ。スネー——ク！」

兵士が言った。

「まだだよ（笑）」

（本郷軍）

本郷軍はまさに袁紹が人質をとった城の前にいるところだった。

「街の人によれば、こここの城主は人質をとられていて仕方なく闘っている、か」

「寛さんを呼ぶという方法もあるんですが、それは無理かと」

「どうすれば」

一刀は悩んでいた。争う理由が無いのだ。相手は人質を取られてい るだけなのだから。

「鈴々が、城に忍び込んで人質を助けて来るので」

「一人じゃちょっとな。そうだ、一人でいけばいいんじゃないかな。こつちは時間稼ぎをして」

うーん。でも相手が乗ってくれるかなんだよなー。
とりあえず三国…四国最強の軍師にOKもらつたから、「じゃあ愛
紗行」こうか

「わかりました」

「城内」

「外で何が起つてゐるんでしょ」うへ..」

まったく彼方の情報を集めていたらこれですよ。まったくもう。

「袁紹がこの城主の娘さんを人質にとつたんだ」

「あまりいいこととは言えませんね」

仕方ありませんその娘さんを救出しましょう。無駄な争いは無い方がいいのですから。

こうゆう考え方は彼方に感化されているのでしょうか。

「この辺りを捜しましょつか」

そう澪はこの町に居たのだ。まあぶっちゃけここに落ちてきたからなんだが。

彼方の情報を集めてたら今の状況になつていた(笑)

その頃侵入した鈴々と星はと並つと。

「で、人質はどこにいるのだ?」

「取り合えずそいつ辺を探せばいいのではないか？」

情報が少ない以上予想して、捜すしかないのだ。

「じゃあ早く助けるのだ」

「そうだな、時間も長くはないしな

その頃、彼方はといつと。

本郷の城に到着したのが2日。

帰還したのが30分。どうこいつことなの……？

「来いよ彼方。改造なんか止めてかかってこい。それとも怖いのか
？」

「誰がてめえなんか。てめえなんか怖くねえ！野郎ぶつこうつしゃ
——！」

意味不明なことをしていた。

「よくわかりませんが、大将を見つけたらお仕置きしないといけない気がします」

流石勘は鋭い。

「あそこですかね」

建物の角から、兵士のいる家を見る。

人質っぽいのはあの子ですかね。

「少し強めで行きますよ。高速移動」

そり

「誰だお前は…」

「加減はしません」

刹那、兵士の体が一つに別れる。

少し残酷でしたか？
まあ今更ですがね。

「大丈夫でしたか？」

優しく聞く。

「ひっくひっくふええん。澪おねーちゃん怖かつたよー」

「もう大丈夫ですよ」

璃々を抱きしめる。

「じゃあお母さんの所に行きましょうか」

「うる」

「うるなのだー！ってあれもう助けられてるのだ

元気な子がダイナミックに部屋に入ってきました。
この世界の女性は遅いというかなんというか。

「遅かったようだな」

「もう助けましたよ。早く」のナのお母さんの所に連れてていきたい
のですが」

彼女は基本優しいのだ。基本なのだが。一線を越えれば大変なこと
になる。滅多にそんなことはないが。

「移動中～

「くつ

「なかなかやるわね

黄忠が矢を射つて関羽がそれを叩き落とす。それの繰り返しだ
った。

「その一騎打ち待つた！」

星の声が響く。

「璃々…？璃々…璃々…！」

「間に合つたようだな

「あなた達は一体？」

「愛紗無事で良かつた」

愛紗の元に駆け寄る。

「（）主人様がこの作戦を提案なさつたのだ」

「助けたのは我々ではなく彼女だがな」

「澪さん。ありがとうございます」

「どうやら知り合いだつたらしく。」

「いえ、紫苑さんが困つてこると聞いたので」

「あのすみませんもしかして日本の方ですか？」

一刀は気になつていたのだ。髪は黒なのだが黒いコスロリな服を着ていたので。

「その通りです。そうですよね大将」

（そこで俺にふるのね）

「確かにね」

「（）どうかわいらしい。」

「ちよつとね。澪も随分派手にやらかしたんじやないか？」

「それほどでもあつませんよ」

彼方と一緒にしないでください。

私はまだそこまで化け物になつていませんから。

その場は騒然とする。

「こちらの方は？」

「申し遅れました。一応、彼女の上司の渡辺寛です」

「寛さん。何してるんですか？」

（せん付けかちゅうと残念だけじゅうがないね。）

「澪を迎えて来たんだけど」

「では先に行つてますね。高速移動」

その場にいる皆は（彼方を除く。）「（・ー・）ヒ・・?」唖然としていた。

「じゃあ、俺もこの辺で。神速移動」

「何だつたんだ」

一刀は心からそう思つたといふが言つた。

（第六話）本郷軍への救援。澪も人間とは言えないよね。B Y 佐々木彼方。（後

書き直すのにかなり時間がかかる。

（第七話）彼方が改造を始めたようです。重大会議（多分）（前書き）

更新遅くなりましたすいません。

兄「ああん！？最近だらしないねえな！ああん！？だらしないねえな！」

はい、だらしないです。

相変わらずの駄文ですがよろしくお願いします。

（第七話）彼方が改造を始めたようです。重大会議（多分）

あの人質事件があつた後、俺と澪は城に戻ってきた。

「やつぱり、澪もいたか」

「いましたよ。大将もいい国をつくつてゐるそうですね」

「まあね」

そういう他の連中はどうなつたんだろう。
大事なことを忘れてる気がするな。

その時、彼方に電流走る。
改造を忘れていた。

「（きづいたか）」

スネークやはりわかつっていたのか。
くそつまさかばれてるとは。

→スネーク side

彼方はやつときずいたみたいだな。
だがきずいたということは何かを行動に移すということだ。
さあどう動く。最初に動くのは多分彼方だ！

「させんぞ！」

俺は彼方の進路を塞ぐ。

「ここからだ。大事なのは。

「なら」

彼方はスタングレネードを投げて来るが問題無い。進路を塞ぐだけだ。

「ワンパターンだ！」

「ならもう一回

スタングレネード10個だと！何をするつもりだ。
スタングレネードが爆発して彼方は姿を消す。
流石にあの音じゃ何も聞こえないな。
くそっ俺もまだまだだな。

「何処に行つた

＼ side out ／

＼彼方視点＼

「俺の逃げ方には108の方法があるんだ」

しかしスネークも腕を上げたな。逃走術之三を使つことになるとは思つてもいなかつた。

だが、スネークから逃げきつたつまり改造やり放題といふことだ。

「ふつふつふつはつはつはつ俺の勝ちだスネーク！」

楽しい改造が終わつたのは3時間後だつた。

M4カービンを改造した結果がこれだよ！

命名 M4カービン改。

威力 ダイヤモンドを貫通はしないが傷つくくらいの威力。

装填数 50発。

弾丸 SPM4カービン弾使用。
スペシャル

軽くとも頑丈。そして壊れにくい。初心者でも安全に使える。チームに新人の新人はいないが。

オプションパート

スコープ8倍率

GP-40（強力な45mmグレネード弾使用。一発。）
サプレッサー装着（消音効果99%）

名前を気にしてはいけない。

「親友の頼みだから手加減したが次はこうは行かないぜ」

しかしいやな予感がする。あの白服の連中“この”世界について何か知ってるな。

厄介だな、連中妖術使いだ。参つたな。かたずけるのが面倒臭くなるな。

「大将入りますよ？」

「どうぞ」

いつも澪には驚かされる。いつの間にかいて、いつの間にか消える。もう慣れだが。

もし心臓の弱い人が澪に驚いたら確実に心臓停止するね。

断言できる。

綺麗で怖いよ特に真っ暗の中で見ると。

「すいません大将吳の使者がこれをと

吳の使者が？

何の用だらうな？

「どれどれ

そこにはぶつちやけると同盟しようといつことだった。

その同盟につき一人人質を送るという内容だった。省略したぞかな
りな。

「了解。人質はいらないと伝えておいてくれ

全く人質を偵察兵代わりに使うとはこの国大丈夫か？

吳の国の王が変わつてから戦が減り民を大事にしていると聞いていたのだが。

まあ王と軍師は仲が悪いとも聞いているが。

「世も末かね」

始まつたばかりだが。

始まつたと言つても地球が生まれたのが約45億年前だつたはずな

ら始まつたばかりではないか。

西暦なら始まつたばかりなんだけどね。

そんなこんなで結局人質は預かることにしました。

もちろんただでは無いが。少し金を貰つて、チームに監視させてる。

余計なことをしないようにな。

いやな話になるが下手をすれば内密に“処理”しないといけなくなるな。

話がずれたな。今は政務中だ。

「終わった」

書類に印を通して判子を押すだけこんなの一秒とかからないや。そういえばこの前の耐震強度の話、完璧に直してきた。不覚にも数時間もかかつてしまつたのはちょっと残念かな。

「失礼します」

「どうかした?」

「魏と本郷軍が衝突しました」

「戦況は?」

「本郷軍がやや不利ですね」

「増援要請は?」

「今のところは」

澪の話によるところだ。

まず魏と本郷軍は城の外で野戦をしていた。しかし魏兵が激しく抵抗し、なかなか城をとれない。

そこに背後の兵粘を魏兵に奪われる。

今なお本郷軍は奮戦中だそうだ。

「報告！」苦勞様

「これが私の仕事ですから。それでは失礼します」

仕事ねえ。俺は軍隊引退したのに酷いよな。また仕事だぜ。引き受けたのは自分がだが。

「改造でもしようかな」

改造自重しろ。

だが断る！――！

「ナレーションは黙つていろ」

す、すみませんでした。

思わぬ邪魔が入ったが、改造はやめぬ。やりたい放題だ！

「！彼方。またやるつもりかさせないぞ」

スネークはものすごい速さで、彼方の部屋に向かった。

そのときの様子を チーム兵士のPさんが語っている。「鬼のような形相で戦闘機並に速く走っていた」と。

スネークは彼方関係（改造のみ）に対してはたとえ チーム兵士が 1000人（チーム兵士1人当たりグリーンベレー兵士5000人）行方を塞いだとしても片手で粉碎できる。

「流石スネークですね。化け物です」

ナレーションに話し掛けないで「すみませんでした」

むむむ・・・

澪はそれ（？）を見てふふっと笑った。

全くもう。さてとどじこまで言つたつけ。

「台本です」

どうも。

え一つまりスネークも化け物であり（澪も）大変な人なんです。

「ふふつ、失礼なことを考えましたね。惨殺・全体骨折」

ぎゃああああああああああ。

く、悔しいでも感じちゃうビクンビクン。

「敵襲か？」

「どうせまたスネーク中佐が暴れてるんだろう」

一方彼方はといふ。

三八式歩兵銃を改造した結果がこれだよ！

命名 三八式歩兵銃改

三八式歩兵銃を改造したもの。

改造によりボルトアクション（一回撃つると）に力チャ力チャやらな
いといけないもの）がセミオートに。

威力 1000メートル先の防弾ヘルメットを貫通する。

装弾数 10発。

有効射程距離1500メートル。

8倍スコープ、三八専用短刀つき。

軽いそして頑丈近接攻撃にも優れる。銃剣（刀）をつけているので
槍のように使える。

消音率（99・9%）

弾はS P三八弾を使う。

「今日はこのくらじにしてやるぜ。」「

消音率をいつか100パーセントにしてやるぜ。」

一方そのこのスネークはとこうと。

「彼方は何処だ！」

「知らん」

一般人に尋問していた。

「嘘を言つた！何処にいるんだ！」

「自分の部屋だよ」

「そうか」

一般人（？）を麻酔銃で眠らせて、彼方の部屋に向かつ。

「ぬおおおおおおー！」

（彼方 side）

「ちよつ、何？」

改造し終えて椅子に座った瞬間スネークがいきなり部屋に飛び込んできた（文字通りの意味で。）

「待たせたな！」

この蛇は何言つてゐんだ。もしかして頭がパーんしたのか（元からだが。）

だつていきなり人の部屋に突っ込んで来てあげくのはて『待たせたな。』はあ？だよ。何決まつたみたいな顔してるんだよ頭叩いて直すしかねえか。

「45度の角度で。はあああーーー！」

「何をする、やめつぐつ」

スネークにチョップ（コンクリート粉碎レベル）した。もちろん粉砕 玉砕 大喝采しました。

「ぐふつ！がはつ！」

「まだ生きていたのか。かゝめくはゝめく波ーー！」

高エネルギーの球をスネークにぶつける。

「ぐわああああ。」

「スネークどうしたんだスネーク、応答してくれスネークーーー！」

＼でんでんでんでんてれてっててん／

「やっぱ死んだ？」

「まだ終わってない。ぐふつ」

「さて仕事に戻るか」

（GAME OVER）

「彼も（スネーク）また特別な存在なのだと感じつる、いえ感じました」

＼てえええええん／

S E 直重。

「最近家の軍変と言つか、カオスと言つか

「今更そんな」と言づのか？」

「生きてたの？」

「殺すな」

俺はスネークに悪い悪いと謝つて、澪がスネークに頼みたい仕事が
あるって言ってたぞと言つた。

スネークはそうかといつて澪の所に向かつた。

「スネークも仕事熱心だねえ。澪も龍夜もだけど

なんか忘れてるんだよな。なんだらう。まあいいか。

「さてまだ仕事残つてたつけ？」

部屋の椅子に座り机の上を見る。

机の上には幸いなことに何もなかつた。

「なんだ無いじゃん」

まあ澪とかスネークのな処理能力おかしいからな（彼方の仕事量は

澪やスネークの5倍です。）

「仕事ないなら改造しようかな」

改造はもはや俺の持病だよ。

「はー...」

（彼方め……これを狙っていたのか！－）

「どうしました？」

「…いやなんでもない

「ならいいんですけど。それでこりはいつもの方がいいこと思つんですけど」

「これもいいと思つんだが

（ここの借りいつか返すぞ彼方）

1、2、3来ないスネークは来ない。そつかスネーク仕事か！－よろしいならば改造だ。

また改造に3時間もつかつちました。

俺は改造の事になると他の物がだいたい目に入らないからな。

「いんなもんかな」

三八式歩兵銃改を改造した結果がこれだよ！

命名 三八式突撃銃

威力 2000メートル先の敵の防弾ヘルメットを貫通出来る近距離で撃つと大変なことになる。

装弾数 20発。

オプションパーティ 8倍スコープ（暗視、サーモルに変えられる）つき、三八突撃用銃剣（刀）つき。

とても頑丈で軽いがこれで殴られるとスレッジハンマーで殴られるより痛い。

大抵は気絶する。

力加減を間違えると相手の頭を吹っ飛ばす事になる。

三八突撃用銃剣で斬られると、たとえ女性がやつたとしても簡単に首や腕が吹っ飛び。

また三八突撃用銃剣をバラで使うと短刀になるが、むやみに振り回したりしてはいけない。

三八突撃用銃剣は銘刀である。

彼方の改造した銃の共通点は頑丈で軽いという点だ。

彼方の改造したRPG-7ですら2、300gしかない。

頑丈というのはまさに象に踏まれても壊れない程の硬さ。何の物質で出来ていてるかは秘密らしい。

弾は二八突撃弾を使つ。

ネーミングセンスはほつといて結構気にしているから。

この銃は突撃銃なので音は普通に出る。

それでも消音は施されている。

ていうか改造しそうじゃね?

今日で2回目なんだけど(笑)

「こんなもんかな」

そう言って彼方はかなり満足そうな顔をした。

「相変わらずやつてゐるなー」

「龍夜。仕事は?」

「即行でかたづけたぜ」

「ふーん」

正確な仕事をするからな。

問題無いとは思うけど。

龍夜が耳打ちをしてくる。

「(白服の情報が入った。ビツやら本郷軍の情報を魏に漏らしてゐる
らしい)」

マジかよ。

白服仕事しそぎたまには休んだつていいんだぜ。

「(本当かー)」

「（ああ間違いない）」

それが本当だとすると・・・まずいな。
仕事が増えるし。白服の連中死なないかな。
純粋にそう思つたわ。

「直ぐに諜報部隊長、一と濶大佐、スネーク中佐を召集しろ！」

「了解――」

（忙しくなりそうだ。）

とつあえずみんなに会議室に集まつてもらつたので本郷軍のことを
ついて話し合おうと思つ。
…一応ね。

「先程入つた情報によると白服の連中が、本郷軍の情報を魏に漏ら
しているらしい。俺達は今からこれを叩く

「山狗はこつでも動けますんね」

「特殊部隊こつでも出撃できまや」

「申し上げます。本部の設置完了しました」

流石準備が速いな。このスピードは他の軍隊には無いといふところだ。

「よしつ。特殊部隊は本郷軍本陣付近で待機。こつでも動けるよう
にしておけ」

「サーイエツサー！」

「山狗は諜報に専念。魏付近で情報を集めろー。」

「わかりましたんね」

「これより国境警戒レベルを5に引き上げるー。」

「「「「」」解ーー。」」

国境警戒レベルはぶつちやけそのまんまの意味だ。
下でだらしねえ作者が説明してくれるそつだ。

（国境警戒レベルとは）

国境警戒レベルとは検問及び警備員の増員、装備に関わることである。

レベル1 普通の状態。

検問一つにつき警備員30人（警棒、ピストル装備。ピストルはコルト45。）

レベル2 検問付近で問題があるとレベル2になる。

警備員は検問一つにつき50人（サブマシンガン、サバイバルナイフ、強化スタンガン装備。サブマシンガンはP-90。）

レベル3 国内で問題が起きるとこのレベルになる。

警備員検問一つにつき80人（アサルトライフル、短刀、強化スタンガン装備。アサルトライフルはM5カービン。）戦車5輌配備（

99式戦車。)

レベル4 隣国で戦争があるとのレベルになる。

警備員検問一つにつき150人（アサルトライフル、ロケットランチャーチャー、強化スタンガン、対空ミサイル装備。アサルトライフルはM5カービン。ロケットランチャーハはSMAW。対空ミサイルはFIM92。）戦車20輌配備（99式戦車。）
戦闘ヘリ20機配備（ブラックホーク。）

レベル5 緊急事態になるとこのレベルになる。

検問は封鎖される（市民が通ることは可能。）

国境はもはや警備員ではなく チーム兵士になる。

説明これくらいでいいか ナレーションはサボり屋です。

こうして（？）彼方は白服の連中を調べることを口実に本郷軍の本陣に向かつたのであった。

（第七話）彼方が改造を始めたようです。重大会議（多分）（後書き）

更新速度上げるよう頑張ります。

「頑張れ頑張れ出来る出来ん絶対出来るやれる気持ちの問題だ！頑張れ頑張れ（ｒｙ）

これからもよろしくお願いします！

（第八話）本郷軍の協力。彼方による本郷領の偵察（食べ歩き。）（前書き）

素晴らしい駄文。

（第八話）本郷軍の協力。彼方による本郷領の偵察（食べ歩き。）

「国に」とは チームに任せて俺は今、本郷領で食事中だ。

「小籠包追加お願ひします」

いや～スネークじゃ無いけどせっぱり食べるという事は大事だな。
中国の食べ物はなかなかうまい。西洋の料理も嫌いじゃないが

「チンジャオロース追加お願ひします」

今日くらいたくさん食つてもぼちはあたらんだけ。食べているばかりでは仕事にならないからだるいナビとつあえず白服連中の事を探るか。

「うん？」

「「」の店どうなつとんのじやあー」

「ラーメンに得体の知れないもん入つとたゞー」

「それ食つて気分悪くしてもうたんじやー迷惑代さんかいー。」

はあ、何やってんだかあの連中。

この前も警邏のときいたなあんな連中。最近見ないとと思つたりつちに居たのか。

こつちは食事中だつてのによ。どうあそば…

「おこやじのバカ共！」

「だと」「あー。」

「今なんてぬかしやがった！」

頭が悪くて耳も悪かつたら終わってるぜお前ら。

「聞こえなかつたのか。バカつて叫つたんだよ！」

「野郎なめくわつやがつてぶち殺したろかい！」

売られた喧嘩は高く買つてやるぜ。

「上等じゅボケがー泣いて謝つてもゐむわざー。」

「うへの台詞じゅー。」

「行くべきじゅー。」

さて久しづぶりの喧嘩だ。（違います）派手にこじりづ。

名前が忘れられそうな彼方へ何故かチンピラの格好をしてくるや
クザ？

ヤクザの風の男がいきなり殴りかかってくる。

「えつ？」

おいおいパンチってこんなに遅いもんだつたか？

信じられねえ。元の世界でもこれの何10倍は強かつたぞ。

「ぐふ！」

元の世界のチンピラより弱いとはなんと嘆かわしい。パンチ一発がまともな喧嘩になりやしない。俺がいじめてるみたいじゃ無いか。

「おいおい喧嘩売つてきてその程度か？もつちよつと本氣でかかつてこじよ！」

挑発してみるこれに乗つてきて本氣を出しじゃれば少しは強くなるかもな。

「野郎！」

2人のうち一人が殴りかかってくる。やいつの手を掴んでそのままもう一人の方に思いつきり投げる！――

「くそ覚えてやがれ！」

伸びてる2人を放置して逃げる。

「捨てぜりふそれしかないのか？」

にしてもあんなに弱い連中がチンピラとは、世も末だな

「仲間も連れていけよ。最低だなあの兄貴」

とりあえずこの連中は警邏に突き出しおおく。やっぱつこうつこう連中がいるのは仕方ないことなんだろうな。

と言つても治安の悪さは異常だ。まあ今みたいに携帯や無線機があるわけでもないしな。

「ありがとうね……あんたいい男だよ……」

腰をバンバン叩かれる。パワフルなおばちゃんだ。

「いえいえ困つたときはお互い様ですよ」

やっぱ人間助け合つて生きて行かないとね。

「本当にありがとね……」

「いえほんとにいいんですよ。それやりたつき頼んだ小籠包とチキンオロースをはやく持つて来てくれませんか？」

「まかしどきな。腕によつをかけて作るよ……」

長生きするだらうな。

「お願ひします」

やっぱ昨日筋トレしてて夜中まで寝てたからな眠い。
いくらもうすぐ引退するからって体が鈍ると困るしな。
そのとき1人の女性が数人の兵を引き連れて入つて来る。

「ここか喧嘩があつた場所というのは」

「これはこれは関羽様」

「女将」

「先程の事ですが喧嘩ではなく私の店を救つていただいたものです」

「そのものは何処に?」

「あちりりです」

騒ぎの当人はと書つと「眠いぜ……」 眠たがっていたというかもう半分寝ていた。

「おい、貴様。先程ここに騒ぎをおこしたそつだな」

「ああ、店から金を奪おつとして嘘ついてた人達のことですか?」

あらあ！？俺誰と話してんんだ？

思考がままならない……@「@でwdcいうwぎーーー／f・v
えqふえ'r f q w…つはーー危ない危ない。

「そつなのが女将?」

「はい。そこを助けてくれたのがここのお方で」

なんか照れるなそんな言い方されると。

「貴様名前は」

「渡辺、渡辺寛です」

眠い、寝たい、いつそのこと寝るか。

また意識が飛びそ…うガク

「貴様嘘をつくなー渡辺寛といえば・・あーー寛殿ー」

「おーなんだスタングレネードでも飛んできたのか?凄い音がした
ぞ。」

「あーーー。闘羽さんでしたつけ?」

あつてるよな。

眠くて頭がボーッとするよ。

彼方の睡眠時間は極端に少ないのだが、多量の睡眠をとつて次の日
睡眠時間が少ないとやたらと眠くなるといつ意味不明な現象である。

「いとなどいひで句を?..」

流石に先程の愛紗の声が効いたのか意識がはつきりとしてくる。

「すいません。少し寝ぼけていまして」

「やうですか。それでこちらは何をしに来たのですか?」

「いや実は白装束が情報を漏洩しているとの噂を聞き、私の軍で探
つていたのです」

「それは本当ですか!」

愛紗さん声でかいですね。眠気が吹っ飛んだぜ。

「確かに情報です。農の可能性もありますが」

山狗が何か掘んでくれればいいんだがな。

「では早速ご主人様にお伝えせねば。寛殿もよかつたら一緒に来てくださいませんか。詳しい事情もお伺いしたいので」

確かに本郷軍の協力は欲しいが、本郷軍から情報が漏洩してゐるしだうしたものかねえ。

「寛殿！ 寛殿！」

「ああはい。わかりました」「一緒にさせてくれださー」

「感謝します」

俺は辺りを見渡し、今の情報を聞いてる奴がないか確認する。
流石に大丈夫か。

その店にいたとある男は「つち、やはり邪魔だな」といつて去つて行つた。

そして数10分歩くと城が見えてきた。

「いらっしゃいです」

客室に案内される。

まだ耳鳴りしてやがる。じんだけ声でかいんだよ。

「じばらへおまちください」と言い残し部屋からいなくなる。

「中々の城だな。今は曹操としのぎをけずつてゐるのか。大変だな本郷軍も」

そして白服の情報漏洩。内部に裏切り者がいるのか?ここは少し調査しないといけないな。
面倒なことになりそうだ。

「にしても綺麗な客室だ」

本郷軍の城内が綺麗なのは一人の女性のおかげだ。
彼女達は今日も仕事に励んでいるに違いない。

「失礼します」

そんなこと言つてるとメイド服を着た女性が入つてくる。
ていうかこれ絶対一刀の趣味だろ。
まあ一刀も男だからなやつぱり女性には色々な服を着せたいに違いない。

とこ「うかよく」の服設計できたな。助平心のおかげか?

「どうぞ」

「どうも」

置かれたお茶を飲む。

お茶なんて言つがこの時代のお茶は相当高い。
だからおいしいと言つ分けでもないがこれは入れてる人が上手い、
ということかな。

「エーデルツバウカ」

「とんでもねこっこですよ。」のお茶はあなたが入れたのですか？」

「は、はーーーあのねこっこなかつたでしょうか？」

真面目な子や。

将来にこ興さんになるよ。

「いえいえとてもおこっこですよ。慣れていらしゃる」

澪なみに入れるの上手いんじゃないかってくらこのお茶はまつまつおいかつたせいか湯のみのお茶はすぐに無くなつた。

「おかわりもらりますか？」

「はー只今」

メイド服を着た彼女は微笑みながらお茶を入れる。
少し口ぼしそうになりながら入れていて
思わずその光景に和んでしまう。

「（俺も丸くなつたかな）」「

小声でボソッと呟く。

「エーデルツバウカ」

「あつがとつ」

相変わらずお茶は香しい匂いを放つていて、
その匂いを楽しみながらお茶をする。

何杯でもいけそうだ。

「いや本当にいい腕だ。味が変わりませんね」と笑みをつかべ褒めると月は顔を真っ赤にして出て行ってしまう。

「あのちょっと。笑顔はまずかったかな。彼女勘違いしてないといいけど」

いつもとき相手がどう思っているかわかるのも辛いもんだな。
時々自分が恨めしくなるよ。顔を見ればだいたいわかるし。
でも乙女心は簡単には読めないな。そこは訓練、練習でなんとかするしかないのかな？

「寛殿準備が整いましたので」

扉をぶつ壊れる勢いで開けながら言つ。
ダイナミック 入室すんな。愛紗さんいろいろな意味で自重してくださいお願いします。

「わかりました。案内の方よろしくお願ひしますね」

いつもして彼女に連れてこられたのがものものしい雰囲気から察して
多分会議室だらう。
座っているのは武将、文官だらうな。
さつきも言ったがものものしい雰囲気だ。
一刀もこの雰囲気に耐えられないのか汗をかいている。
つまり俺の持ってきた情報はそれほど重大ということだ。

「それではこれより軍議を始める！今回の案件は特に重要なから皆心して聞いてほしい」その場の皆はうんと頷く。「それでは寛殿お願いします」

俺に話が振られる。

こんな重い雰囲気で会議なんぞしたくないのだが、仕事だから仕方ないと割りきるしかない。

大人になれば分かると言われずともな。

「はい。この情報が入ったのが、3日前。チームの諜報部からの情報で白装束の男達が曹操軍と本郷軍の城の近くで田撃。その後の調べにより白装束が本郷軍内部の情報を曹操軍に漏らしていることが判明。その情報が入ったのが2日前です」

「確かに今回の戦では敵に我が軍の動きが筒抜けになっていたように感じます。寛さんの情報も信憑性が高いですし、やはり寛さんの軍に協力してもらいたいですね」

「まったく問題ありません。それも協議で確定済みの事項です。本郷軍からの救援要請には無条件で答えることになつておりますので

無表情で淡々と喋る。

武将の中には拳を握りしめてる人もいるようだ。
体が相当震えてるのが分かる。

それほど腹が立つたと言つことなのだろう。
お人好しが多いようだ。俺は好きだけどね。

「我が軍は一応国境付近で待機していますが、どうしましようか？」

その問いに朱里は「寛さんの軍はそのまま調査を続けてください。

「後、直ぐに動けるようにお願ひします」と言つた。

「わかりました。その直ぐに伝えておきます」そう言い終えると無線機を取り出し、《国境付近で待機中の全軍つぐ、いつでも戦えるように準備をしろ。司令官は龍夜とする》と言つた。

《了解》「ちはまかしとけ。白装束の連中も動いてるよつだ。そろそろ大きめの戦争が始まるだろつな》

《ふふ大きめの喧嘩になりそうだ。久しぶりに大暴れできれうじやないか。なあ、龍夜》

《元から大暴れする氣だつたさ》

《そうかじやあな切るぞ。」「ちは大事な会議中なんでね》

《了解。じゃあな飯ばかり食つてないで仕事しろよ》

バレてたぜ。

大きな戦か、龍夜が言うんだかなりの規模になりそうだ。
10万は降らんかもしれんな。

「それでは私はこれで」

「あ、待つてください。軍議の後にお話があるんですがよりしいで
しょうか?」

なん・・・だと。

思わず声を上げるところだつた。

機嫌が悪かつたら一発殴つてたかもしれない。

「構いませんよ」

「聞きたい」とねえなんだろうね。どちらにしろ時間はまだあるんだ。
ゆっくり話を聞くひつじやないか。

彼方はそつ考えながら会議室を出て大きな欠伸をしたのだった。

俺はまた密室に案内されお茶を飲んでいた。

わざと顔を真っ赤にして逃げたメイド服の彼女にお茶を入れてもらつてゐるが、空気が重い原因は俺だが。

そんな重い空気の中その静寂を破つたのは彼女だった。

「先ほどのすみませんでした！」と体を90度曲げながら言つて。

「こ、え先ほどのことは私にも非はありましたし、えつと貴女が気に
する」とではあつませんよ」

この子ほんまに純粋やね。まるでこいつちが悪いみたいやないか。

「あのそれでお詫びに真名をお教えしようと思いまして。あの、そ
の「迷惑で無かつたら」

「いえ迷惑なんてとんでもない。お教えただけるのなら是非」

真名を教えるとは…いいのかな？後で殺すとかは無だぜ？

「えつと、その用です」

「用、良い真名ですね」

「あ、ありがとうございます」

このトガの董卓とは思えないな。まあ、それは正史の話だが。

「ではおわりをいただけますか？」

俺はまたお代わりを要求したのであった。
結局会議も相当長かつたらしい。

2、3時間は待たされた。

待ちきれなくて部屋で寝てたが、誰かの足音で目が覚めた。

「（誰だ？巡回の兵か？）」

その足音はとても忙しなかった。
部屋の前を行ったり来たりしているのだ。

やがてその足音は部屋の前でピタッと止まると中に入つて來た。

俺はといつと椅子の裏に隠れていた。

そしてその人が近づいてきたところで椅子から飛び出し「動くなー」と叫んだ。

もちろん俺の愛銃M1911A1を構えて。

そうしてそこにいたのは白装束だった。

「死ね！」

短刀を持って突っ込んで来る。

「甘いな」

即座に白衣の後ろに回り込み、首を叩く。

「ひひ

ばたつと倒れてしまつ。

「俺を殺そうってか、もつ少しともなやり方があるだらう」
「元ひひ

ピストルをしまつ。

その時扉の向ひにや壁の向ひにいた方が正しきな。

「ふつ。覗きとまこい趣味してやがる」

「必ず貴様を殺してやる。渡辺寛！」

さてお前程度の連中で俺を殺せるのか楽しみだ。

三國志か四国志になつてゐるような氣もするが氣のせいだろ。
といふか気にしたらまずい色々と。
そこに本郷と諸葛亮が入つて来る。

「すみません。待たせてしまつて」

「えつといのは一体？」

「ああ、私を狙つてきたみたいです」

まあ小手調べのようだがな。

気絶はさせたが起きたら舌を噛むか毒でも飲むだらう。

「やはり本格的に動き出していくんでしょうか？」

本格的？まさかこいつらの親王はもつと強こばずだ。

「みたいだね」

「といひでお話とは？」

わざや飯を食つてないのを思い出したのぢやつたと本題に入りたい。
ところか何か食いたい。

「えつと、覧さんの軍は県の事も調べておられますよね。そこで現在の県の情報もわかる範囲で教えてほしいのですが」

「もちろんお教えしましょ。県は今のところ平和ですね。本郷軍と曹操軍の戦いも傍観するようです。ただ王と軍師の仲が相当悪いようです。我が軍でも分裂するのではないかという見方がかなり強まっています」

そつこいつと朱里は顎に手を当て何かを考え始めた。

「あの、すみません俺も質問したいんですけど……ですか？」

「構いませんよどいおっしゃってください」

「えつと、天の国の出身ですか？」

天の国？あのクソみたいな国のことか？悪いのは市民じゃ無く政治家さ。

ろくな奴がいないからなあ。昔仕事でよく殺したもんだ。

「貴方の言う天の国が日本ならそうなりますね」

そういうとほつとした顔をした。

「じゃあ、車とか戦車とか警察とかを作ったのも「私です」 そういうで
すか…」

「はあ、駄目だ腹減つてんのにこの喋り方は出来ないな」

「俺の豹変ぶりに一刀は驚いていたようだが、すぐに戻つて来るところ
う言い出した。」

「よかつた。さつきの会議みたいな雰囲気はもう嫌だつたから」

「あれは酷かつた。特に関羽がね、物凄い形相だつたしな」

「愛紗は仕事になると鬼と化すから」

本当に鬼と言う言葉がぴったりだね。もしかしたら本物鬼すら裸足
で逃げ出すかもな。

おおこわ～。

「おいおい本人に聞かれてたらボクられる台詞だな」

「たまには言わせてくださいよ。本当に」

「確かに高校生に大守の仕事は大変だよな。俺が一刀だつたらとつ
くに旅に出て商売でもやつてるよ」

その言葉に一刀は、ははつと笑つた。

「そりゃいえ、寛さんも大守の仕事回って来ますよね。どうしてるんですか？」

「あんなもの1、2分下手すると数秒で終わるな。それとさんずくは止めてくれ。どうも他人行儀な呼び方は苦手なんだ。仕事ならいいんだけどな」

自分はさん呼びをよくしているがな。

「大変ですね、数秒で仕事終わるんですか！」

「余裕で」

(「この人のスペック人間じゃないよな。）

「今、人間じゃないって考えたろ」

「わかるんですか？」

「よく言われるからな。人間じゃないって言葉と考へにやたらと敏感になつてな」

まさか一刀に言われると思わなかつたけどな。
やつぱり自重したほうがいいのかな。

2000人一気に斬る奴を人間とは言えないが（笑）やっぱ逃げろ！

「ど」「へ行く？」

へえあ――！

＼デーティーン／

「ところで彼女はあんなところで何をしてるんだい？」

「さあ何か凄い策でも練ってるんじゃないですかね・・・せつきのこと突っ込んでいいだ「駄目だ」そうですか？」

そう言われた一刀はしゅんとした。

頑張れこれも大人になるために必要なんだ。
いりません。

作者後で殺す！

次回に続く！

「強引に持つて行きやがった！」

「もう嫌…」

（第八話）本郷軍の協力。彼方による本郷領の偵察（食べ歩き。）（後書き）

きっと特別な存在なのだと感じました（苦笑）

～PV2000突破記念～（前書き）

『作者マジで最近だらしないわ（私生活的な意味で。）』

SPV20000突破記念

『PV20000達成おめでとう!』

『そりだな

あれ?なんかテンション低くね

朝だからな

「やい、やい、問題なのかな?」

モード

一
いはらぐな
か 前傳

疲れるから。まじで

『まあまあやつ言わば』

『だいたいにして凌ほどうしたんだよ。凌古』

『彼女を呼ぶ』ことだけは簡便してください『

『えー、いいやつだ』かな

『頼ります。この通り』

『土下座までするか

『気持ちは痛いほどわかるけどさ。

『そんなこと言えるわけないだろ…』

『言つたら即拷問部屋行きですね』

『離見沢並に恐ろしこなさい』

『龍夜聞いてくれよ』

『なんだ?』

『勉強オワタ〜(×○×)〜』

『即終了かよせめて勉強しようとする意志を見せろよー。』

『嫌ですか』

『言こきつやがった』

『嫉妬、悪口自分の事ばつか考えてんじえなのか。お前昔を思い出せよ。君の心をピュアだつたじやねえかよ』

『昔、はつー『え、回想に入るの?』 そつだよ俺だつて夢を追いかけてた。そつだ今こそ立ち上がらなければ『何にだよ』『そつ君は今日から富士山だ!』 ありがと炎の妖精』

『今回もどうなるか』

『いつも通りで安心しました』

『もう驚かねえぞ』

『ではまた来週』

～PV20000突破記念～（後書き）

救いは無いんですか！！

～第九話～曹操とドンパチしたかつたがまさかの話合～魏本陣が賑やかになつた

兄貴「やつぱり作者だらしねえし」

（第九話）曹操とドンパチしたかつたがまさかの詰合せ魏本陣が賑やかになつた

結局諸葛亮の O H A N A S H I E は吳の情報が欲しかつただけみたいだ。

そんなんでも 3 時間も待たせられたかと思うと腹がたつ。

その後一刀と数時間話して今に至る。

「スネーク印のカロリーメイトが無かつたら今頃餓死してたな」

このカロリーメイトは改良版軍隊用になつており腹持ちがかなり長くなつている。

一箱で一日は持つが一日二箱以上食べるともれなく下痢になれるらしい。

少なくとも一般人の食べ物ではない。

「うまいけどさ一杯欲しいよな」

でもこれ腹に悪いんだよね（スネーク体験談）
やつぱり見た目に騙されたら駄目なんだろうな。

にしても白装束の連中が何をしたいのか今だに分からん。

そう考えていたせいだろうか。

誰かにぶつかる。

『すいません』と彼方が言つと、その男は『野郎てめえのせいで新しい服が汚れてしまつたやないかい。と言つても今日は機嫌がええからのう、いくらか金出したら見逃したるわ』と言つた。

「てめえみたいな野郎にやる金は一銭もねえ！」

「なんやとわれえ、ぶけ殺されたいんか！」

ヤクザの拳がかなりのスピードでとんで来るが、それをキャッチして拳を握り潰す。

ヤクザは『ああああーーー』と声を出す。
ヤクザの拳を放してやる。

「死ねー！」

ヤクザが振り向く。その手にはピストルが握られていた。
ヤクザがピストルの引き金を引く。
ピストルはかちっという音をたてた。

「お探し物はこれかな？」

懐から弾倉を取り出す。

「われえ。上等やないかいそいつでないと面白くないからの」

「一閃・紅葉斬り」

その瞬間ヤクザは倒れる。

「極道ならそれなりの筋ちゅうもんを通せや」

昔はこんなことはなかつがな。
これも時代の移り変わりか。
変わることは良いんだけどね。
悪くなるのは良くないことだ。

「ま、俺が言える」とでもないか

あつと彼方も大変なのだろう。

今は自宅警備員なのだが。
俗に言つてFBIである。

「お前は後で殺すと言つたな。あれは嘘だ」

ちよつ、おま。あつ―――！

逝つたかと思つたよ。

一方その頃。

「吳付近で白装束を確認」

「吳の連中と白装束の連中が接触したと報告があった。諜報部隊は
直ちに現地に向かえ」

これが忙しいときの チームである。

今回ばかりは頑張つていいようだ。

(こんなに忙しいのはいつぶりでしょうか。大将は何処かに行つてしまひますしぬつましたね。)

「澪一この書類を頼む」

「はいわかりました」

「おこ、吳の方はどうなった?」

「特に動きは無いようですね」

「三十分事に何かなかつたか報告をせん。後魏から田を離すんじやないぞ」

「了解」

こつじたごたしてはいるが実際に忙しいのは諜報部隊だけである。現地部隊は来たる戦いに向けて準備しているだけである。

その頃の龍夜はと言つと。

「まあ飲めよ

「いや自分は、もう

と首を振つてゐる。

「一〇の程度で酔つとはだらしねえな

龍夜が酒をがぶ飲みしながら言つ。

「俺もう駄目だわ」

酒の席にいた数人が、席をたつ。

もちろん理由は、ほらあれだ。

流石に皆のまえで嘔吐するわけにはいかないだろ？ つまりそういうことさ。

龍夜『どうせあと数週間は仕事は無いんだ。だったら酒くらい飲んだってかまわねえよ』と一人でしゃあしゃあ騒いでいる。

【何があったのか?】

【さあ?最近いつもあの調子だ】

【おこお前ら聞こえたらいちあるんだ。もう少し話してみたまえ】
ボロボロ泣れる、

龍夜には色々な名前があるが、喧嘩番長とこう呼び始めたらしい。特に酒を飲んだ後はやたらと強くなるらしい。この時代も女は強じとしか思えないね。

【悪い俺も抜けるわ】

【俺も】

「おこ 60が倒れたぞー!メティーカー・メティーカーー!」

「ここも倒れてくれるべー!」

この戦争のような宴会を第86回鬼酒宴会と チーム内では言われる。

86回とこののは今回で11のひみつの86回目と云ふことである。

兵士はたまたもんじゃなこと話す。

そして彼方はとこうと。

「「」は何処だ？」

迷っていた。

彼方は「」4時間くらい迷い続けていたのだ。

「オラ、こんな世界嫌だ。オラ、こんな世界いやだ。元の世界に帰るだーい。元の世界に帰つたなら「」ヒー飲んで一服つくだーいが！ なんてバカな」と言つてゐる場合じやねえ。はよ帰らんと遅に殺されてしまつ」

ざまあwww。

「お前は後で殺すと約束したな」「そ、そうだ大将助けて」あれば嘘だ「ぎやーーー！」地獄に落ちろ作者！」

ほほ遡きかけました。

「お向か見えるぞ。双眼鏡何処にやつたけな

「魏の旗か。て俺は何処をどり歩いてきたんだ？」

自分にツツ「」を入れてどりするんだ。

とつあえず逃げるか。

いや待てよここのあの連中を殺つたらそこに戦い終了じゃないか。どうせ正史じやないんだし。暴れるか。

とつあえず「」これから餌食になる奴に謝つておへよ。

「今日は容赦しないぜ」

ドンパチタイムだ。

風を切りながら移動する。
かつてない清々しさ。

我ながら興奮しているんだなと思つ。

同時に人を殺すことに慣れてしまつたのだと落胆もする。
くよくよ悩んでもしようがないとわかついてもやつぱりやつと思つ
ちまつ。

「 ジーか」

ついに魏の陣地まで来た。
さすがに奇襲を仕掛けるのは忍びないので、近くの衛兵に声を掛け
る。

「あんた敵が来たぜ。 ジーにな」

衛兵が銅鑼を鳴らす。

兵士が数10人出てくる。

「第一ラウンドとこきますか!」

東北の鬼彼方 VS 精銳魏軍

「無殺・一閃斬り」

この時なぜ俺が魏の兵士を殺さなかつたと言つと、誰かに見られて
いるからだ。

この戦が長引くと得をするのは呂の連中だけではない、白装束の連中も得することになる。

魏と呂を潰せば後は俺の国と一刀の国だけ。

天の御遣いが滅べば後はやりたい放題だからな。

ただ分からるのは連中が何を企んでいるかだ。

つまりどこで魏の兵士を殺すことはあいつらの思ひどりになるところ」と同じだ。

だから俺は殺さなかつた。

いやもちろん無駄な殺生はいけないとこのあるんだけども。

こいつまででもそいつ敵を氣絶させたはずなのが何万といやがるこの連中に本郷軍は善戦していたのか？

まああつちは武将がチートだからな。

しょうがないんだが、にしてもそろそろ武将が出てきてもいいはずなんだがなあ。

一行にでてこないな。と思つた瞬間網が飛んでくる。何だこの位なら余裕で避けれると思つたがいいことを思いついたので止めた。

網が俺にかぶさる。

「成功しましたね。姉者」

「調子に乗つてるからこいつなのだ」

調子に乗りやすいのはお前じやないかと切実に感じたが言わないことにした。斬られるのは痛いしな。

と、いうことで連れてこられたのはあれだな総大将が座つたり寝たりする場所本陣と言えばいいのか。多分そういう場所だ。

体を縄で縛らされているが」「んなので縛ったとはいえないな簡単には
されるよ。

「貴様あ名前は…」

尋問ですね分かります。

「そうですね。なんと言えばよいか。ああ渡辺軍総大将の渡辺寛と
言えばいいのでしょうかね?」

「貴様それが本当ならこの敵陣に大将が一人乗り込んで来た事
になるだろ?が!」

なつてゐやん現在進行形で。

「姉者落ち着け嘘ではないようだ。田を見れば分かる」

「確かに嘘をついてる田ではないが」

まだ疑つてゐな。そら信じがたいけどぞ。

「じゃあ貴様は何をしにきたのだ」

「なんとなく」

嘘は言つてないぞ。正しくは迷つてたまたま見つけただけだが。
さすがにこれには飽きたのか姉者と言つていた、察するに妹、も
ため息をついていた。

「頭だい」「大丈夫です」最後まで言わせろ

「で本物の目的は何なのだ覧殿」

「ああ、はい、えつと、その…」

「申し遅れた私は姓は夏候名は渾字は妙才だ好きに呼んでくれ

礼儀正しい挨拶をしてくる。

反射的にこれは『一寧』こと返事をしそうになつた。

確か夏候渾と言えば『』の名手だよな。

「いいのか？こんな不得体の知れん奴に正体を明かしても？」

「大丈夫だろ？ それに第一の天の御遣いを斬つたとなれば民や他國の評価は落ちるだろ？ しな」

「むむむ私の名前は姓が夏候名は渾字は元讓好きに呼べ！」

あまりの血口紹介に『はあ』としか言えなくなる。本当に姉妹かこの人達とどうか自己紹介だけでなぜ赤くなつたし。興奮しそぎだ。

「姉者はやっぱ世話が焼けるなあ」

そんな満更でもないみたいな顔で言われても困る。この世界の人達なんか変じやね？ そんなどこかが楽しんだだけじゃ。

「それで秋蘭がいつ本当の目的とは何なのだ…」

本当の目的がある前提で話を進めるんですね。いやいいんだがさ。

「これは軍事機密なのであんまり言いふらさないでくださいね。実は魏つまり夏侯淵さんの国に情報を流してる連中がいるという情報が入りました。それで調べていたってことですね」

若干違うがこれで澪に怒られないですかね。

というか今の話俺殺されても仕方ない情報を軽々しく言つてしまつたんじゃないかな?

ヤバいな。いやもうなるよになれだ。やりたい放題やつてやる。いつもとやつてゐことは同じよ。

「そんな情報を簡単にはなしてみかつたのか?私たちは一応敵なのだぞ」

「敵の敵は味方つてね」

「つまりどうしたことだ?」

「今までばかりしてゐるのにわからなことかまさかNO U KI N

か!

確かに偽報とかに真つ先に引っかかりそつだもんな。

「つまりだ姉者第三勢力がいるところだ」

「異か

おしいー。いやまあ今の魏からの意見はそれが普通なんだだけだね。

この姉妹も立つてるのが疲れたのか椅子に座る。

俺も椅子に座りてえー。尻が痛い。

そんな俺を見かねたのか夏候淵が椅子をすすめてくる。こりやどつもと言つてどかつと座る。

姉の夏候惇は『こんな奴に椅子をすすめるなど』とブツブツ言つてたが夏候淵に『冷静になれ姉者』と言わると静かになった。ほんと元気だよなこの人。

「しかし呉と寛殿の国は同盟関係のはずだが」

「まあその敵は本郷軍や家の軍だけの敵じゃないってことです。そうですねといって言えば大陸の、いえこの世界の敵ですかね。目的は何なのかはよく分かりませんが」

「つまり魏と本郷軍の戦闘で消耗したところを呉が突いてさらにしての第四勢力が突くと」

すごい解釈だ。さすがは姉の補佐をしているだけはあるな。

「そのとおりなんですが。隣の人は大丈夫ですか？」

見れば夏候惇が茹でダコになつてゐる。夏候淵の話では頭が混乱しているだけらしいがぜつたいオーバーハイトしてるぞ。

今触つたら火傷するな間違いく。

「つまり我が軍も利用されていると?..」

「そりなります」

しかしこれほどまでに真摯に受け止めてくれるとは。つづきりふざけたことを言うなこのたわけ者がと言われて斬られる

かと思つたよ。

やつぱり人間、口があるんだから話さないとね。

武力で何とかなる時代はいつか終わるんだ。

そう考えると夏候淵は先を見据えているのか？ 賢い子だ。

「そういうばもつ一つ。最近太守が狙われたといふことは？」

「華琳様が？ 特にそんな事はなかつたが」

「実は今吳、本郷、そして我が軍全てで太守暗殺が未遂に終わつて
いるのです」

そう俺は1回だが一刀は3回だつたけかな住民に化けて巧みに近か
ずき殺そうとするらしい。

俺より本郷を狙つてるのがよくわかる。
つまり本郷はなんらかの鍵を握つてているということだ。

「うーん。それが事実だとすれば今の戦いはかなり不毛になるな」

「数10万の兵士を敵、味方だしてますからね。多分不利になりか
けた魏に情報を流したんでしきう」

しかし本郷が魏に負けていたとしても情報は流さなかつただろう
がな。

つぐづくきたねえ連中だ。

そんなどころにぼろぼろの魏兵が突つ込んでくる。

「た、大変です。所属不明の軍団が襲撃を掛けてきました」

「本当か」

じやあめたぐるぐる
さけい

～第九話～曹操とドンパチしたかつたがまさかの話合い魏本陣が賑やかになつた

彼方「ちよつと」「いや」

作者「いやまじすいませんでした。勘弁してください」

彼方「DA ME DA」

筋肉事項です。

～PV25000突破記念～（前書き）

短いです。

～PV25000突破記念～

彼『どうも彼方です』

作『作者です』

彼方『今田のゲストはメイトリクス大佐ショウワタヤンです』

シ『よろしく頼む』

作『まさか25000を越えるとは・・・意外に皆さんが読んでくれていてることに感激です（泣）』

シ『ところでなんで彼方が彼なんだ？彼方にすればスッキリするのに』

作『何となくです』

シ『・・・ふざけやがって！』

コンボ中

作『私を倒しても第一第二の作者が・・・』

彼『どこの魔王の台詞だ』

シ『なんでこの小説は駄文なんだ？書かなきやすつきあるのに』

作『それは酷いwww』

彼『今の生きがいだからじゃない?』

作『まあな。今は田標も無いし、これくらいだよやる』
『君

シ『勉強はしないのか?』

作『もちろんプロですから(キリッ)

シ『お前は必ず雇つといったな。あれは、嘘だ』

彼『まだまあねえや WWW』

作『この組合員が!』

?『俺達や農業共同組合のもんだ』

ドカツ、バキ。

作『グフツ』

?『組合なめんな WWW』

?『いたしかない犠牲だ』

作『じゃあこれもこれもいたしかない犠牲だ!...』

?『ちよつとなんだあんた!...』

（ドンパチ中）

シ『小説がドンパチ賑やかになつたろ?』

彼『短いですが今回はこゝら辺で・・・かたづけがあるので』

～PV25000突破記念～（後書き）

本編も速く更新できるように頑張ります。

～第十話～今回こそドンパチ。白服の連中は口先だけのKA KA SHIで

更新速度遅くなつたなあ。

まあもうすぐテストだししょうがないね。

～第十話～今回こそドンパチ。白服の連中は口先だけのKA KA SHI-Eで

前回を振り返る。
忘れた。

作者が使い物になつてないようだがいつものことだ。気にしないでくれ。

あの後白服の連中が攻めてきたって事で監査に出て行つたのだが・・・
・俺の事忘れてるよな。
せめて縄を解いてほしかったぜ。

「そろそろ脱出するか」

俺は力を入れ縄を弹け飛ばす。

「縄を破壊したのはいいとしてこれからどうするかな・・・」

うーんとつあえずさつき魏将につけておいた、盗聴器の様子でも・・・
。

『華琳様が！ ザーー当なのか！？』

『さつき伝令が言つてたわ』

「くそつノイズが入つてるなこれだから安物は・・・」

華琳というのは一応魏の大将のことだよな？何かあったのか？
とりあえずモールス信号を送つとか。

「龍夜 side」

「これだから中途半端な前線は嫌なんだよ」

彼方だつてもう少ししましな場所に配置してくれればいいのによつ。

「龍夜中佐諜報部隊から連絡が」

なんだ？

「七八が龍夜に耳打ちをする。」

「そりやあ本当かーー？」

「間違いありません」

彼方が行動を起しあしたか。
多分澪に怒られないようになつたな。
まあいい。
やつと喧嘩の始まりか。

「よし！現地部隊は今から魏の本陣に向かう。やつをと準備しろー。」

「サーイエッサー！」

白服が一枚噛んでるかもな。
やつをと行くか。

「side out」

「これでよし。モールス信号を送ったのはいいんだが何分で来るんだ？そこを考えていなかつた俺へ（^—^）／遅に犯られる。

『やはり本郷の助力を仰ぐしか無いだろ？』

『くわしいけど華琳様がいればいくらでも盛り返せるわ！』

『やつと聞こえるようになりやがつた。』

『やうと決まれば本郷と寛殿にも伝えねば』

『問題は通してくれるかね・・・』

『ここまで話飛んでたのか？』

その後春蘭は正面から堂々と行けばいいのだといつたらその案が通つたつていう。

まさかの正論が出たのに驚いたのか、盗聴器越しなのに皆が唖然としているのがよくわかった。

頼みに行ぐるに堂々としてるのもどうかと思つんだが・・・まあいいか。

「寛殿！」

おおっ・・・結構近くで会議してたんだね。気づかなかつたよ。

「手を貸せつてことですよね？まあ増援が来るのに数刻はかかるでしうから期待できるかはわかりませんが

「感謝します」

感謝ねえ。

「感謝は貴女達の大将を助けだしてからにしてください。それでは行きましょうか本郷軍の陣地へ」

こうして俺は本郷軍の陣地に向かうことになつたのであつた。
にしても嫌な予感がするぜ・・・

「本郷軍陣地へ

本郷軍の陣地に来たのはいいんだがお話中みたいだから気配を消しておくれよ。

あそこには姉ちゃんはなんか曹操は敵なんだとか騒いでるし。
なんなんだ？ 彼女のせいでの場の空気が重くなつてるんだが。
それに反応して貴様あと言つている春蘭もどつかと思う。
あれだな猪だな。

というかこの不毛な口戦はまだ続くのか？
かれこれ30分はこのやり取りが続いてる。
お、本郷が宥めに入つた。
そりやあこのままつてわけにもいかないしな。

「翠落ち着いてくれ

「これが落ち着いていられるかよ！ 田の前に父の敵がいるんだ！」

「やはり本郷などに頼もうとしたのが間違いだつたのだ！…」

「・・・はあー」

いつまで続けるんだよ。

思わずため息しちまつたよちくしょー。

「寛様何とかしていただけませんか?」

「わっ…なんだ関羽さんか。驚かないでくださいよ」

と、面つむぎ紗まきよとんとした顔をした。

・・・何なの?俺なにか悪いこと言つた?

「顔になにかついてますか?」

「いえ、星が寛様はただ者ではないと言つてたので、ついでにちがつしゃるのではと思つまして」

星さん歪みねえな。

いや確かに気づいてたけども。

歪みねえなは褒め言葉です。

「特に武器の扱いにたけているわけでもあつませんし、統治に少し自信があるくらいですね」

「やうなのですか…それでやうきの話なのですが…

すまなやうな顔をして言へ。

俺がただ者云々の話はいいのか。

俺的には言い訳しなくていいからいいんだけどさ。

「わかりました何とかしましょー

「本当にですか！－ありがと、いざこます－。」

いつしてる間にも白衣の連中が来てるんだよ。
この連中のせいで兵士が死ぬんだ。

ぶつけやけ打開策無しだけどね WWW

「どうやらも落ち着いてくだされー

「うわわー黙つてりー。」

「おこ、霧やあひ」

ほつ、俺とやれりかてか上等だよ。

「貴様さつからいわせて、やかましいわ！－？」

この声でその場にいる皆が静かになる。
流石の関羽もびっくりしてこるようだ。
お兄さんも頭にきたよ。

「さつきから黙つて聞いてれば、がたがたやかましいんじゃ－！お
まえら一人のせいでは、まわりに迷惑がかかってるんだ！－そこを
自覚できなのにか－！」

「しかしあつちが先に」「じゃかわしいわ－！－···」

「先にあつちからかかつてきても冷静さを失つてゐようぢや武将失
格じやないのか？」

その言葉に流石の春蘭も黙る。

「そつちのあんたもだ！あんたのせいで兵士が死ぬんだ！あんたが死ぬわけじゃない！敵はもう田の前に来てるんだ！今はそつちの対策がさやじやないのか！」

「・・・」

翠は歯を噛み締める。

「この戦だけ我慢しろ……その後は殺し合ってなんでもしていろ」と言ご捨てて、わざわざ陣を出る。

増援到着地点に走りながら叫ぶ。

「後はどひなるか。それはあこひらが決める」とだ

戦をとるか敵をとるか。

「どひにしほ俺は暴れるだけだがね」

増援到着地点に龍夜達がいればいいんだが・・・。とりあえず高速移動をして増援到着地点に向かう。ここであつてるよな？

わかつけておいた田印を確認する。

「どひだ？」この口にあつたような・・・ああこれだこれだー」

目印を確認して、近くにいると思われる味方に照明弾で合図を送る。

「かすかに光が・・・彼方からの合図だ！急げ！」

「はつーーー！」

そつははつまくせつてくれたよな？彼方。

「！」いやあ増援到着の前に一戦交えないといけないみたいだな

そういう彼方の前には白服が大量にいたのだ。

やつぱり妖術使いがいるな。

厄介だが、数分耐えればいい。

もしかしたら龍夜の出番をとつちまうかもな。

「かかつてきな・・・相手になつてやる

「天誅！」

元関東連合一代理組長佐々木彼方VS白服の男達

俺はきりかかつて来た白服をいなして首を掴まえ骨を折る。

「意外に脆いんだな」

周りは既に白服の連中が囲んでいる。
だからといって焦つてはいけない。

こういうときだからこそ冷静でいなければいけないのだ。

「とりあえず派手に行きますか！――！」

冷静・・・?

どうみてもいかれてるよ。

一瞬なぜか不愉快な気分になつたが気にしないでおぐ。
それがいいんだよ。じゃないとストレスで體をやられますよ。

「一閃・斬首―！」

ネーミングセンスを疑うつて？

シンプルイズザベストといつ言葉を知らないのか？
まあいい。

実際俺刀あんまり好きじゃないんだけどなあ。
でもこの数じやあ銃を使うといつてもすぐ弾切れになるしなあ。

「死ねえ！――！」

「おつと危ない危ない

「考え」とした結果がこれだよ――!
すぐさま反撃に出る。

「ねいあー・あひよーと」

斬つても斬つてもわいてくるとかもはやボーナスステージだな。

1UP！1UP！！

虚しいわ！！

「最近は・・・岩に隠れとつたのか？」

ウホッ・・・いい名言。

やつぱり森の妖精しかいないね。

テンション上がってきた！！

「地獄斬り・臓器破裂！」

周囲の白服の心臓がパーンする。
自分で出しどとおいてなんだけどグロいのう・・・ヤス。

「おい！俺の分は残してるだろうな？」

「あらあー？もう来たのか？もつ少しゅくつでもよかつたんたぜ

？」

俺の囮んでいた白服連中を吹き飛ばして龍夜が近づいてくる。

「お前だけにおこしことこ持つていかせれるかよ」

びつひじりまだいるんだけどね。

「へへ久しぶりのでかい戦だ。彼方！まさか怪我とかしてるんじゃ
ねえだろ？」「？」

「やう思つか？」

「まあかお前ほどの奴がここにひらひらむけられたる器だとは思つてなこさ
龍夜はニヤツと笑つて敵をバッサバッサと切り伏せていく。
はあー・・・手加減つてもんを知らないのかね？」

「フツ・・・」

俺も笑つて敵に向かつていぐ。

一方その頃兵士達はといつと・・・

「迫撃砲準備！！」

「連隊前身！」

「榴弾砲準備！・・・装填！・・・」

忙しそうに走り回つたり弾をつめたりしている。

「一斉に撃て！・・・」

轟音が鳴り響く。

砲身から発射された弾が着弾し、白服を吹っ飛ばす。

「命中を確認！・・・次弾装填、撃て！・・・」

「おこおこ派手にやつしてゐるぜ」

「味方に当てずには撃つとい技術だ」

流石うしの軍隊だ。本当に関心させられるよ。
さつきから敵を斬りまくってる龍夜も少し疲れたのかあまり移動しなくなつた。

「龍夜ビビついた？疲れたのか？」

「少しあしゃぎすぎでな・・・」

ああ現代の戦争じゃあ敵が何10万なんてそつないもんな。
しかし俺達で相当暴れたが、まだまだいるな。

「中村准尉！」

「なにかあつたか！」

兵士が報告する。

「西より白服の軍団が約5万接近中です！！」

5万か・・・幸いここは大将達が抑えてくれてこる。

「よし、砲兵隊の半分と装甲車を向かわせろー」

「はーーー！」

ナカムラ・ゴロウ
中村吾朗 56歳。

ベトナム戦争、湾岸戦争、イラク戦争に参加し、一度も負傷をしなかつた英雄。

彼は特訓や訓練、実戦などで自分の時間は殆ど無い。たまに古参の軍人と飲みに行く程度である。

歳をとつてはまだ衰えていない。本人いわく「死ぬまで現役」だそうだ。

「砲兵隊射撃やめ！！移動開始！」

「よーしこいつを運ぶぞ」

「中村準尉！装甲車位置につきました！」

よし後は砲兵隊だな。

「敵は後どれくらいだ？」

「おそらく後、1km程かと」

「装甲車部隊は迎撃準備！！」

(若いのががんばるんじゃまだまだ倒れるわけにはいかん。)

ははは相変わらず頑張ってるな。

「龍夜！」

「わかってるよ。もっと派手に、だろ？」

「やつこつ」と

「これ以上に派手にやるのか？」

「いくらなんでもやりすぎじゃないの
そのとき爆発が起る。」

「粉塵爆発くらいなーーー！」

「龍夜さんやつすぎだよ。」

「うわ、ここに粉塵が飛んできた」

ダイブ（地面）して避けた。

間一髪だったぜ。

龍夜間違いなく俺を殺す気だ絶対そうだ。
じゃなきゃいつまでも飛ばすはずが無い。
とりあえず腹がたつたので白服の連中と龍夜をせめてにして龍夜
には止めをさした。

「な、何故？ グフッ」

「逝ったか」

龍夜のせいで俺の出番がなかつたじや無いか。
まったく自重してほしいよまったく…。

「おー！ おー！ 彼方つてどうかしたのか？」

「なにが？」

「龍よ「何が?」……なんでもない」

スネークを威圧感で圧倒する今逆らひ本氣で殺つちやうだ

「おええええええ

「汚ねえ。スネーク食いすぎじゃないの?」

「今なんか変な電波を受信した」

あれ?本格的に頭がイカれてきたのかな?
スネークを痛い目で見る。

「止めるおおそんな目で俺を見るんじゃない!ー!ー!」

「だが断るー!ー!」

こいつじて白服の連中は半分くらい殲滅したのであった。

～第十話～今回いモドンパチ。白服の連中は口先だけのKA KA SHIでナ

感想あまりきつくない程度にお願いします。
ぜひ参考にさせていただきたいので。

～PV30000突破記念～（前書き）

兄「作者だらしなさがある」

彼「作者え…」

～PV30000突破記念～

作「いやあ～まさか30000を越えるとは思わなかつたよ」

彼「よかつたな駄文に田を通してもらひて」

作「一応書き換えもして少しは見やすくなつてる……はず?」

彼「俺に聞くな」

作「まあ少しいくらこ努力はしてるよ」

彼「まあこれからもこの小説を見てこぬ顔の期待に応えられぬよつに頑張れよ」

作「ふ、ふん別にあんたのためにやつてあげてる訳じゃないんだからね!」

彼「誰得だよ……気持ち悪い」

作「ああんひどう」

彼「だらしねえし……」

兄「だらしねえな

彼「とにかく作者つてどいつてサブタイトルつけたるんだ?」

作「うへんぱつと思いついたやつ

兄「だらしねえな！？」

ぱん！ぱん！

作「oh! shit! ああ！」

兄「どうや!? 挿入つたやろ!/?」

作「F CK Y U」

兄「なんだてめえ。へい構わん殺すぞ」

彼「作者ざまあ WWW」

作「ああ————！」

彼「今回はこの辺で（苦笑）」

～PV30000突破記念～（後書き）

彼「安心と信頼の駄文」

～第十一話～ 白服は弱すまい話にならない。 龍夜はスピード派。（前書き）

更新速度を上げて、クオリティーを下げないよつに頑張ります。

～第十一話～ 白服は弱すあとで話にならない。龍夜はスピード派。

前回までの24。

「ふざけるな……遊びじゃないんだ。いつまでは時間がないんだ…」

「……なんか間違つてない?」

そんなことはないよ。

「前回は白服をせりひいてから始まるんだ」

知ってるんなら最初からお前が言えよー。

「少し黙つてね」

すいましゃへん。「めんなしゃへい（笑）

「血祭りに上げやる」

や、やめひーべわあーーー

今日のトーンショーンなにこれ怖い。

アホの作者は置いとくとして。

その後白服を片付けて（半分しかも今なお増殖中きめえ~~~~~）

増殖をビツビツやつたら止めることができるのか」を考える。

答えは単純だ。術者を戦闘不能か殺す。これが一番だ。

とりあえず今日の戦闘は終わったので今は陣中で休んでいる。

今は銃の改造ではなく手榴弾の改造をしている。この前うつかり火薬を爆発させたのは秘密だ。

もう少しで澪にばれるとこりだつた。

澪にばれる＝死を意味する。

なんで俺が改造に命をかけるかつて？それには訳がある。

昔カスマム銃を見て憧れたから…かな？
その時憧れたやつがスネークだつたんだ。

「くつくしゅ。誰か噂してんな」

スネークとは10歳の頃に知り合つた。その頃はちょうど2000円札が開発されて俺がヤクザを辞めて（殺し屋は続行）メタルギア？とかいう核兵器を破壊する手伝いをした。
12歳で殺し屋辞めて チームを作つた。

実は、澪とは2歳の頃からの知り合い。

澪はもう2歳のとき英語を話してたよ。
こうみてみると俺結構昔からやんちゃやつてたんだなあつて思う。
そんなこんなでできた手榴弾がこれだ。

命名 SK1 (SKは佐々木彼方の略)

爆発範囲 半径20M

爆発範囲がバカみたいに広いので屋内で使つてはいけない。特攻す

るなら話は別だが。

安全装置（ピンを抜いても爆発しないための装置）があるが彼方専用の手榴弾なので安全装置を外して1秒で爆発する。少なくとも人に使つべきではない武器である。

改造止められないぜ。なんでスネークが止めるのかがわからん。別に情報が漏れたり武器が盗まれたりすることは無いって。こいつが漏れたらこの世界で第一次大戦が勃発する間違いなく。結局その日は改造と作戦会議（寝てて聞いてなかつたが）をして寝た（地面に）

そして翌日。

「ふあ～～良く寝た。地面の方がベッドより落ち着くぜ」

朝俺は普通に目覚めたが、外がやけに騒がしかつた。

「朝つぱらから何なんだ？」

テントを出て（隊員の服をきて）近場の兵士に話し掛ける。

「何かあつたのか？」

「敵襲です！白服が1万の兵力で攻めてきました！」

わおー朝から？」「苦労な～って。

兵士から聞いた話だと澪、スネーク、龍夜、中村のじっちゃんが頑張つてというか独壇場らしい。

皆チートだからなあ。さつきから宙で兵士が待つてるのが見える。確かに陣の中を櫓から見てみると外は騒がしいがほとんどの兵士は

寝てる。

あの騒音の中よく眠れるよ多分夜間の見張りをしてた連中だらうな。
あんなにぐつすり眠れるのは。

「にしても、なんかなあ」

緊張感が無いといつのがちょっと…ね。

白服は一応人間型だから血も出るし、臓器もある。
でも人間じゃないからぶっちゃけ人体実験とかしてもいいんじゃね?
やりたくないが。

少なくともそこまでやるほど酷い人間になるつもりは無い。

「たゞいしょ～～さん片付きましたよ」

「なんだ龍夜か驚かせないでくれ」

「本当に驚いたのか?」

「いや」

「やつぱりな

龍夜が急に訪ねてきたが白服の連中は片付いたらしい。

1万を数分で倒すとかｗｗｗ。
期待を裏切る高スペックだな。

「1%も力を出さなかつたが片手で勝てたぜ」

「こいつは人間っていう生き物で合ひてるんだよな?」

「こつと一緒にする＝普通の人達並び動物達に失礼だと思つんだが。

「お前失礼な」と考へてるだろ？」

「まさかただ白服の連中も、」苦労だなと思つただけを

嘘だけどな。

「どうだが」

「疑つてゐなあ～～」

「いや別に疑つてはないさ。ただお前が化け物云々のことを考えてたんじやないのかつて思つただけだ」

思いつきつゝ疑つてゐだろ。目が嘘をつけりよ。

「嘘つきは泥棒の始まりつてな」

「お前には言われたくないが

む、失礼な。

「いの？」

そう言い放つて走つて逃げる。

「おい！…待て！ラ…絶対悪い意味だらけの言葉」

「まさかそんな訳無いだろ」

「じゃあなんで逃げるんだよー。しかも言葉に思つてきつ悪意がこもつてたぞーー。」

「捕まえてみるよ。ま、龍夜にはまず無理な話だナビな」

「許せねえぞーー。」

龍夜から走つて逃げる。

龍夜が追いつけるとは到底思えないと最近は龍夜も秒速一〇〇三になつたからな油断してトロトロ走つてると追いつかれちまうぜ。

「またあの二人やつてるんですか。まったく毎日飽きもせずにやつますね」

「昔からだろ」

「そうですね。2、3歳の頃からああでしたよ

「わうなのが

今日も寛軍は平和のようだ。

「まちやがれーー。」

「誰が待つかつての」

今日の夕飯はなにかなつて考えてた時だった。

普通の速度で走つています。

白服の連中がまわりから沸いてきたのだ。

「また」「こつらかよ」

「どつやから白服の連中に持てちまつたみたいだ

「よかつたじや無いか。なあ！—賭けをしようぜ」

「いいが何を賭けるんだ？」

だいたい予想はつくんだが。

「こつらを多く倒したほうが勝ちそれでどつだ！—」

「乗った！—んで？何を賭けるんだ？」

何を賭けるかによつて俺のやる気度が変わるんだぜ？
たとえば今夜の飯とか。

「今日の夕食どつだ！—」

「OK…—それでこつ

ヒヤツハー今日はこつもより多く食えるぜ！—

ぶつちやけステーキはいつでも食べられるんだけどね。

でも毎日食つてたらありがたみが無いだろ？それに動物も大変だしな。

こうみえても結構命を大事にするやつなんだぞ？
そうと決まればさつさと片づけるか。

もちらん殺すよ？

まあ生物かわからないから殺すよりも破壊するの方が正しいのかもな。

「もたもたしてると俺が勝つまうぜー！」

龍夜が調子のいいね。良くなーいね。

「おつと」

手元が狂って龍夜に撃ちまつた、といつのまゝで元壁に狙って撃ちました。

「あぶねえじゃねえか！」

「ちつ外したか・・・」めん間違えた

「今ちつて言つただろー！」

「マサカソソナコトアルワケナイジャナイカ」

間違えて片言で喋ってしまった。恥ずいぜ。
つまりわざつてことだ。まあwww。

「腹がたつぜ」

「?に何言つてもわからなーだろ?ナビ

「殴つていいか?むしろ殴らせう本氣で

「おお恐い恐い」

白服の連中を倒すことが目標なのに俺の挑発にのるとはね。余裕、余裕。

「龍夜、手がお留守になつてゐるぜ」

「そいつは悪かつたな」

龍夜が敵を切り刻んでいく。

龍夜の剣術は我流なのだがパワーよりはスピード、と言つた感じだ。
俺も我流だがスピードよりはパワーで押す。
いわゆる「じつ押し」だ。

もともと現代でナイフは使っても刀や検なんものは使わない。
わかるだろ？ 刀持つて突っ込んだら、機関銃に掃除されるそれだけ
の話さ。

「彼方！動きが鈍いぜ疲れたのか？」

「いやすこし考え」としてただけさ」

帰つたら軽機関銃を改造して装填数を上げまくればいいすれば白服
相手でも銃を使える。

そうしそう、じゃないとこの世界で銃が使えない。

「これで終わりだ！」

どうやら龍夜が最後の一人をやつたみたいだ。

「どっちが勝った!」

何なんだろう今日の龍夜のテンションやばいな。

「984と973で俺の勝ちだ」

「彼方の・・・勝ち?」

信じられないといった顔で俺を見てくる。
こっちみんなと云いたくなるような顔だつたぜ。

「今夜の晩飯は俺のだな」

「次は負けねえ!」

と言つて陣の方に走り去つてしまつた。

「俺も帰るか

ゆっくりと陣の方に歩きだす。

たまにはゆっくりしたつていいだろ?急ぎすぎるのは現代人、いや
日本人の悪い癖だ。

まあ辺りは殺風景で何も無いけどね。
装備も刀とピストルしか持つてない。

流石に軽機関銃とかアサルトライフル、スナイパーライフルを常に
持つてるのはちょっとな。

今はアサルトライフルとスナイパーライフルを組み合わせたような
銃を開発している。

室内でも使いやすくて、近中遠距離全てに対応できる頑丈で軽いつまりオールマイティな完璧な銃を作ろうとしている。

世の中に〇%と一〇〇%は無いと言つが誰が決めたのか教えてほしい。

頑張ってもできないものはあるし、頑張らなくても出来ることもあるはずだ。

世の中には〇も一〇〇もあるのです。

ただ、〇を一〇〇にするのも、一〇〇を〇にするのもそいつしだい

れ。

もしかして明日田覚めたら、違う世界にいた。

なんてこともありうるだろうし、もしかしたら明日起きたときにはもう死んでるかもしぬないだろ？

全ての可能性は否定できると同時に否定できない・・・つまり矛盾だ。

物事はいや特に人の理論は矛盾のオンパレードや。

平和にすると言いつつも戦争で人を殺す。

そして戦争で憎しみは憎しみを生み負の連鎖を起こす。

何が言いたいかつて？よつは人間は矛盾だらけの生き物つてことさ。だからこそ無限の可能性があるのかもな。

とりあえず今はこんなことを考えるのはやめにする。
気付けばもう夕方だ。

陣につくこひには暖かい食事が待つてゐる。

澪の手料理はうまいことこの上ないからな。

兵士の連中も待ち遠しいだらつ。

この後陣に帰つたら龍夜がやけ酒をしていたのはまた別の話。

翌日、今日は昨日と違つて騒がしくない朝を迎えることが出来た。

「朝日が気持ちいい」

欠伸と背伸びをしながらまだ少し眠い頭を起こす。

「大将」

澪が急に話し掛けてきた。

気付いてはいるけど背後から話し掛けるのは止めてほしい。

「どうかしたの？」

「大将先程白服の軍団が発見されたのですが、その中に魏の大将が確認されました」

そーなのかー・・・ってえ?マジですか!

「魏の将と本郷軍に連絡は?」

「すでにありました」

対応ナイスです。

そういうことで早速作戦会議を開くことになつた。

～第十一話～ 白服は弱すまい話にならない。 龍夜はスピード派。（後書き）

今回の彼方の考え方は意味不明でしたね。
ぶっちゃけ自分自身何を書いてるのか全くわからない状態でした。

（第十一話）龍夜最近だらしなえ……澪、恐いでしょう……？（前書き）

文才が無いってつらいな……サム。

（第十一話）龍夜最近だらしねえ……。澪、恐いでしょ？

結局会議では軽機関銃を持たせた第6連隊（男しかいない部隊）を使つことになつた。

実はこれくじで決めている。

なので会議では違う意味で緊張している。

どの連隊になつても俺が出陣するのは変わらないんだけどね。そりゃあ俺大将だし一応軍のトップだからね。

よくそうは見えないって言われるけどちよつとどじにひか相当ショックだ。

まあ当たつてるから反論出来ないのはしょうがないね（泣）

で、大事なのはこいつやるの？ってことなんだがそこは相手の出方を伺うそうだ。

それまで暇だよなと考えつつも最近自分も昔みたいにやんぢやしなくなつたよなとも考えていた。

やつぱり軍を辞めたためだろうか？軍を辞めてから調子がいいんだよなあ。俺に軍人とかヤクザは向いてないのかなあ？

ちょっと残念なそうでないような。まあ軍人に向いててもあまり嬉しいけどね。

さつさと軍隊辞めてよかつたよ。すつきりしたぜ~~~~~

「大将！」

兵士に話しかけられる。何のじ用事かな？

「なんだい？」

「いえ、その、龍夜中佐が……」

「ほんまにと耳打ちしてくれる。

「はあ、わかつた止めてくれぬ」

「ありがとうござりますーー。」

龍夜が昨日俺に負けてその腹いせに暴れてるらしい。

龍夜最近だらしねえな。この前も酒飲んで暴れてたらしき。なんで酔わないのに悪酔いしてるんだ?

気分なかー?どっちにしろだらしないので制裁してくれる。

「移動中~

「昨日の戦いは俺が勝つてたのによーぶやかいるぜー。」

あーダメだこりゃ ただの酔っ払いに成り下がってやがる。

「龍夜!死ね」

「!?

辺り一体に霸氣を漂わせる。

今回は少しやりすぎだと想うんだじゃあな。

「ちよつ、待つて「存在その物を消し飛ばすーー秘剣・零ーー」ア

ツ—————!」

「今度から気をつけろよ・・・龍夜」

半径500m程荒野になつてゐるがもともとやつだつたから問題ないね。

さて雑巾になつてゐる龍夜は放つといて澪のところにへと行くとするか。

澪がいるところまでジープで行くこととする。

道がボコボコしてゐるから走ると転ぶんだよね。

こんな時に限つて故障するんだよね直すより走つた方が速いんだけど、ジープ捨てるわけにいかないし。

「どうしようかな陣までもう少し運ぶか・・・よこしまと結構軽いな」

ジープを片手で持つてゐるんだが紙みたいな重さだな。
これなら一円玉の方が重いぜ。

結局そのままジープを陣まで持つていった。

「ちょっといいかい?」

「はいなんでしょうか?」

「こここの修理を頼むよ

持つていていたジープを地面上にそっと下ろす。

「了解しましたでは

「頼むよ~

さてジープも運んだし澪に会いに行くか。
なんて考へてゐると。

「あら大将帰つてきてたんですか？」

「いややせつてきたといひなんだ」

本人の登場だ。都合よく会えるとは思つていなかつた。

「澪第6連隊のことなんだけど・・・」

「確かに全員に軽機関銃を装備させるんですよね？」

「そのとおりなんだけどさ、やっぱり装甲車も出したほうがいいん
じゃないかなあ？と思つてや」

大丈夫だとは思つけど念のため、ね。

少なくとも チームの連中が白服の連中に負けるとは思えない。
なにせ巷じやあ最強の軍隊だからな。

チーム隊員のタフさは世界一さ、少なくとも人間という種族に入
れていいのか怪しいところである。剣ごときじやあ死なないし、矢
は刺さらない。車に跳ねられたら車がへこんで、50口径の機関銃
をくらつて無傷。

こんなの人間じゃないわ！ただの化け物よ！

だったら人間らしくすればいいだろ！つていうことになるんだよね。

多分この世で1番か2番に硬いんじゃないかな。
やっぱり類は友を呼ぶのか？

俺の親友、知り合い、まともなのつてせいぜいジニー（アメリカの

大統領で彼方の親友）くらいだよな。

澪、スネーク、龍夜は当然おかしい部類に入るだろ？あ、俺もか。悲しいことながら澪レベルの化け物になると、銃弾、車、剣、あたるだけで全部壊れるんだよね。

つまりこういうこと。

硬さ順

一般人 < 乗用車 < トラック < 装甲車 < チーム隊員 < 龍夜 < スネーク < 濱 なんだよね。

この結果を見て自重しようと心の底から思つて、軍隊辞めました。結局働かせられてるけどね。

でも辞めたおかげか、ゆっくり出来るようになつたね。

筋トレとかも毎日欠かさずやつてるから太らないで今の体型維持できるけど、止めたら太るんだろうな・・・。
運動しないのに食つて太らないなんて都合のいい体系の奴はまずいないと思う。

そういう奴つて太ると痩せにくいらしいし。

そんなことを考えながら軽機関銃の装弾数を増やすために改造して
いた。

威力 白服を5人貫通するくらい（200m）

装弾数 400発

重量 1kg

オプションパーティ 4倍率スコープ、サプレッサー（連射するな
つけないほうがいい）

白服相手に普通のアサルトライフルを使うとすぐに弾が無くなつてしまつたため、装弾数と貫通力を高めた銃。

フルオート時の反動が少なく取り回しやすい軽機関銃である。
地面に固定して使えばスナイパーライフルみたいな使い方もできる。
ただ、サプレッサーを装着して使うとサプレッサーがすぐにイカレてしまうので気をつけよう。
安定した銃弱点という弱点は無い。

「これなら対白服で使えるな」

俺は近くにあつた椅子について一息つくことにした。
根の詰めすぎは良くないしね。
はあーお茶でも飲みたいなあ。
ウホッいいところに水差しがあった。
これでも飲むか。

その水差しに入っている液体をぐいーと飲む。

「・・・毒だなこれは」

まずは無いが、体に良いもんじゃあるまい。
ちなみに毒なんてものは効かない。

味はピリッとしてたね。

喉はあんまり潤わなかつたが。

「白服の連中ついに毒を入れるようになつてきたか」

毒がきかないのは過酷な訓練のおかげだ君達は真似しちゃいけないぞ！

そういうば毒を使う殺し屋つているのかな？

昔はいたみたいだけど最近は聞かないなあ・・・。

ついでに俺が殺し屋だつたときはスナイパー・ライフルとか、爆弾とかよく使ってたな。後ナイフもよく使つてた。

なるべく関係無い奴は巻き込まないようにするのが俺のやり方。まあ同業の連中にはよく甘いと言われてたが。

そういうこともあって殺し屋は辞めた。そして軍隊も辞める。

この世界から帰つたら家で普通に暮らすんだ・・・つて死亡フラグたてちまつたな。

「懐かしいなあ・・・」

いつの間にか20歳だもんな。光陰矢の「」とじとまざりのことだな。

少し前まで違う世界にいたとは思えないな。

現在進行形でまた違う世界に來てるが。

とにかくそんなことばかり考えていたらもう夕方になつてた。
こつちにきてから時間の進み方がやたらと速いような気がする。気のせいいか？

「大将～」飯ですよ～

「はこはこ今行く

まあにこな今はこの世界で生き残ることを考えようぢやないの。
いやこの世界で暴れることをの方が正しいかな？

「大将？速くしてくださこ冷めちゃこますよ～？」

「わう急かせなつでよ・・・」

まあ冷めた料理は食べたくないしさつと行きますか。

澪の料理は美味しかつたけど隣で蛇を食つてるスネークのせいでも
よつと気持ち悪くなつたのは言つまでもない。
共食い云々の前に人の隣で堂々と蛇を食べるのは～遠慮願いたい。
スネークだから注意しよつが無いんだけぢや。

「寒いなコートでも羽織るか・・・」

周りに障害物が無いため風が吹くとかなり寒い。
しかもそんなに日に限つて見張り番という殘念なことになつてしまつていてる。

「寒いなあ、ココアでも飲みたいぜ・・・」

まあ雪国住んでたからこれくらいはまともな方だと思つ。
ロシアとか寒いのレベルじや済まされないしね。
氷点下2、3ならまだしも30とかね凍るね。
もうね寒くて感覚が麻痺して逆に暖かく感じるね。

まあこれは錯覚とも言つべきだらうか。

ハバネロを生で食べるかなんて馬鹿なことを考へてみると澪が「」つちに歩いてくるのが見えた。

「やあ澪どうしたの？」

「大将のために暖かいココアを持ってきてあげたんですよ

「どうも」

澪からココアを受け取つて暖かいところが熱いココアを一口飲む。

「どうですか？」

「普通に美味しいけど？」

「それならいいんです。じゃあ見張り頑張つてくださいね」

澪「コアになんか入れたんじゃないだろうな？」

そんなわけないか特に何も入つてない感じだし。

砂糖は入ってるかもしだれんが。

まあそんなこんなで厳しい見張りをおえたわけだが眠いね。うん。

寒いことより寝ないよに耐える方が辛かった。

寝たら次の日澪に覚めるとのない眠りにつかされる。
しかもじつべりとね・・・。

「よお寛一」危うく覚めることのない眠りにつかされそうになつた人

「龍夜速いな」

「俺も昨日見張り番でな。危うく寝るとひだつたぜ」

「危ないな」

「ああ、あのときのことを思い出しただけで田が覚めたせ・・・

龍夜はその地獄を一度ではなく2度味わっている。
3度目は無いだろうな。

まあ流石に龍夜も意識はしてゐみたいだが。
それでもやはりかしそうな気がしてならない。

龍夜だし。

ていうか昨日の事はノータッチですか。

龍夜は酒を取り出し飲みだした。

「おいでおいで何処から持ってきたんだその酒」

「店から買つてきたやつだよ。今日はこれ飲んで寝る

「やうですか。まあ飲みすぎてもた暴れないよつにな

酔わないのに暴れるんだからたまつたもんじやない。

昨日みたいなことがまたあると澪が出動する可能性があるんだよな。
いやまあ自業自得なんだけどね。

それでも龍夜は俺の戦友の数少ない生き残りだからフォローはするけど。

でもあんまり度が過ぎるみうなうら澪の口にえになつてもうおひ。

その時の俺は忘れていた魏の大将が操られていたことを。

～第十一話～龍夜最近だらしねえ・・・。澪、恐いでしょう？（後書き）

更新速度を超スピード! ?にしたいに今日の傾向

（第十三話）魏の大将をダイナミック 救出（前書き）

作「救いはないんですか！？」

カズヤ「救いは無いね！！」

（第十三話）魏の大将をダイナミック 救出。

「龍夜」

今思つた魏の大将のことをすっかり忘れていた。

「なんだ？」

「いや、魏の大将ってどうなつてたつけ？」

「澪かスネークに聞いてくれないか。そこら辺の話は」

むむむ・・・アッサリと言われてしまった。

一応龍夜も偉い方なんだからそれくらいは知つておいてほしいよ。
まあ俺も知らなかつたから人の事は言えないと
しうつがない澪に聞いてこようか。

俺が忘れることはよくあることだ。やつぱり大事なことじやないと
思つてゐるのか？

作戦とかよく忘れるしやつぱり俺は軍人に向いてなかつたのかもな。
そんなこと気にしないけどね。この世界が終わつたら同時に軍隊時
代も終わるんだから。

さてとそろそろ本格的に魏の大将を救うとしますかね。

作戦内容はこうだ。

まずは第6連隊を前進させ、白服と接触をせる。
その間に俺が突つ込んで大将を救う。

簡単なことだ。しかし聞く人によつては自殺行為とも取れるが。
何10万の軍団に1人で突つ込むことになるからな。

まあ大軍を相手にしても勝てる自身はある。

相手は人間では無く傀儡だからな。

容赦なく斬れる。人間でも容赦なく斬るが。

「澪！！」

澪を呼ぶ。

「なんでじょうか？」

「そろそろ準備しよう」

「わかりました。伝えてきます」

澪が目の前からスッと消える。

これも慣れた光景だ。まず自分がそうだつたしな。

とりあえずこの前開発した手榴弾を10個持つしていく。

念のため改造した機関銃も持つていくが。

「弾倉も10、いや20持つていくか」

念には念を入れてな。

$400 \times 20 = 8000$ か。

今度また改造して装弾数を増やそう。

これから白服が敵になるなら軽くて尚且つ装弾数が多く威力がある銃が必要になる。

今度はうちの技術部と話し合つてみるか。

「大将、準備完了です」

「よつしや、じゃあ行きますか」

「頑張つてくださいね。私は後方支援ですから」

「死にはしないさ」

死にたくても死ねないと言つた方が正しいだろうか。
俺は神様なんて信じてないし尊敬もしてない。
この世界に本当に神様がいるなら俺は神様を殺すね。
神様がいなきや紛争なんかもなかつたかも知れないだろ?
まあ戦争をするのは人間が愚かだからなんだろうけどさ。

そんなこんなで白服がいるとこままできたわけだが。

「なんじゅ じりゅあ

櫓から見えるだけでも相当な数がいるぞ。

これにジープで突っ込むのか。ジープが持たないだろこれは。
やっぱり戦車だしてもらおうかなあ・・・。

「これみたら流石に自信がなくなつてくるぜ」

もともと魏、本郷軍合同でやるはずだったんだが、犠牲は1人も出
したくないのでうちの軍だけで頑張ることにした。
白服の対処にも慣れてきたみたいだしな。

「おいおい寛大丈夫か?ジープで」

「大丈夫だろ。多分な」

「まあ死にはしないだろ、つがよ」

「そこまでやわじやないさ」

「まあ頑張れよ」

龍夜はやつて酒を取り出し飲む。

「うめえーーー生き返るぜ」

「あんまり飲むなよ」

あいつの酒好きにも困ったもんだ。
まあ酔わないから高い水みたいな物だな。
胃に穴でも空けばいいのに。

なんて物騒なことを考えたりする。

「動き出したか」

大きな声や足音が聞こえる。

うちの軍隊が行動を開始したのだらう。

「さてと行きますか！」

ジープのエンジンをかける。

「「」の相棒と一緒に帰つてこれればいいが・・・」

俺が使つた車は100%の確率で爆発する。

なんでかつて？紛争地帯に行けば嫌でもわかるや。

日本にいれば平和すぎてビックリするね。

「どばすぜー！」

もちろんこの時代だ。コンクリートで覆われた道路なんかありゃしない。

言つてみれば悪路だ。

走つてるとジャンプしたり横転したりしそうになる。
まあスピードを出し過ぎてるのも原因なのだが。
あまりに酷い道で少し酔いつくなる。

「贅沢は言えないが、やっぱり気持ち悪いな」

そんなこんなで白服軍団の近くについた。

双眼鏡を取り出し遠くを見る。裸眼で遠く見ることもできるのだが、目が異常なほど疲れるので素直に双眼鏡を使つこととした。

「これまた多いなあ」

「すいへ・・・、じぢゅ、じぢゅします。

まさしく見ひ人がゴリのようだー！状態だね。これは。

あれに突っ込むのが主にジープが心配だ。

まあ白服をはねたくらいじやたいしたことはないだろうが。
多分そちらの戦車より固いんじやないかな？

普通の人間がRPG-7を喰らって生きてるとは思えないが。

「じゃあ行きますか！」

アクセル全開で白服集団に突っ込む。
ぐしゃぐしゃと明らかに何かが潰れている音がする。
グロイグロイ。

「かあ～こりゃあ車が持ちそうにないぜ」

魏の大将が乗った（乗せられてる）神輿にはまだまだといったところか。
目測で1kmはあるかな？

まあすぐにしがいから肉片と血が邪魔で邪魔で仕方ない。

「どけどけ肉の塊になりたいのか！…ヒヤッハー！…！」

テンション上がってきた
とことん邪魔な連中だ！！

「後500！」

なんとかもちそうだ。
ガタガタいつてるが大丈夫か？

「ラストスパート！…」

神輿の手前にジープを止めて機関銃を的確に白服にぶち込む。
魏の大将・・・名前は何て言ったかな？まあいい。
そいつをジープに乗せていざ発車！！

「ん？ 動け！ 動けってんだよーー。」

と呴いてみても破損が激しくなるばかりでいつにかノンジンがかかる気配は無い。

俺のせいかなあ？

「やつぱつ装甲車にすればよかつた」

そんな後悔もする間もなく白服が群がってくる。

「少しは感傷に浸らしてくれよー。」

機関銃でぶん殴る。

その攻撃で4、5人吹っ飛んでいく。

くそっ！！ 機関銃に銃剣でも付けとくんだったぜ。
これじゃあすぐ機関銃が壊れちまつ。

「魏の大将を担ぎながら合流するのはきついな・・・」

どこか抜けれそつなどこは無いかと探すがもちろんそんな場所はありやしない。

やむおえないでの先日開発した手榴弾を使つ。

ピンを抜き思いつきり白服に投げる。

手榴弾が白服を貫通して飛んで行つてゐるが気にしない。

でかい爆発音が辺りに響く。まるで屋内にいるかのよう。

「いっやあつたあきてかなわんわ」

耳がアツ――――――!

まだ耳鳴りがするぜ。

まあそれはいいとして今の手榴弾でポカンと穴が開いたところに突つ込む。

「どけ――おらあ――」

機関銃を振り回して手榴弾を4個お見舞いしてやる。
相当な数が吹っ飛んだみたいだ。炭しか残っていない。

自分で開発した手榴弾だが改めて恐ろしいと思つた一瞬であつた。

「つおおおおおお――」

雄叫びを上げながら少なくとも常人の限界を越えたスピードで走る。
つまり白服を突っ張りしながら走つてゐるわけだ。

第三者からみたらものすごい光景だろう。

第三者は回りにいっぱいいるが。

テッレッテーといふ音楽が頭の中で再生された。

・・・なんでだろうな。

こんな世紀末に流れそうな曲が選ばれるとは俺の頭が世紀末かもな。

「天誅――」

「危ない危ない危ない・・・」

この連中なんなの？本当に嫌になるんだけど。

全く・・・この世界程やばい三国志は無いだろ？（フラグ）

フラグってなんなの？もう一回別の世界に行くの？作者馬鹿なの？

死ぬの？

作者は言つてゐる。『そこまで言われる筋合いはない』と。

どこのエルシャダイだよまつたく・・・。

作者は後でキルするとしてさきにこいつらを片付けないと。あまりにもたかつてくるもんだからゾンビにしか見えなくなつてき

た。

「——ウイルス・・・なんて架空のお話だけどさ。實際にあつたら大変どこのくじやないし。

「そろそろ・・・もう少しが

穴の開いた地面が見えてくる。

多分迫撃砲の着弾点だろう。

「死ねえ！！」

「どすこい！！」

突つ張りで押し出す。

RIKISHI舐めんなよ。

こうしてどんどん突つ張りで敵を吹き飛ばし味方に合流することができる。

突つ張り強いな。今度からこれ主体に戦おうかな？
突つ張り、投げ技があれば丸腰でも勝てる。

「ただいま」

え？ 軽いって？ いつもこんな感じだよ。

「お帰りなさい。あ・な・た」

「澪・・・大丈夫?」

素でこの言葉が出たけど今現在後悔してゐるぜ。

「酷いことを言いますね。乙女心を弄んで楽しいですか?」

乙女心云々の前にそれは流石にないこと思つたぜ。。。

告白するにしてももう少しムードを考えようよ。

すると澪はムツとした表情になつた。

「ムードなんて言葉大将!」存知だつたんですね

流石に考えを読まれてたらしい。

しかしこんな安い挑発に乗るほど、馬鹿じゃないんですね。
そこは普通に返す。

「知らない奴の方が少ないと思つや」

「そうですね。『冗談はここまでにしてびづいたんですか?』

どうだったんですか?と聞かれてモジモジ答えればいいのやが。
少し悩んでこう答えることにした。

「とりあえず魏の大将は助けたよ。ジープが大破したけど

「その魏の大将は何処ですか?」

「あ・・・」

さつきまで抱えてたはずなのにな。
どこに置いてきたんだろう?

「ちょっと捜してきます」

「じつてらっしゃーい・・・ふつ、大将も大事なところで抜けてら
っしゃるんだから」

そういうことで魏の大将を搜索することになったのだが、如何せん
白服が多くて倒れてる目標を探し出すのがそうとう困難というね。

「どうしたもんかねえ」

「困ってるみたいだな」

声のした方を向くとそこには龍夜の姿があった。

「ほらここを捜してたんだろ?」

と龍夜は言い曹操を持ち上げる。

「どうから持つてきた?」

「そこに転がつてたぜ」

龍夜が地面を指差す。

俺放置してたつてことか・・・。

何にせよ見つかつてよかつたぜ。

澪から言わせると俺が微妙に抜けているのはよくあることらしい。

俺もそこは自覚がある。

つまり作戦のときも何かが抜けているんだろう。

何が抜けてるのかはわからんが。

まあそれはもうこいんだが。

「何考えこんだ顔してんだ？」

「考え込んでるからな」

悩みの無ご龍夜には一生わからん。

これをいつと龍夜がまた突つ掛かって来るので止めておけ。
澪のお仕置きのとばっちりはくらいたくないし。

「まあじこや。 さつやと帰つて今日は寝よう」

「やうだな」

曹操の身柄は明日魏の連中に預けることにして今日は寝る。
こっちにきてから疲れる仕事がやけに多いような気がするぜ。
まあ歩きの移動が多いしな。
しかも中国だから広いし。

まあそんなこんなで陣に帰る俺達だった。

「第十三話／魏の大将をダイナミック 救出（後書き）

更新速度え・・・。

（第一四話）一刀も大変なんだね。しょうがないね。（前書き）

兄「作者更新ナイスでーす」

作「贊美の言葉をいただきましたがこれからも頑張ります！」

（第一四話）一刀も大変なんだね。しょうがないね。

今日は魏の大将の身柄を引き渡す日だ。
え？人質交換みたいになつてゐるつて？
そこはスルーしてくれ。

魏将は本郷軍の陣地にいる。

説明すると本郷軍の陣地とうちの軍の陣地とは近所だな。
徒步でも数分といったところか。
まあ抱えて運んで行くと、いきなり斬られそうなので車で運ぶ」と
にする。

「ちよつと行つてくれる」

「じうぶつけんど？」

「ああ、魏の大将を送つてくれるのか。車をぶつけないよつこじりよ
よ」

まあそれもそつかと思ひながらも車出す。

「氣をつけるよ」

「まあお前が事故を起すとは思えんが

「やうかい」

車を出す。

一応運転技術はいくらかあるつもりだ。
整備されてない道路を走つたりすることはよくあるしな。
事故、なんて油断しなきやぶつけたりはしない。
それにたいした距離じやないしな。

「しかし、白服の連中も忙しいねえ。各地に現れては色々な混乱を
引き起こしてゐるなんてな」

まあそれが奴さんの仕事なのかねえ?
だとしたら相当ハードワークだろうに。

『妖術つてのは結構疲れるもんだ』つて俺の友人の魔法使いが言つ
てた。

魔法使いと聞いて俺の頭がおかしいんじやないかと思つた奴それは
正常な反応だ。

俺ぐらいにいかれると異常な現実つてのを簡単に受け入れちまう。

考えてみてくれ突然友人が『俺、実は違う世界からきたんだ』つて
言つたらどうする?

流すか?それとも119番通報か?それとも信じるか?
まあそれが嘘とは言えないがな。

人間つていう生き物は人間から見た非現実つて奴を受け入れないの
さ。

それが普通か?つて言つとどうだらう?
地球上には人間だけ暮らしてゐわけじやない。

人間にとつての非現実は人間以外の動物には現実かもしだろう?
だから一つの理論それこそ科学的なじやあわからぬこともある。

でも普通は生きてる間にそんな出来事に会えるのは無こと思つナビ
な。

でも俺は何度も経験している。

これは良い事なのか悪い事なのか。

少なくとも俺は良い事だと思つてゐる。

人生経験になるからな。

俺の頭がぶつ飛んでよかつたと初めて思つたね。

後軍隊出身つていうことも。

常人なら賊に斬り殺されて終わりや。

この世界は思つたよりも残酷だ。

まあ現代の生活も多くの人達の犠牲があつて成つてゐるということ
を忘れちゃいけない。

～戦争や～虐殺なんて歴史の本を見てみればいくらでも載つてるだ
ろ?

でもそれを現代人はどういう状況だったのかわからない。
だってその場にいたわけじゃないだろ?

…まあ今まで人殺しをいいよつてやつてきた俺が言つのもなんだけ
どな。

「……着いたか」

一応車のキーを抜いて降りる。

車を動かせる奴はいないと思うが一応な。

さて、魏将の連中はどこだ?

辺りを見渡す…必要はなかつたようだ。

近くにあつたでかいテントから一刀とその配下、魏将が出てくる。

「寛さんよかつた無事で」

「俺なんかの心配をしてくれるのか？随分やさしいんだな」

「で、華琳様はい無事なのか！！」

でかい声で元気に話しかけてくるのは夏候惇だつたはず（夏候惇ひがわら ひがわら）
んと覚えてなかつた）

「いの通りしつかり救出致しましたよ」

先ほどとは打って変わって言い方を変える。
一刀以外は丁寧口調でいくことにした。

「まさか寛殿お一人で助けられたのですか？」

「いえいえ我が軍の全力を持って助け出しました」

「これ以上変な噂をたてられると俺が精神的にダメージを受けるので、
一応ウチの軍が助けたことにしておこへ。うんそれがいい。」

「華琳様は！！華琳様は無事なの！..」

急に走つてきたネ「//」を付けた少女がゼエゼエ言いながら聞いてくる。

「華琳様は無事だ！..」

「よ、よかつた」

愛されるとなる。

この世界の有名武将つて基本忠臣だよな。

「やういえば華琳様が眠つたままのようだが大丈夫なのか？」

「はい、操られていた後遺症だそうです。今日、明日には覚めるところ話ですよ」

「て専門家？」（澪）が言つてた。

まあ怪我や病気を持つていても怪しいみたいだしな。

「それならいいのだが…。本郷！話がある」

「え、何？」

唐突に話を切り出すえーと夏候淵。

何だろうね？

「その季衣だけは助けてやつてくれないか？使えないと思ひながら一兵卒からでも構わん。命だけは助けてやつてくれ」

「え？ それはどうこいつ？」

「処遇のことだと思つよ」

一刀が全く事態を理解していないうるうのでフオローする。
まあ100%処刑なんて考へてもいなかつたんだろうな。

「ああ～魏の陛下には今まで通り魏の領土を治めてもらいたいと
思こます」

「 「 「 「 「えひへ？」」」

その場のほとんどの人が一刀の言葉を聞いて止まつた。
ですよねー。まあ大体予想はしてたけど…。
その案を鬼のような形相をしている関羽の前で言えることがす、二
ぜ。

あんた…漢だよ…（泣）

「それはどうこういとですか…！」主人様…！」

「どうこうして…そのままの意味だけど」

「本郷それは流石に…」

「いや朱里とはもう取り決めをしてるんだ。だから手配とか準備は
もう始まってるんだよ」

手回しがいいよな。

流石にバックに三國一の軍師がつくと違つた。
曹操起きたときビックリするだろうな。
多分彼女達は1からやり直すつもりなんだろう。
それを普通に領土を返されるなんて言われたら何かあると思つだろ
うな普通は。

「要求は?なんなんだ?」

「え? そんなの無いよ。あえて言えば即のことと思つた政治をして
くれれば」

でも彼にとつては違うんだよ。

これが一刀のおもしろいところだ。

損得勘定なんか無いっていう、ね。

言っちゃ悪いが変わってるよ。

もしかしたら俺以上にな。

「はあー 関羽お主も大変だな」

「全くだ。」主人様にはいつも手をやかされる

敵すらも同情させてしまう一刀すぎえな、おい。

「寛殿からも何とか言つてください」

「まあその件は既に決定事項みたいですし、とりあえず魏の皆さん方もこれを受けられては? 諸葛亮殿も容認している策ということはどちらにも不利益はもたらさないと思いますよ?」

「確かに何か問題がある訳でもないしな...」

「まあ、あんたがそういうのならいいんじゃないのかしら?」

初めて顔を会わせただけなのに信頼されすぎじゃね?
これも噂の効果というやつなのか。

「詳しく述べ曹操様が起きてからとこりこにはしませんか? 見たところの顔を元お疲れのようですが」

「やうだな」この件は後日にでもしようか

「華琳様がいなきや話にならないものね

ということで解散ということになった。

俺と一刀以外はみんなテントに戻つて行つた。

「さてと、俺達も帰りますか！」

「えつとさつきはありがとうございました！！」

「俺は礼をされるようなことはしてないぜ。ただ俺と考えが一致しただけさ」

思つたことを素直に言つただけなんだけどね。まあそういうことにしておいてほしいね。

澪とか龍夜が聞いたらネタにされそうだしな。

「じゃあ一刀行こうか

「は、はい！」

「にしても一刀も大変だな～」

高校生でこんな血生臭い仕事をやるはめになるとはね。

三国もとい四国を統一するというでかい目標を抱えてても結局は人殺しになるわけだ。

それを発狂するのでも逃げるのでもなく立ち向かうなんてね。俺には到底できないことだ。

そつ…どんな理由があつても結局は人殺し…。

「それってどうこいつ…………！」

一刀は彼方の瞳に悲しい光を見た。

「本当よくやるもんだよ。これだけの事を今までやつてきたなんて
や」

「いえ俺の力なんて全然…。皆のおかげでここまでこれたんです」

「なるほど持つべきものは友、か…」

仲間がどれほど強くて、心強いのかは知ってる。

だって今までこれからも俺は多くの仲間にさせられてるんだから
な。

甘いなんてよく言われたもんだ。

でも孤独は好きじゃない。案外騒がしいのが…好きなのかもな。
それに前の世界でも仲間の強さを教えてもらつたしな。

「まあここまでこれたのは一刀の力であり仲間の力もある。一刀
の仲間達だつて思つてるはずもつと胸はつて歩けつてな」

そういう今まで何にも知らずに来たつてことは良くも悪くも才能ある
ぜ。

「はあ…」

「まあ少なくとも元軍人の俺から見て問題は無いと思つぜ?仕事を
サボつてる奴はどこにでもいるしな」

「ヤレ」を言われるとひょりと…」

「まあいいじゃないか。今日は祝勝会だし、酒でも…まだ未成年だつたつけ?」

法律が無いとはいっても、流石に未成年に酒を飲ませるのは気が引ける。

「いえもつ何回も飲んだことがあるので…」

「止める人はいないのな」

蜀大丈夫なのかな?

しつかりしてそうな関羽辺りが止めてくれそうな感じもするけど。
…ああ法律ないから未成年とか関係ないのな。

「じゃあ今日は飲もうか

「やりますか?」

「そうしよう」

その日宴会があつたのだが、飲み過ぎて旨をビックリさせてしまつたのは別の話だ。その時に呉の人達も増援に来たのを知つた。なんでも蜀とウチと同盟してるから援軍に来たんだと。まあむだ足になつちまつたみたいだけどな。

問題は呉が裏切りそうな軍師をほつといて來たつてことだ。

監視ぐらいいはつけてるかもしれないが、孫權直々に来て大丈夫なのか?

まあ馬鹿ばかりじゃないだろうかなんらかの対策はあるんだろう…多分。

結局宴会は何事もなく終わつた。

伝令がボロボロで突っ込んでくる事も無かつたしな。

明日は帰る予定だし（朝早く）寝るか。

曹操はどうするのかって？

一刀に任せよ。

（第一四話）一刀も大変なんだね。しょうがないね。（後書き）

作「書くことないんですねー!」?

彼「それは作者のお前が考えるものだと思つや」

作
「
ん
ん
ん
ん
ん
ん
ん
ん
ん
ん
」

彼「凄く腹がたつな・・・」

（第十五話）暇な一日。改造が趣味の彼方。（前書き）

兄「更新速度だらしねえなー!?」

作「これには訳があるんだー!」

兄「意志の弱い子は抹殺…」

作「逃げるんだ…勝てっこない」

（第十五話）暇な一日。改造が趣味の彼方。

魏の大将の身柄を引き渡した俺達は翌日やつとて帰ることにした。
だってこれ以上用は無いし、国をずっと空けておくのもなんだしな。
まあ チームの連中なら大丈夫だとは思うが。

一刀にはもう行くんですか？と聞かれたが、ああと答えておいた。
一生会えなくなるわけでも無いしな。

俺が早く帰ったのは帰るのに時間がかかるからや。
俺は高速移動で帰りたいところなんだがあれを使つと体調が異常に
悪くなるので使用禁止にした。

原因はよく分からん。

なんにせよ一旦落ち着いたわけだ。
これでまた改造ができる。

ショットガンでも改造しようかなあ？
でもサブマシンガンも捨てがたいなあ。

帰るまでずつとそういうことを考へてる。

片道1~2時間だぞ？

ずっと座つてると尻が発狂する。

だから適度に休憩はとることにしてる。

ああ…コンクリで固められた道路が懐かしいぜ。

時代が時代だから仕方ないだろうがな。

また世界を旅したとしてその時今度は未来に行つたりしてな。

「はあー」

思わずため息をついてしまう。

何故かその予想が見事に的中してそうな気がするからだ。

もう戦いに身は投じたくない。

そう思っていても俺は死と戦いに好かれている。

あっから勝手に寄ってくるからだ。

対処のしようがない。俺はあまりにも人殺しの道を進みすぎてしまったのかもしれないな。

もしこの世に地獄と天国があるなら、俺は間違なく地獄行きた。そんなの考えなくたって分かる。

悪いことだからな。

汚れる必要の無い人間が汚れないようにするのが俺の仕事だったのかもしれない。

「はあー」

自分がマイナス思考になつていることにまたため息をつく。
ときどき変に暗くなるところはどうにかならないのかと自分でも思う。

どうにもなつてないのが現状なのだが。
もともと仕事からして明るくないほうだったしな。

最近は血もあまりみたくないなってきた。
気分が悪くなる。生きて初めてだこの感覚は。

初めて人を殺した時だってそんなことは思わなかつた。

戦いに身を投じていくうちに戦うこと自体嫌になつてきた。

戦争も喧嘩もだ。昔誰かが俺に言つた。

”お前にこの仕事は向いてない。普通に働いてる方が似合つてる”
つてな。

あそこで辞めてれば今の状況も変わつてたかもしぬ。
いらないことに首を突つ込まず、私設軍隊も創らず静かに一生を過
ごしていたのかもしぬ。

まあ今そんなこと嘆いてても仕方ないんですけどね。

今は今だ。現実に絶望してるならとつこの昔に自殺して
まだ20歳だぜ？

まだまだ人生長いんだ。

人間の寿命は150歳という話を聞いたことがある。

俺はギネス記録を書き換えるくらい長生きして見せるんだ。

「大将。5分の休憩だそうです。濬大佐から指令がありました」

ジープを運転してた兵士が話しかけてくる。

「どうもありがとうございました」

ジープから降りて体を伸ばす。
骨がポキポキと鳴る。

「は～後6時間か」

腕時計（安物）を見て言つ。

スネークや龍夜はもはや寝てるみたいで兵士の中には見当たらない。

そりや昨日の戦闘に今日の移動だからな。

ボコボコの悪路を走つてゐるせいで眠れもしない。
まあスネークと龍夜は別として、な。

「こんな時はどこでも寝られるあいつらが羨ましいよ。
一度寝たら命の危険がない限り眠り続けるからな。
装甲車だぞ？ ジープより劣悪な環境でよく眠れるもんだ。

その後エンジントラブルが4回あつたが無事に本城につくことができた。

「どんだけボロいジープなんだ。
後で整備しないとな。

「とりあえずさつさと戦後処理をする。
まあたいしたことないんだが。

「久しごとに自分の部屋に帰つてきた気がする

ベットに倒れこむ。

書類は明日やるついで思ひながら口を開じた。

「～将！～大将！～起きてください～～～」

「んあ～漆か後五分」

「はあ～ふつ～～」

漆が寝台にパンチを繰り出す。
スレスレでそれを避ける。

「殺す気かー！」

「もうひじやなくてそんなわけないじゃないですかあ」

笑顔で答える澪。

どう考へてもいまもちろんって言いかけただろ。

澪をとんでもない奴と再認識したところで本題に入る。

「で、何の用？」

「技術部から戦闘機の試作品が完成したと

「相変わらず仕事が早いことだ

しかし燃料はどうするんだ?
まず原油が見つかるかどうか…。

技術部の連中ならなんとかするだらう。
じゃあの試作機を見せてもらつか。

「二二だけの話、航空系の物何にもわからないんだよね
俺の部屋から歩いてそ娘娘な… 10分くらいでついた。

「おーい。誰かいるかー？」

「軍曹来てらしたんですね

「ああ槙野大尉」

「こつは槙野繁敏つて名前で、戦闘機や爆撃機、戦艦を設計する」

と得意としている。

いいやつだよ。俺もよく世話になってる。
ついでに男だ。

「試作機が出来たって聞いて来たんだが？」

「ああ、」
「あります」

槇野に案内される。

「「」」いつが試作機か？」

「ええ。燃料を補給しなくても一日は飛んでいられます」

「燃料なんて簡単に手に入るものじゃないもんな」

「一日飛んでいられれば充分だ。」

「ただ武装はゼロです」

「偵察機として機能すればいいさ」

「どうあえず3日分の燃料は確保しています」

「3日か…まあそれくらい飛べればいいか。」

「空中でエンジンストップひとつはないよな?」

「セイ」は大丈夫です。緊急脱出装置もありますし」

「備えあれば憂いなしか

「ええ。しかし大将以外乗ることは無いと思しますが」

戦闘機か。

何年ぶりに乗るだろ？

「マニコアルあるか？乗る前に操作の確認をしたい」

「どうぞ、これです」

分厚い、マニコアルが渡される。

読み終わるのに0・02秒ってところか。

「どうぞ」

マニコアルを返す。

読んではみたがやはり実際に乗つてみないとわからないことも色々ある。

「軽食を食べたら、乗つてみる」

「じゃあ最終点検しておきますね」

「ああ頼んだよ」腕時計の針はもう12時を指している。

今日は城下街で何か食べようか。

城の中にも食堂はあるんだが、まあたまには外で食べるのも悪くない。

自分で料理しないのかって？

自分で作るくらいなら澪にでも頼むよ。

澪の料理は世界で一番と言われるくらいだからな。
軍隊を辞めても食つのに困る」とはなさそうだ。

まあ食えれば文句は言わないけどな。
その料理が真っ黒じやない限りはな。

まあそんなべたな料理作つてる奴は見たこと無いが。

なんて考へてるひに外食のときによく食べにくる店にきた。

「大将！ カツ丼頼むよ」

「へいかしまりました！」

店に客は数人程しかいない。

それも店に来ると大抵いる連中ばかりだ。
なんだから？

そりやあ特に派手な店でもないし、若者に人気がある味でもないから、としか言いようが無いな。

「カツ丼お待ち！」

お~きたきた。

「じゃあさつやく」

一口食べぐる。

「つまい……」

「やうかい？あんがとよ」

こここの料理は何か懐かしい味がする。

俺が通つている理由はこれだ。

シンプルな味が一番いいのさ、俺はな。

にしてもうまいなあ。

腰にぶら下げる水筒の水を飲みながら思つ。

「ひちそうせん！お代はここに置いとくよ

「どうも……また来てくださいえー！」

「またくるよ」

早く食べすぎたかな？

もう少ししゅっくり食べばよかつた。

まあでもあいつを待たせるのもなんだしな。
わざわざと行くことにした。

大通りを歩く。

裏道を歩くといつ狙われるかわからないので、人目のあるところを
歩く事にしている。

俺は大丈夫だつて？

俺も人間だからな、やられる可能性もある。
そういうのを考慮してこの道を歩いてる。

兵士や一般人、澪とかのお偉い方も同じ。道を一人で歩かない。
まあ夜間外出禁止令は一応出してるんだけどな。
それほど白服の動きを警戒してるのさ。

皆も納得してくれてるしな。

「もうつこでしまった」

思つたより速く歩いてたのかな？

もう少しゆっくり歩いて来ればよかつたぜ。

兵器庫の中を見る。

誰もいやしない。

技術部つてもつと人がいたような気がするが。

なぜいないんだ？

もはや兵器開発が必要ないのか？

俺の改造のせいだつたりしてな。

…その可能性が否定出来ないのが恐い。

「まさかな…」

流石にそれは無いはず。

だつてそれだと首になるでしょ。

多分あれだな。一斉に飯食いに行つたな。
よくやるんだよあいつら。

まあ仕事がないのは事実だし、いいんだけどさ。
じゃあアイツを待つか。

つてもうじごむのかさつきの話忘れてたな。

「おーい槙野大尉。いるのかー？」

「[リ]にこますよ軍曹」

「最終メンテナンス終わった?」

「ええ完璧ですよ」

「じゃあひょっと飛ばしてみる」

「お戻りをつけて」

戦闘機に乗り込んで動かす。

車と違つてそんなに乗つた」とないから操作しづらくな。

30分後あんまり飛ばすのもあれだと思つて帰つてきた。

「どうでした? 乗り心地は?」

「大丈夫じゃない? 特に問題は無いこと思ひナビ?」

まあプロつてわけじゃないからよくわからんけどね。

戦闘機どじろか飛行機もそんなに乗つた」と無いんだよね。俺、高所恐怖症だからさ。

いつも車か船で移動してるんだよね。

さて俺は部屋に戻つて改造する」とした。

也許や自重なんでものまじないぜ……

S249（軽機關銃）を改造した結果ががこれだよーー!

威力 戰車の装甲を貫通するくらい（通常時1000m強風時800m）

装弾数 600発

弾丸 SS249仕様弾を使う

重量 1500g

オプションパーツ 4倍率スコープ（暗視モード付き）、強化サブレッサー（1200発は耐えられる）

相変わらずの謎の技術で装弾数がおかしくなっている軽機関銃。もはや対人戦というより対戦車ライフルみたいになっている。

前のS249より射程距離が伸びたので狙撃銃として活用できる。サプレッサーを装着してもすぐ壊れないよう改修してあるのでフルオートで容赦なく撃つこともできる。フルオート時の反動がほぼゼロなので命中率がまったく下がらない。人に撃つと挽き肉なことは間違いないしの銃。使い方を間違えると大変なことになる。

まあ一丁しかない銃だから大丈夫だとは思うが。

改修された銃は基本量産されません。

続いて二丁目。

最近改修しそうだわ！…どういつとか説明して頂戴！！

D A M E D A
筋肉事項です。

M870（ショットガン）を改修した結果がこれだよ！！

命名 佐々木銃 昔日本に村田銃といつショットガンがあつたため
名前をマネた。

威力 戦車に風穴が空くくらい

装弾数 10発

弾丸 Mスラッグ弾

重量 500 g

殺したい奴を仕留めたいならこれだ！

人間なら身元が確認できないほどぐちゃぐちゃにしてくれるだろ？
しかし音が大きいのが弱点でもある。

ポンプアクションなので連射性にも欠ける。
しかしそれを補うほどの威力があるので問題ない。

「こんなもんかな？」

すつきりしたー。

やつぱり改造いいね最高だね。

（第十五話）暇な一日。改造が趣味の彼方。（後書き）

作「更新なんて怖くねえーー！」

彼「じゃあ次からもつと早く出来るんだな？」

作「もちろんプロですから（キリッ）

～第十六話～ 蜀と吳がドンパチ？ 一人では手に負えん。（前書き）

彼「更新速度が上がったってことは次話の投稿がかなり遅れるってことだな？」

作「今にみてるー。一週間のうちに更新してやるよー。」

～第十六話～蜀と吳がドンパチ？一人では手に負えん。

あの改造をした日から1ヶ月。
忙しい日々が続いていた。

やれ戦後処理だの、耐震強度だの、食料を備蓄してゐる倉庫だのどう
しろつてんだい！！

書類は部屋の半分を余裕で埋め尽くすし、数秒で片付けたと思つたら
また持つてくるし。

この忙しさは異常だぞ！？

もう少しで白い悪魔（書類）とお友達になれそうだ。

「大将～追加です」

またあの白い悪魔が来やがつた。

「どうも、後どれくらいある？」

「これでお終いです」

「やつとか…」

書類地獄はこれで終わりをつげるらしい。

こんな時に白服の連中が何かやらかしたらキレるね。
間違いない。

「大将！…情報部から吳と蜀が蜀国境付近で睨み合つてゐるとのこ
とです」

「いつ入ってきた情報だ？」

「数分前です。斥候から連絡がありました」

白服じゃ ないだけましか。
それにしてもなんで蜀と呉が?
確か同盟していたはずだが。
行って確認してくるか。

「技術部に連絡をとつて戦闘機の準備をさせてくれ」

また白い悪魔が増えそうだな…。
しかし背に腹は変えられん。
それに同盟中の蜀と呉が睨み合つてる理由も知りたい。

「大将～ また私の面倒を増やすつもりですか？」

「み、澪いつからそこについたの？」

「部屋の外でずっと聞いてました。気になるのはわかりますけど、余計なことに首を突っ込むのは止めた方が…」

「わかつてるよ。でも気になるじゃない? して同盟中の蜀と呉が戦争をしようとしているのか」

そつこいつと澪はため息をついた。

「もう言つと思つてましたよ。せめて誰か一人連れて行ってください

誰を連れていくか…。

「私は仕事があるので違う人にしてくださいね」

じゃあ後残つてるのはスネーク、龍夜、槇野、中村のじゅちゃんくらいかな？

槇野と中村のじゅちゃん飛行機と船酔いつんだよな。

槇野はなんで飛行機酔いなんてするんだよ。

飛行機好きなのに酔いつて洒落にならん。

龍夜にしようかな？

どうせ暇だらう。

と、いうことで龍夜の部屋の前まで来ましたー。

部屋から出るとき澪からの視線が凄かつたが気にしない。

「龍夜入るぞー？」

ドアを開けて入る。

部屋の中に入ると酒瓶が無数に転がっていた。

龍夜はここで仕事してるのか？

だとしたらすごいな。にしてもその龍夜の姿が見当たらぬが。

部屋を見渡していると不自然に酒瓶が重なつているといふがあつた。俺はその酒瓶の山に近づいて酒瓶の山を蹴飛ばした。

ものす「」音がして山が崩れる。

そしてその下から龍夜が出てきた。

「おー龍夜起きろー！」

「うーん

「龍夜、澪が呼んでたぞ」

「ええつー…つマジでー…?」

そしてこの驚きである。

龍夜は澪にトラウマ持つてるんだね。

大抵龍夜が澪に呼ばれるのは怒られるときだし。

「嘘です。」

「なんだ～脅かすなよ」

ホッとした様子で近くにあつた酒瓶を掴んで酒を飲みだす。

「これから蜀と呉が睨み合つてるとこにに戦闘機で行くナビ一緒に来るか？」

「同盟状態の国がなんで睨み合つてるんだ？」

「やいつを今から確かめに行くのや」

「ふーんいいぜ仕事はもつぱ付けてるしな」

俺にはお前の前の倍以上の仕事が回ってきてるし

「よじーじやあ準備ができたら兵器庫に来い。戦闘機の準備をして

おくが」

一応武器も持つて行くか。

つってもAK-47（アサルトライフル）だけ持つていいくがな。

AK-47つて何かつて？

1947年にソ連に正式採用されたアサルトライフルだ。

非正規品も含めて約1億丁世界に出回っている。

世界最強の殺人マシーンなんてあだ名が付くくらい人を殺してる銃だ。

俺もAKの殺害数を増やしてるうちの一人だからなんとも言えないんだが。

気圧？そんなのは問題ない。

俺のこのバックに入れればたとえ核ミサイルに攻撃されたとしても大丈夫なのさ。

すごいだろ？友達の魔法使いが一日でポンッとやってくれたぜ。

「よし！行くぞ！－！」

「おおう、準備早いねえ…」

「最近仕事ばかりだったからな久しづりの喧嘩かと思うとワクワクするぜ！－！」

サボつたら澪に殺されるもんな。
おお、怖い怖い。

今更だが身震いしてきやがった。

「じゃあ行こうか」

「ねつーー..」

「といひで運転龍夜がやつてくれない?」

「いいくどよ、どうかしたのか?」

「いの前運転したら氣絶しかけたからさ」

「飛行機苦手だつたか?お前」

「高いといひが苦手なんだよ」

あ”～思ひ出すだけで気持ち悪くなつてきた。

「意外な弱点だな」

「揺れがなきや大丈夫だよ。多分俺酔つてるから」

車とか船とかはいいんだけど飛行機はやっぱダメみたいだ。
余裕でリバースできます。

「まあそれはいとして結局いつの世界から帰れるんだ?」

「俺に聞かれても困るんだけど…」

ここのつで一回田の異世界なんだが帰れる条件がいまいちわからない。
時間なのか、それともこの世界なら天下統一なのか、白服をぶちの
めせばいいのか、本当にどれなのかわからないから困る。

まあ三国志なわけだから多分天下統一が本當なんだろ? しかし、この世界で殺した連中も殺したことになるのは困る。またしつかり記録をつけないと忘れちまつ。

ここで説明したほつがいいと想つのは平行世界、いや並行世界と呼んだ方がいいのかな?

俺たちから言わせればもし何々だつたら~とかの話だ。

例をあげてみよう。

例えば日本が第一次世界大戦に負けなかつたらとか。俺が普通の学生として暮らしてるとか。

俺的にはこいついう解釈で合つてると想つ。

まあ頭がいいわけじやないから本当にあつてるのかは怪しいが。

「なあ龍夜俺達の世界もパラレルワールドだつたらどうするよ」

「別に、いままでとなにもかわらんだろ」

「そうかな…?」

「何ガラでもない」と呟つてんだ? お前ひりしないぜ

「俺だつて考え方をすむことじべりあるわ」

「最近多いなそういう」と

「やうか?」

自分で言づかないがやはり自分のだらうか。

最近澪や、スネークにも言われる。

「お前やつぱり軍隊辞めて正解だつたよ」

「えつ？」

「最近のお前を見ればわかるよ。血を見なによつてしているだろ？」

「まあ、な」

「だらうつな。軍隊辞めたつて食つていけるんだから何も問題は無いだろ？」

「やつ思つか？」

「やつ思つね。お前が思つてるほどお前は最低な人間じゃなねえよ。自分じや気づいてないかもしれないがな」

「俺はもう黙だなのかもな」

「ずいぶん弱氣だな。今までおかしくなつてないだけマシだ」

しばらく沈黙が続いた後龍夜が言った。

「…澪に言つとこいやる。元の世界に帰つたらもつ軍の仕事は回さないよつてな」

「龍夜！」

「澪も「うかうか」感づこころははず。お前がだんだん戦場に嫌悪感を持つてゐる」とをね」

自分はやつぱり情けないと思つた。

自分がふがいないばかりに仲間や親友を心配させていたなんて…。

「迷惑なんて思つてないさ」

「えつ~？」

その龍夜の一言が不思議でならなかつた。
迷惑じやないならなんなんだうつと。

「 親友として当然の事をしてゐだけさ」

そつか俺はまた忘れてたんだな。
仲間に、親友に頼るつて事を。

ふつ、笑つちまうな。

しかし、それと同時に自分も人間なんだなと実感できて安心出来た。

「それに今だけさそんなんこと思つてるのは。平和ボケすればそんなことも忘れる。なにせまだ130年も人生残つてるんだからな」

「…龍夜に励まされるとわね」

「一応お前より年上なんだけどな」

「心配させて悪かったな。よくよく考えたら俺はなるよつになれていうスタイルだったのを忘れてたぜ」

「つふ、そうじやなきゃ俺の知ってる彼方じゃないぜ」

これだから人生おもしろい。

俺が150歳まで生きたら、今度は200歳を目標にしようかな？少なくとも150までは死ぬ気はない。

「龍夜はもうすこし悩みを持つた方がいいぞ」

「余計なお世話だつつの」

「…そんときは俺が話聞いてやるからよ」

「そいつはまじめも。じゃあそんときはよろしく頼むことにするよ」

まあ悩むのも人生、悩まないのも人生ってところかな？

龍夜みたいに一生悩みを待ちそうに無いやつもどうかと想ひけどな。

「話しててうつにつけいたな」

「ふうー戦闘機なんて久しぶりに飛ばすな…大丈夫かなあ？」

「俺でも出来たから大丈夫だよ。他に何か飛んでるわけでもあるまいし」

「それもそうか。まあ山を飛ぶわけじゃないみたいだしな」

「槇野大尉準備はOKかい？」

「軍曹。大丈夫ですよ往復の燃料は入ってます」

「じゃあ行こうか?」

戦闘機に乗り込む。

「よっしゃあーーー出すぞ!」

「俺は寝るわ。あっちにつくまで2時間はかかるらしいし」

「2時間なら大丈夫だ。あっちについてから寝ればいいだけだしな」

その後二つに操縦を任せたせいでああなるとほ思ひもしなかつた。

（第十六話）蜀と吳がドンパチ？一人では手に負えん。（後書き）

作「今回の彼方シリアルスがちょっと入つてたね」

彼「自分でいうのもあれなんだがこんな感じだつたつけ？」

作「最初のキャラ像からはかなり外れてるかな」

彼「なんかなあ…」

～第十七話～ // ミシマハ助と驛のユハナチを止めり…（前書き）

作「今回仕手抜きです…」

彼「それ堂々と幅広い口づけなどない…」

兄「だらしねえなー…？」

～第十七話～ ミシシッポンと魔のドンパチを止めし～

「「うーん」」は何処だ？」

何が起きたんだ？ 確か龍夜と戦闘機に乗ったんだよな。
あれ？ 戦闘機が大破してるのはなぜだ？
まさか龍夜の奴事故つたんじゃないだろうな？
頭が痛い。

「「うーん」」は…森の中みたいだな」

周りに木しかないのはいいとしてやつが見つからない。

「龍夜ー！ 龍夜ー！ 何処に行きやがった？」

無線機を調べたんだが墜落の際見事にぶつ 壊れたみたいだ。

おいおい予定ならもうつこてるはずだぞ？

なのにこんな山でピクニックとわね。

龍夜がこれくらいでくたばるとは思えんが一応辺りを捜してみるか。
さすがに國の長と國のお偉いさんとが消えたとなれば大変だろ？
書類とかな。

全く困ったもんだ。

また白い悪魔とこの対面になつちまつな。

「龍夜ー！ 龍夜ー！」

いへり叫んでも返事は帰つてこない。

墜落した際にどうかに吹っ飛んでたのか?
まあ居眠りしたせいだらうな墜落したのは。

帰つたら澪に報告しなきやな。

自業自得とはいえ憐れだな。

本当に困つたなあ。

まずここが何処なのかもわからないし、目的の蜀と呉が睨み合つて
る国境も何処だかわからないし、龍夜も何処だかわからないしでわ
からないことしかねえな。

「どうあえず龍夜と合流するか

つと言つても搜すあてはないのだが。

JJで選択肢が3つある。

龍夜を見捨てて蜀の国境に向かつ。

龍夜を殺してから蜀の国境に向かつ。

龍夜を殺しながら澪を待つ。

どれがいいかな〜?

一番上がいいような気がするんだが…。

そうしよう。

龍夜は見捨てる。

我ながら酷でえな。
ま、自業自得だしな。

死ぬわけじゃあるまいし大丈夫やる。

と、いうことで龍夜は見捨てることにしました。

さつそく蜀国境付近に行くために山を抜けた。墜落現場から数10分歩いてやつと外に出た。

「あつ……国境が何処なのかわからないんだったな

」
「うーん」とさつきこそ俺の千里眼を使つときー

現在地点から約300kmつてとこだな。

これくらいなら高速移動でなんとかなるか?

いやしかし腰が痛くなるしな。

低速移動でいこうか。

「…よしー。」

自分の頬を叩いて気合を入れる。

低速移動＝毎分10km

高速移動＝毎分500km

「ふー」

このスピードで走つてると遅い感じがする。

いつもならもつと速く走つてたからな。

足が速いのは生まれつきだつたし、人の限界を越えて走るなんてことはいつもだつたからな。

「この技の弱点といえば森は走れなうことろかな？」

「後、水の上も。」

「やっぱり急には曲がれないんだよ。」

「～30分後～」

「腰があーー！」

蜀の国境まで後少しどとなつたのだが…。」

「なに高速系の技全般的に〇〇一ー？」

俺はそう叫びながら荒野を走る。

戦が始まつた気配は無いが念のためだーー！」

痛む腰には漆印のシップを貼つておいた。
ここつで相当楽になるはずだ。

「なんか年よりみたいだなあ」

あれ？前が震んで見えないや。

なんて漫才してる場合じやない。

さつと行って理由を聞かないと。

つこでに行つておくがあくまで理由を聞きに行くだけだからな？」

別に戦争 자체を止めにいくわけじゃない。

本郷が私欲で戦争するとは思えないが、呉はどうだかわからん。なんでもって？そりやあ王がどうかは知らんが、軍師は相当ヤバいらしいな。

それに最近白服が静かだったのもひつかかる。

てなわけで今蜀の陣地にダッシュ中。

「うおおおおお！」

陣地の柵をジャンプで越える。

一瞬またに擦つた感じもしたが大丈夫だったようだ。

「なんだ！？」

「人だ！！」

警備兵いるの忘れてた。

下でものすく騒ぎになつとる。

「何事だ！騒々しいぞ！！」

「関羽將軍空から人が！」

「えつ！？人が」

「あちら！」

「着地に失敗した…」

足が～～！！！！

「寛、さん？」

「じいじも」

～その日の夜～

関羽達に事情を説明した後、軍師の諸葛亮じいじと蜀が睨み合ひになつてゐるのか説明してもらつた。

「ど、こいつですがあわかりいただけましたでしょ？」「

「簡単にまとめる…まず蜀の街に呉が攻撃をしたという情報が入つた。蜀本隊が行つたところ呉軍の武具や旗が落ちていた。そして国境付近に呉軍の本隊の姿、か」

「寛ちゃんはじいじって情報を？」

「じいじの諜報員から情報をもらいましたね」

今は武富や文富には下がつてもうつていて、
いるところのは一刀、俺、諸葛亮だけだ。

「寛さんの軍は？」

「本拠に～ますよ。俺は連れと二人できたので」

「じゃあもう一人は？」

「戦闘機が事故った際にはぐれてしまったのでおひてきました」

「「？」」

そんな顔されても困るんですけど。

「おひてきた！？」

「YEDI」

「大丈夫なんですかその方は？」

「あれくらいじゃ死なないから大丈夫ですよ」

「実際寛さんの目から見てこの出来事はどう見えますか？」

一刀から質問がくる。

「おかしいね。俺達から見れば同盟状態にあつた国が急に戦争おつぱじめようとしてるようになしか見えない」

「なるほど」

「それに話がうますぎる。街が襲撃されたと報告されてからすぐに見に行つてゐるのに黒がもう撤退してゐるし、なにより黒が自分の領土にいるつてのもおかしい」

「それを聞くと確かにおかしい点はたくさんあるんですね」

「寛さんもしかして二〇の件…」

「ああ、白服の連中が怪しいな

「二〇の前も原因不明の疫病が起りましたし

「つむぎだ」

あれも白服の仕業だらうな

「二〇の仲間割れの狙いは両者の消耗だ。どちらも本隊を動かしてゐる
んだからな」

「せう考へると今度と戦つのは白服さん達の思ひ壘つてこいつで
すか」

「一刀、こいつを持つとけ」

「いいんですか?」

「ああ。護身用だ」

一刀に渡したのはピストルだ。

「弾は一五発。引き金を引くだけでいい

「問題は弾をどうするか、ですよね?」

「その通り。俺が説得に行つてもどうなるかわからん。一番いいの

は俺と一刀が一緒に行くことなんだが……それは無理だらうな

一刀はよくても関羽達がなんと言つか……。

「説得します」

「『』主人様？ 危険なんですよ？」

「わかつてゐよ朱里でも今やらなきやたくさんの人人が死ぬんだ」

「氣に入つた……安心しな一刀の身は俺の命に代えても守つてやる
よ」

とこう」と俺と本郷で具に説得に行くことになったのだが……。

「『』主人様には危険過ぎます……」

「そつなのだ……お兄ちゃんにもしものがあつたら……」

「まあおちつけお主、『』」

今一刀が過保護な家臣達を説得してるとこなんだがなかなか話が進まない。

「寛殿がついでいくのであらば斬られるような事はあるまい」

「しかし……」

「大丈夫だよ俺はみんなのために行つてくるけど死ぬ気はないから」

「あ、いい忘れてましたけど武器は持つていかないので」

「寛殿それはどういふ意味でしょうか？」

「そのまんまの意味ですが？」

「寛殿は敵のど真ん中に丸腰で行けとおっしゃるのですか……」

「武器を持つてるとその時点で駄目なんですよ。今回の目的はあくまで話し合いです。敵の大将を斬りにいくわけではありません」

「いやあ関羽の説得に時間がかかりそうだな。

「ですが……」

「頼む……みんな……もし……」で逃げ出したら自分を自分で許せなくなると思つんだ。だから行かせてくれ……」

「安心してくれ。話は簡単に収まりますよ」

あれの予想だとな。

軽く行つてきて話して帰つてくる。

これで戦争が起きないなら安い安い。

「…わかりました。寛殿ご主人様の事お願いします」

「承りました。命に代えてでも守つて見せます。よし行くぞ

「あれも行くんですか？」

「善は急げだ」

わざわざ出発する」と云つた。

「彼方さん。なんでわざわざ教えにきてくれたなんですか？」

「そりやあ無駄に血は見たくないからさ」

本当に血は見たくないね。

今だけかなそり思つてゐるのも。

「こしても戦と蜀の陣地つて結構近いんだねえ」

「まあ見えますしねえ」

「なんこせよ戦闘になつたりはしないさ。ただ睨み合つてただけだ
しゃ」

結局衆の連中にはお互ひの勘違いつてことで納得してもらつた。

え？途中の話省きますがだつて？

いいのいいのこれが作者クオリティーなんだから。

作者には死んでもうつよ。

アツ――――――――!

説得した後どうなつたつて？

一刀の軍にしづらへさせてもうつひとじました。

だつて帰り道わからないし、無線があるわけじゃないしさ。
一応仕事は手伝ってるんだぜ？

そして俺が白い悪魔と睨み合つてるときだつた。
あ、あの説得大作戦から2週間後の話な。

「寛殿に報告したい」とがあるそ�です」

「了解今行きます」

関羽に呼ばれて大広間に向かつた。

何があるつてんだ？

「みんな今日は集まつてもうつて悪いね。朱里お願ひ

「はい」主人様。皆さん次の満月の日にこの世界はなくなるそ�で
す」

衝撃の一言だつた。

～第十七話～ // ラ・シラノと魔のドン・ペチを止め--- (後書き)

作「今回の適切な異常だが……」

彼「いつ死んでいいや」

作「次は頑張るから許してくれんか?」

彼「黙だ」

（第十八話）最終決戦だ！！何が始まるんです？世界の崩壊だ！！（前書き）

作「今回今まで一番の駄文の予感」

彼「こ・れ・は酷い」

（第十八話）最終決戦だ！！何が始まるんです？世界の崩壊だ！！

「「」の世界が無くなる？」

それはあまりにも急だった。
確かに世界はたくさんある。

それは今までの経験から言えることだ。
でも世界が消える？消えるってのはゲームのセーブデータを消すみ
たいに跡形もなくなるってことか？

「それについては貂蝉さんから説明があります」

そうこうして出てきたのは……。

「じゃあ説明するわね～ん」

筋肉モリモリマッチョマンの変態だそのものだった。
ショワちゃんの筋肉よりすげえぞ。
北斗の拳みたいな筋肉してやがる。
しかもオカマキャラとか濃すぎるだろーー！

「ー・# \$ % & %, % (& % ? ? ?」

あれ？普通に言葉がしゃべれないぞ？

あまりのショックで少し混乱してしまったようだな。

「本物ならもう少し」の世界を滅ぼす儀式は遅くなるはずだったの

なるほど原因はここにあるわけだ。

「で俺がそれをやめたと」

「やつこいつ」と

「うへことしてねえな、俺」

「あらんそんなことないわ。あなたはこの世界のありかたを変えたもの」

「ありがた?」

「やつこの世界のものとましてもこいわね」

「変えたって言つのはこにこ方に?それとも悪い方に?」

これで悪い方に変わつてたらそれでいいけどもよつねえ俺。

「やつこりと良い方でよ」

「ならいいか」

もじの世界に俺が来たことが良い事なら文句は言わねえさ。

「で、その儀式つてのは次の満月の日なんだろ?いつなんだ?」

「2週間後」

「2週間ねえ……。」

「ではさつそく作戦会議をしまじょ！」

「そうですね。軍備も整えないといけないですし」

最初から殴り込む気満々なんですね。

「それとあなたに悪い報告」

「何ですか？今更何があつたって驚きませんよ」

「あなた以外の人達は帰ったわ」

「それは悪い報告じゃないわ。むしろ良い報告だ」

うるさいのが少なくなつていいよ。
それにはせもう少しで帰れるんだ。
徹底的に暴れてやるぜ。

「とにかくその儀式を止めてもこの世界の崩壊は止まりなことだよ
な？」

大広間にはもう誰もいない。一刀もな。

「ええ、残念だけど。この世界はもう終わるの」

「でも本当の終わりじゃない。そうだろう？」

「ええ、その通りよ」

「簡単で壊つと凶切りつてといひがこれが第一章で次が第二章みた
いな？」

「『主人様しだいよ』

「一刀なら大丈夫さ。 そんだけの根性くらいあるわ」

あいつなら新しい世界くらい簡単に作れそうだしな。

「あなたはもともとイレギュラーな存在だった。 だつて違う世界からきたんですもの」

「イレギュラーのイレギュラーか。 でももうすぐ終わる」

「ええその通りね。 あなたはどうするの？」

「『主人』まで来たら最後まで付き合つよ。 恨みを晴らさないといけ

「そつ…じゃ私はこれで。 『主人様』といひやついてこなくちゃいけ
ないからあん」

「ガンバツテキテクダサイ」

いかん… 危ない危ない。

危つく戻すところだつたぜ。

最終決戦ときたら銃の整備と刀の手入れはしっかりしなくちゃな。

～改造中～

SS249（軽機関銃）を改造した結果がこれだよーー！

命名 SSS249

威力 ダイヤモンドを木つ端微塵にするくらい（通常時2000m
強風時1800m）

装弾数 800発

弾丸 SSS249仕様弾を使う

重量 2kg

オプションパート 4倍率スコープ（暗視モード付き）、強化サップ
レッサー（1600発は耐えられる）、SSS249式銃剣。

相変わらずの謎の技術である。

装弾数が日に日に増えている。

もはやなんのか分からぬ状態である。

しかし人間を正体不明にするには丁度いい銃だろう。

サプレッサーが改造されているためさらに頑丈になった。

フルオートで撃てば嫌いな奴を土に返すことだってできる。

スナイパーライフル？そんなもんじゃないね。

言つてみればスナイパーライフルの命中率とショットガンの威力と
軽機関銃の装弾数を兼ね備えた化け物銃だ。

ただネーミングセンスはおかしい。

ただたんにS多くなつただけだよね！？これは。

説明ご苦労。

邪魔な作者は消えていいんだぜ

お、覚えてやがれえ！！

三下の台詞だな。

改造最高！！

やばいテンションが上がりすぎでおかしくなりそうだ。

落ち着け！落ち着くんだ俺！

興奮して熱くなつたので城壁の上で頭を冷やすことにした。

「ふー少し熱くなりすぎたな」

わざわざ体温計つたら体温計がぶつ壊れやがった。
少し血重しよ。

「うそ？」

ふと横に田をやると一刀が一人で座っていた。

「よひー！一刀」

「彼方さん」

未だにさんずけなんだよね。
ちよつと悲しいな。

「どうしたんだ？暗い顔して」

「なんか自分の手にこの世界の未来がかかつてゐんだなと…」

「それで考え方か。急いでかい事に巻き込まれて混乱してるのは？」

「まあ高校生でいきなり」の世界はあなたの手に委ねられましたなんて言われても困るわな。

「」の先どうなるのかな？つて

「俺は今まで20年生きてきたがなるようになれで何とかしてきた。だから俺より強い意志を持つてる一刀は大丈夫さ」

力だけが全てじゃないそういうことだ。

孤独は罪、らしいからな。

昔の俺はそうだったかな？

「彼方さんが言つんだつたらうそつなんじょつね」

「まあ、年はそう大差ないけどな」

「2週間後か…」

「お前には余るくらいの仲間がいるだろ？大丈夫さ、2週間後にはいつも通り暮らしてゐるぞ」

そう2週間後には必ず決着がつく。

鍵は一刀だ。

一刀が死ななきや他は大丈夫だ。

どうせ新しい世界で生き返るんだからな。

「まあ、今は剣が錆びないよつに磨いとけ。じゃな」

「彼方さん…」

2、3歩あるいてから振り向いて一刀に言つ。

「どんな結果になつても・・・少なくとも、お前のせいぢやないから安心しろ」

「えつ？それいつどいつこ「おやすみ」彼方さん！？」

悪いのは少なくとも白服の連中だ。

いや一刀がこの世界にくることは予定済みだったのかもな。ただやつらが想定外だったのが一刀がこの世界で強くなつちまつたつてことだ。

権力的にも、勢力的にもな・・・。

っへ、おもしろいじやねえか。

やつぱりこいついう計算通りに行かないところがいいよな。

なんでも思い通りになつたら世の中つまらなくなつちまつ。

まあそのままだらだらと2週間が過ぎたわけだが、別に何か変わったことがあつたわけじゃない。

午前は巡察か書類又は自主トレ。

午後は紅茶飲んだり、お茶を飲んだり、鍛冶屋に行って刀を造つてきたり、それくらいか。

そして俺は今大広間にいる。

「これが最後の戦いよ〜ん。この世界のために頑張つてね〜ん

相変わらずきしょく悪いな。

差別はあんまりしたくないがこれだけは人間として認められない。

「俺は何すればいいんだ?」

「寛さんはとにかく暴れてくれるさー」

「了解。それともう一つ」

みんな俺の方を向く。

「俺の本当の名前は・・・彼方だ」

「じゃあ今までの名前はなんだつたのだ?」?

「いや偽名使つてたらそのまま」「まだ来ちゃつて・・・」

「では私も真名を明かしましょつか」

「いいんですか?相当大事な名みたいですけど」

「彼方殿には是非受け取つていただきたい」

「じゃあありがたく受け取つていただきます」

「我が真名は愛紗

「我が真名は星」

「私の真名は翠ー」

「鈴々は鈴々なのだ！！」

「私の真名は朱里です」

「じゃあ行きましょうか」

「…………」「心……」「…………」「…………」

みんながいそいで移動し始める。

「まつてへん」

「「ホッ」「ホ」「ホ。 なんでじょつか？」

絶対拒絶反応出でるわ。

「この世界が続いたとしても、續かなかつたとしてもあなたがどうなるかは知つてるわね？」

「もちろん。俺は結果がともあれ自分の世界に帰る。いや、帰されるが正しいかな？元々俺は部外者だからな」

「そうならないの……」

そのオカニ……じゃなくて貂蟬の顔は悲しそうだった。

やつぱり貂蟬にも後悔は変かもしけないが、そういうものがあるだろうか？

少なくともそこには俺は入れそうもない。

「おお彼方殿では出発しましょ！」

「おお彼方殿では出発しましょ！」
「……」

「彼方殿？」

「いや、なんでもない。じゃ行こうか」

貂蝉、お前が考へてるほどの世界の消滅ってのは深刻な問題じゃないんだ。

だつてよこの世界が新しい世界になるのは目に見えてる。
消滅するだけじゃない、次がある。

・・・だから大丈夫さ。

さてと派手にぶつ放すか！－！

（関）

「守りの堅そうな闇だな」

「でもこの世界のために突破する－－！」

「全軍突撃準備をしてください－－！」

「銃よし刀もよしつと」

残念ながら銃の出番はないかな？
刀の方がいつきに倒せるんでね。

「出陣……」

誰かがそう叫んだ。

もちろんみんなこれに応える。

「…………おお——————！」

「ちよいと力を出すぜ。一閃・横一文……！」

誰よりも一番最初に白服の連中を斬った。

そしてその技を出した瞬間数万の白服の体が横に真つ一列になる。

しかし、白服達はいつもより数倍の勢いで沸いてくる。

「足止め役か……まあ付き合つてやるか！――！」

斬る斬る斬る。

そして何10万斬つた頃だろうか、白服が沸いてこなくなつた。
俺はそれを儀式の準備が完了したんだなと思った。

「よし今のうちに進軍しよう」

「私達はここに残つてこいつらを倒す。だから主人様は先に行つててくれよな」

「翠、気をつけて」

「わかってるよ……」

そしてつこに山頂までたどり着いた。

「ふんつきたよつだな」

「左慈……」

「散々殺しそうねたがここで死んでもらう」

「左慈さんもひやめにしてしまはしないことせ

「つまらない」とだといへ。」

「よひはあの鏡を壊せばいいだけですしね」

俺は自分の愛銃M1911A1を懐から取り出し鏡に撃つた。

パリーン。

そんな音が部屋に響き渡る。

「ああ一刀一の世界はもう終わりだ……」

「終わつて死つてなんですかー？彼方さんー。」

「この世界はもう絶対に終わるのを……でも次がある……まあ思
い浮かべろーー自分ことって一番大切な人を……」

(一番大切な人・・・)

愛紗のことと思い浮かべる

鈴々のことと思い浮かべる

朱里のことと思い浮かべる

みんなのことを思い浮かべる

その瞬間淡い光を放ち始める鏡。

その光はこの物語の突端に放たれた光。

白色の光に包まれながら、俺はこの世界との別離を悟る。

自分という存在を形作る想念。

その想念が薄れていくことを感じながら、それでも俺は心の中に愛しき人たちを思い描く。

みんな

。

俺のことをずっと支えてくれた仲間たち。

無口な恋。陽気な霞。口うるさい詠に、心根の優しい月。

敵対し、そして文句を言いながらも仲間となり、俺を助けてくれた曹操たち。

王としての責任、役割・・・そういうものを教えてくれた孫權たち。

力の無かつた俺を助けてくれた、義侠に富んだ少女、公孫讚。

みんなの顔が次々と浮んでは消え

つて、あれ?誰か一人

忘れてるやつな・・・。

「誰だっけ?」

「どうかしたのん?」

「あれ」のまま終わり的なノリだったの?・・・

「...」

「なんだ!?」

「むつ!?なんです、この揺れはつー... こんなものはプロットに無かつたはず... つー...」

「なーるほど。物語でこいつらのハッピーハンドを引いたのかもな一刀は」

「どうなるのかしらねえ?」

そして強い光に飲み込まれた!!

・・・・・

「ん?」

目を開ける。

まさかまた荒野だつたりしてな。

目の前には草木や花噴水があつた。

「公園みたいだな」

この前は家だつたのに今度は公園？しかも知らない公園だ。

異世界に次異世界だつたとか？

笑えない冗談だ。

腰を上げてまわりを見渡す。

特に変わったところ……あつた。

誰もが見ただけでわかる。

何10人もの武装した女性が集まつてるのが見える。
ありやあ即通報だな。

都合のいいことにまわりには誰もいない。

なんか気が引けるが話しかけてみるか。

その女性の武装集団に近づく。

「やつぱり一刀か！」

「彼方さん……」

「あらあん？ 帰つたと思つたんだけどーん？」

「まあ別れの挨拶をするくらいの時間はくれるみたいですよ」

「別れつて・・・？」

「悪いが一刀俺は、お前のいた世界の人間じゃないんだ。だからお前とはここでお別れななのさ」

悲しいがな。

弟みたいなだつた奴と分かれるんだから。

「そう・・・ですか」

「落ち込むなよ。俺だつて悲しんだからさ。でも前向いて生きねえと、な？」

「はい・・・」

「よしそれでいい。じゃあ愛紗さんもお世話になりました。その他皆さんありがとうございました」

「いえ我らなど何も・・・むしろ彼方殿に助けられてばかりで」

「はは・・・じゃあな一刀元氣でやれよ」

俺を明るい光が包み込む。

わかる。この世界ともうおさらばなんだつてな。

悲しいけどよお・・・人生出会いがあれば別れもくるだろ？

必ずとは言わないが今回は少なくともその別れにあてはまつちまつたらしい。

楽しかつたぜ！一刀！

そこで俺は意識を失いかけた・・・といひに机の角が頭にヒット！

「グッ！..」

もつ少し優しく家に帰せないのかよ。

あの女だらけの三国志に行つてから今までで一番効いた攻撃だった
ぜ。

「頭が逝きたうだ」

なんにせよ帰つてきたんだな、つづけ。

そして彼の物語はここで終わらない。
次回作をお楽しみに。

（第十八話）最終決戦だ！！何が始まるんです？世界の崩壊だ！！（後書き）

彼「言い残す」とは？

作「この駄文を読んでくださっている皆さん本当にありがとうございます」といひ、「さいました！！」

彼「次回作・・・やるの？」

作「やります。ただしでもまともな文になるといいな

彼「まあ、頑張れよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8193m/>

彼方無双～どきっ現代技術ばかりの三国志～

2011年4月6日01時58分発行